
神様がミスした瞬間に

黒猫ジェラート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様がミスした瞬間に

【Nコード】

N0256T

【作者名】

黒猫ジェラート

【あらすじ】

主人公の白石悠真しらいしゆうまは、何にも取柄がない平凡な高校生だった。将来の夢も「平凡に生きていたらそれでいい」と特に具体的な夢を持たずに平凡をこよなく愛しているちよつとばかり変わった人間だが、

ひょんなことから今まで平凡に過ごしていた日々が非日常へと変わった。そう――すべては、神様がミス（間違えた）した瞬間に……

笑いあり、冒険あり、ラブコメあり？ の異世界ファンタジー小説
です。

まだまだ未熟な者ですが、温かく見守ってやってください。
意外とコメディが多かったり（笑 b y黒猫

プロローグ（前書き）

こんにちはー！！黒猫です。さっそく書いてみました（笑）
文章力がない黒猫ですが、これからよろしくお願いします。
（この小説は実在するものとは、関係ありません）

プロローグ

「キーンコーンカーンコーン……!!」

はあ……やっと7時間目終了のチャイムが鳴ったか。

これが鳴ると授業だけでなく、何もかもが終わって天国に行った気分になるんだよなあ……。

「はい！ 今日の授業はここまでっ！ しっかり復讐——じゃなかった復習してくださいね」

数学の先生が何か一瞬怖いことを言いかけたが、それは聞かなかつたことにしよう。

そう言い終わると先生は教室から出て行った。

「「は——い!!」」

遅えよっ!! 先生もうでて行っちゃたよ。

まったく、ほんとにこのクラスは、バカばっかだ。

そんなこと言ってる俺もそんなに頭はよくないが……。

そして授業が終わるとほとんどの生徒が、ギャーギャー騒いでる。

こんな当たり前の学校生活が俺は、好きだ。

普通に授業を受けて友達と喋って、ご飯を食べて——つまりいいかえると、平凡な日々。

これが俺は好きなんだ。だって平凡ほど幸せなものってないだろ？

おっと、その前に肝心な俺の名前を教えなきゃな。俺の名前は白石しらいし悠馬しゅうま。

愛知県にある東山高等学校に通うごく平凡な高校2年生だ。

さきほどから平凡を強調しているが、それは、何度も言うように俺

が好きだからだ。

変わったもんが好きだなーコイツ、とか思ってるだろ？
別に思ってくれてもかまわない。だって好きなんだから。

好きなものに理由なんていらなからな（フツ）

ごめんなさい。一度でいいからこういう決め台詞を言ってみただけです。

「何こいつー」みたいなにならないでね？

「おおーい！ お前らぁヒツク、もう帰る準備はできたかぁ？ ヒツク」

……悪いな。おそろくなんだこいつは、と思っただろう。

こいつは、うちの担任の杯酒太さかすきしゅうたという名前通りの教師で

酒しか脳にないただのアホ教師だ。そして昼間でも平気に酒を飲んだり、

授業中に急に酒について語りだしたりとほんとに手がおえない教師だ。

最近どうしてこいつがクビにならないのか、と俺は真剣に考え始めてるところだ。

「おーしお前ら、帰る準備できたかぁ？ それじゃー解散！ ヒツク」

なんで同じこと2回言っただよー！ やっぱこいつ確実に酔ってるだろ。

しかもいつも以上に……

「おーい白右！ 一緒に帰ろうぜ！」

「白右じゃねえよ！ 白石だよー！」

「ねえ、良くん。悠馬くんが可哀想だよー」

「ジョークに決まってるだろ！ お前は、ほんとに……」

こいつらの名前を紹介するか。まず俺の名前を間違えたクソボウ——
爽やかな頭の男から。

こいつの名前は、高瀬良。たかせりよう野球しかできないただのボウズだ。
ただし野球の実力は県大会までいくほどらしい。

そしてもう一人の優しい口調の男。あいつの名前は、奥田拓哉。おくだたくや

俺の小学校からの友達だ。とにかく背が高く185cmもあり初対面の人は、

わずかながらビビる。だけど外見とは裏腹にとっても温厚な性格で一度話してみると
すぐに馴染める。

「まあ、帰るか。行こうぜ」

「あつ、ちょっと待って！ これ二人に」

拓哉は、エナメルバックの中からポテトチップスを二つとりだした。

「なんだよ竹哉にしては、気が利くな」

「おいおい、竹哉とか言うなよ……」

なんでこいつが竹哉って呼ばれてるかという、背が竹のように高いからだ。

まあ、悪口ではないけど、からかうときによく使う呼び方だ。

俺は、言わないけどな。

「まあまあ、僕はそんなのどうでもいいから、織田川の近くで食べようよ」

普通は、どうでもよくないと思うんだが……まあこいつだからな。



【帰り道】

良たちとは、川原でポテチ食って、他愛も無い話をして別れた。

良たちとは学校帰りによく、そのまま遊ぶことが多い。だからよく遊んだ場所でそのまま解散になるのだが、俺は、その二人と帰る方向がまったく逆だ。

つまり今もだがいつも、俺は電灯もなく真っ黒な夜道を一人で歩いてる。

なぜ電灯等がないかという俺の家の近くは、昔から土地開発などをしてないらしく電灯もあまりないのだ。

別に俺自身は、暗いところが全然怖いわけではないが———ポンツ！

「うわああ———！！」

誰だ！？ 今俺の肩さわった奴は！？ おばけか！？ 宇宙人か！？

7

「私だよ。鈴木^{すずき}絵音^{かいね}だよ、ユウマー」

「なんだお前かよ……驚かせやがって」

こいつの名前は、鈴木絵音。俺の幼馴染だ。

ルックスは、そこまで可愛いわけでもなくブサイクなわけでもなく、中途半端な存在だ。

「誰が中途半端だってー！？」

そしてこいつはなぜか知らないが俺の心が読めるんだ。変なこと思っただけ。

なんでこいつは、俺の心が読めるんだ！？ といつものことだが、そう思いながら俺は走り出した。勿論逃げるためにだ。

「待ちなさいー！ 何もしないからー！！」

「いや絶対嘘だね！！　だって右手に木刀もってるから！！」

それで何もしない方がおかしいだろう。

「待ちやがれえー！！」

「口調変わってるぞ！？　捕まってるかああー！！！」

普通木刀なんか持ちあるくか？　なんでそんなもん持ってんだよ！

剣道部じゃねえのにと

思いながら走り続け、夜の11時前におまわりさんに話しかけられるまで、

俺と絵音の追いかけっこは続いた。

ブログ（後書き）

どうでしょうか？更新は、できるだけ早くするつもりです。
長い間更新しない場合は、活動報告にて連絡します

キャラクター紹介 (前書き)

ちゃんとうまく書けてるか心配です;;
ちなみに隆斗っていうのは、僕の前作の小説の主人公です。
機会があったらお読みください。

キャラクター紹介

黒猫「どうも！ 作者の黒猫という名のジェラートです」

悠馬「えっと主人公の白石悠馬です。こんな覚えにくい名前の作者でスマン」

黒猫「ゴメン、確かに覚えにくいと思う」

悠馬「まあ、こんなくだらんことはさておき紹介へどうぞ！」

黒猫「隆斗あいつと違ってすごくマジメだ……」

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆

白石悠馬しらいしゆうま 性別..男 17歳

身長175cm 血液型O型 体重62kg

この物語の主人公。髪型は、黒色で後ろ髪の毛が立っている。前髪は、まゆ毛にかかる程度で横髪は、耳にかかっている。東山高等学校に今は、通っている。

好きなことは、平凡。嫌いなことは、非日常。
勉強も運動もそこそこで特に得意なものも今のところなく、
本当にごく普通な高校生である。だけど人助けは、好きでたびたび人助けをする。

白右悠馬 はくゆうま 性別…男 17歳

身長170cm 体重58kg 血液型？

白石悠馬とほとんど同じ名前の同じ東山高等学校に通う同級生。容姿も前髪のセンター分けみたいなの以外は、ほとんど同じ。なのでよく間違われていた。

白石とは、ほとんど面識はなく、クラス表で互いの存在を知った。本当は、白右悠馬が異世界に行く予定だったが、神様がミスしたせいで、白石悠馬が行くことになった。おかげで平凡なスクールライフを満喫中。

鈴木絵音 すずきかいね 性別…女 17歳 血液型B

身長165cm 体重？（聞いたら木刀もって襲われたため不明）

白石悠馬の幼馴染。髪型は、黒色のショートヘアで前髪はヘアピンで止めてることが多い。基本呼び捨てて人をよぶことが多い。

ちなみに美少女ではなく、ブサイクでもなくどちらとも言えない存在。

結構色々な人にからみ、マイペースな性格。好きなことは、絵を描くこと。

嫌いな物は、ピーマン。

高瀬良 たかせりょう 性別…男 17歳

身長170cm 体重56kg 血液型A型

白石悠馬の友達。髪型はボウズでよく悠馬にボウズと言われている。ほかの人を呼ぶときは女子以外は呼び捨てで、女子は、さんやちゃん。

そして髪型からも想像できる通り、野球が得意。

実力は県大会出場レベル。活発な性格で人と話すのが大好き。

好きなことは、野球。嫌いなことは、特になし。

奥田拓哉^{おくだたくや} 性別..男 17歳

身長185cm 体重65kg 血液型AB型

白石悠馬の小学校からの友達。髪型は前髪を目の少し上、後ろ髪は肩より下まであり、くせがあるのに長髪である。

とにかく背が高くいつも竹哉（背が竹のように高いから）と呼ばれてからかわれている。だけど本人は、温厚な性格のためめったに怒らない。

好きなことは、ボードゲーム。嫌いなことは、走ること。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆

黒猫「こんな感じでどうだ？」

悠馬「結構グダグダな自己紹介だな」

黒猫「うっ！ 結構ピンポイントで言いやがって……この取柄なし

「!!」

悠馬「取柄なしとか言うなあー……!!」

キャラクター紹介（後書き）

グダグダかも知れませんが、どうでしょう？

感想・アドバイス・お気に入り小説登録などをしてくれると
ありがたいです。

テストが近くなってきたので更新がきついですが^^；

第1話 平凡は英語で言うとオールドネリー！（前書き）

やっぱりテストで忙しくなるので、

更新きついかも……

（平凡はordinary以外もあります）

第1話 平凡は英語で言うとオウルドネリー!

「はぁ……学校かぁ」

俺は、マンガとかに出てくる幽霊みたいに手を前にだしてブラブラ歩いていた。

俺こと白石悠馬は、ごく普通の高校生だ。

つまりごく普通な高校生ということは平日に学校があるわけだ。

しかも月曜日なんて最悪だ。なぜなら休みの次の日の学校だからだ。月曜日になると毎回、また学校かよ……、といつも思ってしまう。

月曜日の学校——それは学生からしてみたら憂鬱以外の何者でもない。

だから俺は、すごく無気力感たっぷりで歩いているのだ。

（はぁ……なんかおもしれえーこと起こらないかねえー
いくら俺でもこんなに平凡すぎたら嫌になるぜ……）

「そうよねえ、確かにこれは平凡すぎだわ」

「おい、絵音。お前は どうしていつも俺の心の中が読めるんだ？」

案外こいつが面白い奴かもしれない。だって普通人の心なんて読めないだろ？

研究とかしてみたらおもしろいんじゃないか？

「ユウマ、なんか変なこと考えてなかった？」

はい、考えてました。ものすごく。

ただどこかで正直に答えたらまた木刀で追いかけられるから、適当に答えとくのが無難だろう。

さすがに朝から持久走はしたくない。

「別にいい、何のことにも考えていらっしやしませんことですよー」
「ねえユウマ、絶対考えてたでしょ……」

やばい。無茶苦茶変な日本語使っちゃったよ！ うーん……なんとか動揺を隠そうとがんばった挙句、変な日本語になってしまった。てかもう日本語ですらなかった気がする……。俺って嘘隠すのヘタクソなのかな……？

「まあ、今日は許してあげるわ。なぜならアイスで当たりが出て機嫌がいいから。」

その代わり『絵音さん許してくれてありがとう』っていいなさい」
アイス如きで、機嫌が左右されんのかよ、と言いたい所だが命に関わるので止めておこう。

まあ、ここは絵音の言ったことを素直に、サラッと言っておくのが妥当かな？

「カイネさんユルシテクレテ、アリガトウー、そんなじゃまた後でな絵音！」

「こらあー！ー！！ 何なのよ、その棒読みはー！ー！！ 逃げるんじゃないー！ー！！」

「だって逃げないと殺されるもんっ！ー！！」

「大丈夫、絶っっ！ー！ー！対に殺さないから！」

「だったら鞆から出した木刀しまえよ！ー！！」

持久走スタート！！



「ユウマ出てきなさい！ ……今度見つけたらボッコボコにしてやるんだからぁー！！！」

タタタタッー……、絵音が走っていく音が消えてた瞬間、俺はダンボールから出た。

「つたく、なんで朝から持久走とスネー○のマネしなきゃいけないんだよ……」

ここは『ピリリッピリリッー、待たせたな！』 でも言うておくべきかもしれない。

「まあ、とにかくこのまま学校に向かうか……」

「オイ！ そこのお前止まれっ！！！」

何だよ、せつかく俺がマジメに学校に行こうとしている時に……。

「ええと、なんですか？ すみやかに用事を終わらせてほしー」

「お前を直ちに異空間へ転送する。すこし眩しいが我慢しろ」

この日、俺の平凡な日々は非日常へと変わった。



【異空間】

「目を開けろ、悠馬」

「ここは……？」

俺は目を覚ますとまったく知らない場所にいた。別にそれだけならなんともなかった。

ただどこは見渡す限り何もない。草も虫も家具も日光も。ほんとに何もなかったあの空間にポツンと俺がいるだけ。

「えええっー！ー！ー！！ここどこだよおおー！？」

「うるさいなー、おぬしは分かっておるじやろ」

俺の目の前には、仙人みたいな格好をしたヘンテコな老人がいた。この老人以外あたりには何一つない。

「何が分かってるじやろ、だよ。俺は何でこんなところに連れてこられたんだ？」

まったく話が見えないんだが……」

なぜか知らないが思ったより俺は冷静だった。

「まったく……説明するのがめんどいんじゃないよ」と仙人みたいな奴は、前置きをおいて

「私は、地球に存在しておる神様のうちの一人じゃ。

そして貴殿、白右悠馬しらいしゆうまは、現実世界で人を4人も殺したので私が警察に捕まるより先にここへと転送した。罰ゲームをやらせるためにな」

……ちよつとまてよ。俺は夢でも見てるのか？
目の前にいるのが神様で、異空間に転送された？　そして俺は人殺
ししたことになる。

そして罰ゲーム？　だめだ。まったく意味がわかんねーよ……………。

「おい、俺は人を殺した覚えねえぞ」

「だって書いてあるんじゃないよ、ここに」

俺は、さっき神様が読んだ文を読んてみた。

フンフン、なにになに……オイ、待てよコラ。

「このクソ神いいー！！　ここしつかり見ろやああー！！」

「だから白石悠馬と書いてあるじゃろ？」

「しつかり見ろ！！」

そして貴殿、白右悠馬は、現実世界で……………

『……………』

しばしの沈黙。

「ありゃ？　間違えた？」

俺は17年間の人生でここまでむかついたことは、今までになかつ
たかもしれない。

「なめてんのかああー！！？　これどう見ても、同じ学校の白右
悠馬^{ゆうま}だろおーがっ！！　なんで俺がこんなとこに来なきやいけない
んだよっ！！」

「なんで同じ学校にほとんど一緒の名前があるんじゃあー！ー！ややこしいわー！！」

「何逆ギレしてんだよ！　こうなったのもてめえのせいだろうが！！」

なんでどっかの小説の主人公や漫画の主人公みたいな不幸な目にあわないといけないんだよ！！

「もう我慢ならねえ！　くたばれえー！バカ神！！」

神様相手に戦えるか分からないけど、こいつは絶対殴りたい！！

「上等じゃ！！　返り討ちにしてやる！！」

神と自称平凡な高校生との喧嘩けんかが始まった。

第1話 平凡は英語で言うとオールドネリー！（後書き）

基本僕の小説は、一話が短いので短い時間にも読んでいただけると幸いです。そして感想等お願いします！！

第2話 人を見かけで判断するな！（前書き）

やっとテスト終わったけど……死んだ。

第2話 人を見かけで判断するな!

「おい、ハアハア。一旦休憩しないか?」

「そうじゃな、ハアハア。休憩するか」

神様相手に意外と互角にやりあえたことがすごかった。

まあ、普通に拳だけの勝負だったからかも知れないけど。



「それじゃー話を整理するか……」

と一言置き、

「ようするに俺は白右と間違えてここにつれてこられた——それでいいんだな?」

「ああ、そうじゃ。すまんのー……」

いや正直スマンですむような問題じゃないんだが……。

「まあ、俺を元の世界に戻してくれ。そうすりゃ済む話だろ?」

「スマンがそれは無理じゃ。わしが間違えてお前をここに連れてきたことを」

知られると神様クビになってしまうからのお……」

神様にクビとかあんのかよ……。ん?　　さてよ?　　ということは……!!

「——ってお前がクビになりたくないだけだろおがっ——!!」

「当たり前じゃろ!?　クビなんてやだもーん!　金もらえないもーん!」

こいつマジで殺してえ……！

「まあ、4人も人を殺しやがった白右は、きっちり刑を与えるからそれで許してくれ」

「そんなんで許せるかぁー！ー！！俺にメリットまったくないだろ！？」

「っていうか、前回突っ込んでなかったが、あいつ4人も人を殺したのかよ！？」

俺そんな人と平気で喋ってたのか……。今思うとかなり危なかったな、俺。

「まあ、落ち着くのじゃ、お札に異世界『グラニデ』につれていてやるから、

チート能力つきで。どうじゃ？ 今時の子はそういうの好きだろ？」

「んなもんいくかー！！早く元の世界に返せ！ バカ神」

「バツ、バカ神とはなんじゃー！！」

「だから早く俺の平凡返せよ！ バカ神！！」

「そ、そんなこと言うとかチート能力なしで異世界におくっちゃうぞ！ へたしたら死んじゃうぞ？」

「そんなもんいらねえよ。送れるもんなら送ってみろよ、バカ」

「つ、ついに神すらつけてもらえなくなった……。ええい！ こうなりやヤケじゃ！」

バカ神は、そんなこと言うとか魔方陣を書きだした。

俺からみたらただの落書きに見えるんだが――

「せいぜいさっき言ったこと後悔するんじゃない！」

バカ神が、その言葉を言い終わった瞬間にあたりが眩しい光に包ま

れた。

「バカ神いいーーーーー!!」



【異世界グラニデ 森林】

「ここは……どこだ？」

白石悠馬は、一人森林の中にいた。辺りは、知らない草や花ばっかだった。

しかもどこもかしこも同じような景色で迂闊に動くと迷子になりそうなくらい広い。

これってまさか……!?

「まさか俺ほんとに異世界にきた？」

おいおいマジかよ……。あのバカほんとに送りやがったのか……。

さてこれからどうするか。まずこの手の世界は、とにかく武器もなにもなしでうろつくと危険だ。

しかもあのバカがチート能力とか言っていたから、魔物みたいな危険な生き物は、必ずいるだろう。

もしそんな奴に今の俺が、あつたら間違いなく死んでしまう。なぜなら武器もなにもない丸腰状態だからだ。別に普段から筋トレ

とかしてるわけでもないしな。

あれ？ でも俺もう死んでるから関係ないんじゃない？

「ん？ ポッケになんか入ってるぞ」

あのバカからだろうか？ なになに――

拝啓 バカ白石

これもう読まなくていいよね？ もう読む気がうせたんだけど――

読まないとお前は本当に死ぬ。

よし、読むか。折角神様が書いてくれたんだし、あれ？

読まないと本当に死ぬってことは……！！

どうじゃ？ 困ってるか？ 一つ伝えたいことがあったの、その世

界でうまいことやったら

元の世界に戻るかも知れん。まだハッキリとは、分からんが……。

だけどそっちの世界で死ぬともう二度と動けなくなるし、元の世界にも帰れなくなる。

それだけじゃ、後はなんとか自分でやりな。クズが！！

………なんてムカツク奴なんだ。しかも最後口調が思いっきり変わってたし。

とりあえずこの世界で死なずに何とかやってけば、元の世界に帰れるわけか。

「よし、やるぞおおー！ 『ガウー……』ーおお……」

あれ？　なんか今変な声が聞こえたような……いやいやそんなすぐに危険生物と遭遇するか？

気のせいだろ、と思いながら後ろを振り返って見ると――

可愛く言うと、ちょっとばかりでかいプー〇んと戯れている。

リアルに言うと、巨大熊または、アオ〇シラに襲われかけている。

「……あ、やばい死んだか？　俺」

言ってるそばから大きいクマと遭遇してしまったぁ――！！　死亡フラグなんかたてたっけ？

クマの大きさは、俺＋100cmはあるんじゃないか？　なんかの本で読んだが

逃げるとクマは、獲物だと思って追ってくるらしいし、死んだフリなんて論外。

そうなる選択肢はただ一つ！！

「こうなりゃ神頼みだ――！！　　バカ神以外だけど、うおお――！！！！」

俺は、素手で巨大熊に突進していった。

そして後に俺は、このときなんでこんなことしたんだろう？　と後悔することになった。

第2話 人を見かけで判断するな! (後書き)

更新遅くなってすみませんでした!

おきにいい小説登録ありがとうございます!!

黒猫も応援してくれるとモチベーションが上がります。
ぜひともアドバイス等よろしく願います。

第3話 デジャブ? デジャヴ? どっちが正しい? (前書き)

結構早めの更新です。

サブタイトルいいのが思いつかなかった……

第3話 デジャブ? デジャヴ? どっちが正しい?

「ここは……どこだ？」

俺は、目が覚めると知らない場所で寝ていた。

あれ? このセリフにシチュエーション最近言った覚えがあるような……。

こういうのデジャブって言うんだっけ?

てか文字表記にするとデジャブだっけ? それともデジャヴだっけ?

どっちが正しいんだったっけ?

「あれ? 目が覚めた？」

俺は突然声をかけられたのでびっくりして起き上がった。

周りを見渡すと本棚があり、ベッドがあり、テレビがあり、女の子がありと

ごく普通な部屋にいるわけなんだが——って

「女の子!？」

「何驚いてるのよ。女の子なんてどこにでもいるでしょ?」

確かに女の子は、どこにでもいる。ただしその中の3分の2は、恐らく可愛くない子だろう。

可愛くないわけではないと思うが、17年間生きてきた俺の感覚では男でも女でも化粧とか整形をせずにも、元の質が良すぎるイケメンや美少女がいる。

——それには恐らくどんだけ化粧などの努力をしても敵わないだろう。

そして今ここにいる女の子がそれに当てはまっているわけだ。

顔立ちがよく、身長は俺より10cmくらい小さくて、スタイルも

よく健康的な体をしている。

髪型は肩にかかるくらいのセミロングで、癖は、ほとんどない。
髪色は、どちらかというところ黒で、すこし茶色がかってる。

「悪い。いきなりのことで驚いただけだよ。ここは、君の家なのか？」

そういえば、異世界なのに日本語通じるのか？

「そ、そうよ。ここは、私の家よ」

あ、普通に通じた。

だけど初対面だから緊張している感じがしてる。

「とりあえず助けてくれてありがとう。俺の名前は、白石悠馬。君は？」

「私の名前は、アクアⅡアランⅡヒートよ。友達は、アクアって呼ぶわ」

「そうか、よろしくアクア」

「こちらこそよろしくね（ニコッ）」

やっぱり笑うともっと可愛くなるな。元がいいからかな？

そういえば、この世界ってどんなところだろ？

あのバカ、なにも言ってくれなかったからな……。またなんかポツケに入ってるかな？

「あれ？俺の服は？」

今改めて見ると俺の服じゃなかったりする。
わざわざ買ってきてくれたのかな？

「泥まみれだったから洗濯しといたわよ。何かまずかった？」

「いや、むしろ感謝してるよ。ありがとね（ニコッ）」
あのバカがそんな気遣いするわけないしな。

「べっ、別にこれぐらい当然よ！あと……。その……。何も見てない

からっ!!」

恥ずかしそうに頬を赤く染めてそう言い残すと、アクアは部屋を出て言った。

なんでそんな恥ずかしがってんだ？ 俺なんかしたか？
別にアクアは、俺の服を洗濯しただけだし……………。

「ん？ 洗濯したって——まさか!!」

洗濯する↓服を脱ぐ↓下着も脱ぐ↓裸をみられEND☆

「最悪だ……。いきなり無茶苦茶気まづくなっちゃったよ……」

そして待つこと15分。

俺は、一人でこれからどうしようかと考えていると突然ドアが開いた。

「たっ、ただいまっ!!」

「おっ、おかえり!!」

しばしの沈黙。

〈悠馬視点〉

やばいんだけど、何これ？ なんてこんな初対面の人とギクシャクするんだよ!

何なのこれ？ 一種の拷問？ この空気耐え切れないんだけど!?

くアキラ視点く

どうしよう……。なんか私すごく胸がドキドキしてる……。！
ユウマの裸を見たから？ いや、私は見てない、見てない！！
っ、あれはノーカウント！！
だから落ち着きなさい、私！ 落ち着け落ち着け……。！。

「「……あの！！」」

なんでかぶるんだよ！ 俺どんだけタイミング悪いの！？
とりあえずここは、男の俺がっ！！

「わ、悪いな。変なもの見せちゃまって！」

「こ、こちらこそ見てしまっ……／／／」

慣用句・墓穴を掘る

意味・身を滅ぼす原因を自分から作ることのたとえ

またもやしばしの沈黙。

く悠馬視点く

くそ！ 会話が続かねえ！！ どうしたらいいんだ！？

くアキラ視点く

どっ、どうすれば!?! とりあえず何か話題を作らなきゃ!!
そうだ! どこから来たか聞こう。うん、我ながら名案だわ!!

「えっと……どこから来たの?」

「日本っていう国から来たけど、どこ分かる?」

「ニホン? 聞いたことない国ね……」

「やっぱりか……。ところでここはなんていう国?」

「ここは、グラニデという国でありグラニデという世界よ。そんなことも知らないの?」

そうか……。やっぱり俺は、異世界に来たんだ。そんな名前の国や世界なんて地球上には、存在してなかったからな……。

「こんな話信じてもらえるか分からないけど、俺はこの世界じゃなくて違う世界からきた。だから色々この世界のこと教えてくれ!」

「違う世界?!? それってどういうこと!?!」

………事情説明中………

「なるほどね。ユウマは、チキュウという星のニホンからきたのね」
「ああ、そうだ。あとはさっき言ったとおりだ。アクアは、ここで一人で住んでるのか?」

「うん、私がまだ幼い頃に親を亡くしてね……」

まずいこと聞いちゃったなあ……。この人と相性悪いのか、俺。

「あっ! 別に気にしなくても大丈夫よ? ところでユウマは、な

んであんなとこで倒れてたわけ？」

「いやでっかいクマに襲われてさ。素手で戦ってたら、勝てるわけがねえ！　　と思って逃げてる途中に転んで……そっからの記憶がないんだ」

「ようするにそっからは、気を失ってたということね。そこで私に発見された——てかアンタ素手でクマと戦ったの？　　バカでしょ」

失礼な。俺は人並の学力はあるぞ！！

「まあ、いいわ。今からこの世界のこと教えてあげる」

「おう、ありが——（ぐうぐう）……」

「あれ？　　もしかしてお腹すいてるの？」

うっ！　　そういえばあれから何も食べていなかったな……。

「ちょっと、まっててね！！」

そういう残すとアクアは、台所らしきところに向かっていった。そして待つこと1分。思ったより早く帰ってきた。

「はい、これ食べて！」

「これは、クッキー？」

「そうよ、私が焼いたのよ。お、おいしいかは、分からないけど……」

「（カリッ！）うめえ！　　これなら何個でもいけるぜっ！！」

「ほんと！？　　ありがとう！！」

いやこれもう普通にうまい。カリッとした触感に、いい具合の甘さ。これもう普通にお店だせるんじゃない？

結局俺は、クッキーを食べ終わるまで一言も話さず黙々と食べ続けた。

そしてアクアは、ただひたすらに恥ずかしそうに俺とクッキーとを交互に見ていた。

第3話 デジャブ? デジャヴ? どっちが正しい? (後書き)

どうでしょうか? 自分の文章力のなさには、毎度泣かされておりますが

前作よりかまともになってると思います。(自分では……)

第4話 異世界グラニデ

「ふう〜食った食った!!」

俺は、クッキーを残さず全部たிரげた。正直お腹がすいてたから助かった……。

「それじゃー説明するわね。まずこの世界についてね」

「ここ、私達が住んでいるのは、あなたからみて異世界の『グラニデ』という世界なの。そしてグラニデは、魔法が使えて話す言語もあなた達と共通言語。食べる物も見つた所ほとんど同じのようね」
確かに話す言葉も食べる物も一緒だったな……。ずいぶんと都合がいい世界だ。

「えっと——悪いが魔法ってのがイメージしにくいんだ。もっと詳しく教えてくれないか？」

日本は別にファンタジーな世界じゃなかったし、マンガとかでしか見えないから結構うやむやだ。

「いいわ教えてあげる。この世界の魔法ってのは、地・水・火・風の四大元素から成り立っているの。これらのことを属性っていうのよ。水属性みたいにね。ちなみにこの世界に來たときからもう使える属性は決まってるわ。もしくは、この世界で生まれたときにね。だけど例外的にこの四大元素以外の属性、闇・光といった極稀な属性も存在するの。ほんとに稀だけど、ね？ 私が17年間も生きていてもいまだかつて實際に見たことはないわ。そして魔法には、上級魔法・中級魔法・下級魔法というふうに3つのランクに分かれているわ。その中でも上級魔法を使う時は、詠唱えいしょうというものが必要に

なってくるわ。とりあえず基本的な説明は、これくらいかな？」

なるほどな……。17年間ってことはアクアも俺と同年か。

それはさておきこの世界の魔法ってのは、超能力みたいな物ではないのかな？

どっちかって言うと、ドラ○エみたいなバギク○スとか見たいな攻撃魔法みたいな物だな。

「その——魔法ってのは、みんな使えるのか？」

「あっ！ それ説明するの忘れてた！！」

ちゃんと説明しろよ、と言いたいと言ったらおそらく命に関わるだろう。

だって魔法とか使う世界なんだから。一瞬で殺されかねない。

「もう一つ、この世界に生まれたまたは、来た瞬間から決まってることがあるの。」

それは——種族よ！！」

種族？　なんかあまりパツとしない感じだけど……。重要なのか？

「この世界には大きく分けて3つの種族があるの。全体の人口を10割と考えるとね。一つは、武器特化種族。武器の扱いに非常に長けている種族のことよ。」

私もそのうちの一人よ。魔法も使えないってわけじゃないけど、ほとんど使わない。どうしてかっていうと、名前から分かるように魔法は、あまりうまくないのよ……。

うまくないもの使っても得にはならないでしょ？

そしてこの種族は、人口の約5割くらいともっとも多いわ」

なるほどな、武器特化ってことは近接戦になったらやりたい放題だな。

「そして二つ目は、魔法特化種族。これは武器特化種族の反対の意味よ。

つまり――」

「魔法を使うのに長けているっていうことだろ？　そして武器を使うのが

あまりうまくないってことか」

「あら、意外と頭の回転が速いじゃない」

余計なお世話だ、といたいのが武器でボコボコにされたくないのと言わないでおう。

ほんとに死んじゃうからな。

「そして人口の約4割程度ね」

「ん？　そしたら後1割は？」

「その1割しかいない種族ってのも光・闇属性なみにレアだわ。

その名も武魔^{ぶま}特化^{とくわ}種族。文字通りの意味ね。

武器と魔法両方使えるってこと。勿論両方とも使うのは長けているわ」

「なるほど……。そういえばこの世界に魔物とか存在したりするの
か？」

話から察するにこの世界は、とてもファンタジーな世界だからな。
いてもおかしくないはずだ。でかいクマともあったし。

「勿論いるわよ。まあ、中でも魔物にも人間にも属さない種族とか

もいるけど……」

そういうとアクアは、うつむいて何かブツブツ言い出した。

「おいどうした？ アクア？」

「……うん……そうよね……決めたわ。あなたも明日私と一緒に学校にきなさい！！」

「がっ、学校おおー！ー！？」

「そうよ。明日は、はやいからもう寝ましょう」

「そして俺のリアクションはスルーですか！？」

気がつくともう、日はすっかり暮れていた。俺達こんなにも話してたのか……。

てか異世界にも学校なんて物があるのかよ……。いや別に嫌ではないんだがな。

なんていうか、あまりそんな気がしないってゆうか……。

「そういえば、お風呂ってはいらなくてもいいのか？」

「うん、私は入ったし……ユツ、ユウマも入ったからっ！！／／／」

「そっ、そうか！！ ありがとなっ！」

気まずい空気とは、きつとこのことなんだろう。

もう俺、お婿にいけないっ！！ まさかお風呂まで入れてもらってたとは……。

「だっ、大丈夫よ！！ 目隠しして入れたし……。そ、それよりも寝るところどうしょ？」

よく目隠ししてお風呂に入れたな……。……。

ここは、冗談でも言って気まずい空気を取り払うか！！

「一緒に寝るとかどうーグヘッ！！」

「いつ、いいわけないでしょっ!？ この変態いいー!」
そういつてアクアは、部屋のドアをして階段をのぼっていつてしま
った。

「ううっ……冗談だったのに（ガクッ）」

俺は、そのまま気を失い結局床で寝ることになってしまった。

第4話 異世界グラニデ（後書き）

誤字、脱字等いろいろとあとで編集してますんで
暇があってもう一度読み直すと表現が変わっていたらすみません。
（誤るのも変だけど）内容が変わることはない、おもいますけど
ね……

第5話 学校が休みになると一気にテンションUP!! (前書き)

明日休みにならないかな……

第5話 学校が休みになると一気にテンションUP!!

「ユウマおはよう! どう? よく寝れた?」

朝の7時に俺は、アクアに起こされた。

寝れたには、寝れたが体中が痛い。

なぜなら前の話を見てくれたら分かる通り、俺、白石悠馬は昨日アクアに暴行を加えられ気を失い、床で寝てしまったからだ。

「寝れたには寝れたが、体中がいてえんだよ……いっ!」

「そう……それは災難だったわね」

お前のせいでこうなったんだよ!

「とりあえず朝食でも食べましょ! もう作ってあるから」

「おっ! 早速食べようぜ!」

俺は痛みも忘れてイスに飛び乗った。

アクアの作る料理は、おいしいんだよね。まだ一食しか食べてないけど……。

昨日のクッキーも相当レベルが高かったから、朝食もかなり期待できる。

そうこう考えている内に朝食ができたらしい。アクアがおぼんに朝食をのせてやってきた。

エプロン姿で。

うーん……やっぱり女の子のエプロン姿は、見てるとなんとなく心にグツとくるものがあるんだよね。

「なっ、なにジロジロ見てるのよ! また殴られたいわけ?」

「いや、俺はそんなMじゃない!」

「私はどちらかというとなの！」

「そんなこと知るかっ!!」

なんかこのままだと理不尽に殴られそうだから、話題をそらすか。

「とりあえずはやくご飯食べようぜ! アクアの料理おいしそうだし」

「それもそうね。はい、どうぞ! 好きなだけ食べてねっ」

「おおおー! いっただっきまーす!」

朝食の飯は、俺が予想した通りだった。洋食っぽい感じでクロワッサンにコンスープ
ベーコンとスクランブルエッグそれにヨーグルトと理想の朝食だった。

しかもアクアが言うには、ほとんどが手作りらしい。
純粋にエライと思う。

「うめええー! お前ほんと料理うまいよなあ!」

「あ、ありがと。なんかそんなに褒められると恥ずかしいよ……」

アクアは、顔を赤くしたまま俯いてしまった。

別に照れることはないと思うんだけど……。

休む暇もなく食べているうちに、気がつくとして食べてしまっていた。

「悪い、全部食べちゃった……」

「気にしなくてもいいよ。私も先食べてたし、それに……おいしい、おいしいって言って食べてくれた方が、作ったほうとしても嬉しいからね!」

確かに作る側としては、そうだろう。

俺は料理ができないわけじゃないが、別に得意じゃない。
だからたまに作るくらいで、自分からすすんで誰かに作ったりした
ことはない。

「そういえば、学校って何時に行けばいいんだ？」

「えっと入学説明書には、7時半に体育館にきなさい、って書いて
あるけど……」

現在の時刻・7時15分

これは、遅刻フラグが立ったか？

「ちなみに聞くけど学校まで歩いて何分？」

「ここは、街の中心だからスクールバスを使って行くわ、バスを使
えば5分でいけるわ」

「バス停までは？」

「歩いて8分」

「「……………」」

ふう〜……。これは、80%の確立で――

「「遅刻だああー……………!!」」

俺とアクアは、全力でバス停まで走っていった。



「えー、以上で私の話を終わります。これからはヒストン学園の生徒としての自覚を

忘れずがんばっていきましょう」

「一同礼!!」

「それでは各教室に移動してください」

俺とアクアは、なんとか3分前に体育館に到着した。

そしてトイレに行く暇もないまま入学式みたいなのが始まり、校長の話を「長げーよ!」と思いながらも我慢して聞き続けて、今さっきの礼が終わった瞬間、俺はトイレへとダッシュして今に至るわけである。

やっぱ校長の話が長いってお決まりだよな?

「いやートイレは落ち着くねえ……」

「そうだねえー」

「「お前、誰だぁー!」」

失礼な、普通初対面の人に指さすか? そもそも人に指をさすのは、常識的におかしいと思う。

でも聞かれたからには、名乗っておくのが礼儀ってものだろう。

「俺の名前は、白石悠馬。今日ここヒストン学園に入った1年生だ。気軽にユウマって呼んでくれ」

「僕の名前は、セシルⅡラグナロク。君と同じでさっき入学式終え

たばかりの

1年生だよ。セシルと気軽に呼んでくれ」

そして互いに「よろしく」といって握手をした。

うん、今回は初対面の人と気まずい空気にならなくてすんだみたいだ。

セシルⅡラグナロクと名乗った少年の特徴を説明するか。

身長は、俺とほとんど一緒くらいだ。髪型は、前髪が目より少し上にあり

後ろ髪は肩より5cmほど上と男の子にしては、なかなかの長髪だ。髪色は、黒色で癖がすこしだけある。

「ところで僕達、何クラスになるんだろうね」

「そうだなー、ここにいても分からないからとりあえず外に出ようぜ」

外に出てみたら、教師みたいな人が俺達に話しかけてきた。

「新入生の方ですよね？ えっとユウマさんとセシルさんですよね」

「確かにそうだけど——なんか用ですか？」

俺なんか変なことでもやらかしたか？

「えっと……もうみなさん自分の教室に行きましたよ？ 行っていないのは、

あなた達だけかと……」

「「それを先に言えよ!」!」」

「とりあえずお二人とも同じクラスですけど、一応紙を渡しておき

ますね」

教師から渡された紙には『Cクラス』と書かれていた。

「急ぐぞ！ セシル！！」

「勿論だよ。ユウマ！」

俺は、本日二度目の全力ダッシュをした。

第6話 苦手だと思っていた人も話してみると……（前書き）

テストが94人中29位と個人的には、よかった。
どうでもいい話ですいません。

大事なのは、前回の話で名前を間違えて書いてしまったので修正しておきました。

ごめんなさい。ラグナⅡフェルクルではなく、セシルⅡラグナロク

第6話 苦手だと思っていた人も話してみると……

「先生、遅れました!!」

あれから俺達は、学園内を先生に注意されながらも全力で走ったが、当然間に合うわけもなく出席点呼に遅れてしまった。

「お前達遅いっ! もうとっくに移動の時間は過ぎてるだろ!!」

「すいません、色々と大事な用事がありました……」

「まあ、悪気はないんだろうが……自分で座席表を見て席に着くんだぞ」

そういったのは、おそらく俺達の担任だろうと思われる先生だった。

「よし、これで全員席についたな。全員集合したので自己紹介をしたい。まず俺からだ」

自己紹介と聞いて教室がざわめいた。

無理もない、普通いきなり赤の他人に自分のことを教えるとなるわけだから嫌な人は、嫌だろう。

まあ、恥ずかしいって理由が一番だと思うけど……。ただどそうじゃなきゃ自己紹介の意味がないけどな。

「俺は、この1年C組を担当するディオだ。ディオ先生と呼んでくれ。」

好きなものは、身長が小さくて幼い顔立ちの女の子だ!」

クラスの空気が一瞬にして凍りついた。まるでドラ○エの攻撃呪文マ○ヤドを食らったみたいに。

そしてクラスのあちこちで

『あの先生、ロリコンかよ!?!』

『結構いい男——先生だと思ったのに……』

『はあ、死にたいなあ……』

と落胆の声が上がった。そして俺の聴力が正しければ、一人自殺願望者がいた気がする。

「うそうそ、冗談に決まってるだろう! まあこんな感じで自己紹介を進めてくれるといいという手本だ。それじゃー出席番号1番のアクアから。ちなみに本当に好きなものは、たこ焼きだ」

その言葉を言った瞬間クラス中が温かな空気になった。

至る所で『俺もたこ焼きが好きだー!』とか『良かった。ロリコン教師じゃなくて』

といったほんわかな雰囲気になった。そして読者のみんなは、分かっていると思う。

ひさしぶりにこの言葉を使うけど……平凡はやっぱいいなー。

俺もあのバカの間違^{ミス}いがなければ、平凡なスクールライフが過ごせていたのにな……。

でも、この先生。俺の前の担任の酒バカより100倍はいい。

なぜなら叱るときは、しっかり叱っているし、笑わせる時はちゃんと笑わせている。

異世界^{ここ}の教育がどんなものか知らないが、この先生は率直にすごいと思う。

「あの一……ユウマ? そろそろ話進めていい?」

「あっ、悪い悪い。どうぞどうぞ」

てかあいつは、なぜ心の中が読めたんだ!? まさか絵音みたいな

ヘンテコな能力が!?

でも今まで話してきたけど、そんな素振りは全くなかったから、勘

かな？

むしろそうであって欲しい。

「私の名前は、アクアⅡアランⅡヒートよ。今わけありでユウマと一緒に過ごしてるけど、そんなこと気にせずにとんどん話しかけてね！！　よろしく！！」

『おい今の聞いたか？　ユウマⅡシライシとかいうやつあんな美少女と同棲生活をしているらしいぞ』

『そいつは、許せん！！　直ちにユウマⅡシライシを処刑するぞ！』
『待つんだ。今は先生がいるから、また後でゆっくり殺^やろう』

なんかすごく不穏な言葉が聞こえたんだけど！？　なんか俺をやるとか。

あいつらの動きには、警戒したほうがいいな。
ここの世界だと本当に殺されるから……。とりあえず適当に名前でも付けとくか。

んー……順番に男子生徒A、男子生徒B、そして男子生徒Cだとつまらんから

男子生徒Gでいいな。GとCってなんか似てるし。

そして俺は警戒をしながらも順調に自己紹介は進んでいき、見覚えのある男の子が立ち上がった。

「僕の名前は、セシルⅡラグナロク。みんなも知ってると思うけど、さっき遅刻してきた人です。はい。気軽に話してくれるとありがたいなー……なんて。よろしく」

ずいぶんと控えめな挨拶だな……。そういう性格なのかな？

クールキャラってやつだな。

「はい、次。ユウマⅡシライシ！」

こっちの世界では、白石悠馬は止めてユウマⅡシライシと名乗ることにした。

どうやらこっちの世界では、人の名前に漢字を使わないらしいからだ。

「えっと、ユウマⅡシライシです。みなさんに言っておきたいことがあります。

これを聞くと多分驚くと思うんですが――僕は異世界から来ました」

「「!？」」

俺が予想していた通りみんなが、ものすごく驚いた顔をしていた。

（一人を除く）

まあ、無理もないか……。俺だって相手の立場だったら驚くし。

「シライシ！　ほんとなのか！？　だとしたら元の世界に戻らないと行けないんじゃないか？」

「戻りたいには、戻りたいんですがまだ戻る方法が分からないので……」

「そうか……。なら、それまでこっちの世界でゆっくりしていきなさい。こっちの常識は後ほど色々教えてあげよう」

「ありがとうございます！！」

そしてその後も自己紹介が進んでいき、みんなが俺の方をチラチラ見るだけで無事に終わった。

多分異世界ってのが珍しいからだろう。若干殺気がこもった視線も感じたけど。

「いやゝ実に個性的なクラスだな。異世界の人がいるし、ユウマを殺したいとか、

とにかくユウマを切りきざみたい人もいるそうだな!!」

「ディオ先生!? 明らかにおかしいの混ざってますよね!」

おそらく男子生徒A・B・G達だろう。あいつら以外に思い当たるやつがいない。

「ユウマ、ナイス突っ込み!!」

「いや、セシル。それより先生がいった言葉の意味を考えてくれ。

そして俺の身の心配をしてくれ」

突っ込むところが違うぞ。そしてあいつツツコミが好きなのか?

「落ち着けお前達。先生から重大発表がある。明日ほんとにいきなりだが――第一回新入生、サバイバル合宿を行う。放課10分が終わったら、詳しいことを説明する。アクア、起立礼を頼む」

何だソレえええー!?!?!?!?

なんかいきなり俺の身が危ないんだけど!? サバイバル? なにそれ?

鯖が威張るの!?

「あつ、ハイ! 起立! 礼!」

「「ありがとうございますー!?!?!」」

『サバイバル合宿ってなんだよー』

『なんか大変なことになっちゃったよねえ』

確かにいきなり大変なことになっちゃったな……。気のせいか俺が思うに、もうさっきまでの平凡は、帰ってこない気

が
する
……。

第6話 苦手だと思っていた人も話してみると……（後書き）

学園物語を読んでもくれた方は、思わずニヤっとする話になったと思います。

あのサブキャラがゲスト出演です（笑）

同一人物ではないですけどね。だけど性格とかはほとんど一緒だったり…

第7話 3日間の間0円生活だぁー！ (前書き)

お気に入り小説登録ありがとうございます！

贅沢ばっか言ってますが、感想をくださるとありがたいです。

(特にダメなところをアドバイスしてくれる方やモチベーションをあげて

くれそうなコメする方)

第7話 3日間の間0円生活だぁー！

『キーンコンカンコーン……………』

「よぉーし、チャイムが鳴ったから席につけ!!」

なにが、よぉーしか分からないがとりあえず言われるままに席にいた。

今改めて教室を見てみると俺の世界の教室とたいして変わらないことに気づいた。

変わってるところといえば黒板じゃなくてホワイトボードを使用しているところぐらいだろう。

「いいかお前らぁー！ 分かってると思うがこのサバイバル合宿は、そんなに甘くないぞ」

いや、甘くないって言われてもこの世界に来て1日しか経ってないから、まったく分からないんだが……というのは、このさいスルーしておくことにしよう。

「先生！ サバイバル合宿ってどんなことをするんですか？」

一人の生徒が質問をした。確かに俺もすこしばかり気になっていた。これの返答によって俺の命の危険度も変わるしな……。

「どんなことをするって？ それは勿論——!!」

このパターンから察するに嫌な予感しかないんだが……。

「3日間の間0円生活だぁー——!!」

どうやら俺はここで死ぬらしい。

『マジかよ……!!』

『食料とかでんのかな?』

『やっぱり死のうかな……?』

「にしても、こっちの世界もお金の単位は、円なんだなあ」

「ユウマ突っ込むとそここかよ!!」

「おっ、セシルだっけ? ナイス突っ込みだ!!」

「ディオ先生ありがとうございます」

こいつ、とことん突っ込みポジションだな……。

どっかのメガネアイドルオタクの新ぱ「ピーー」と同じだな。

黒猫「オイ、こら。著作権とか考えろ!! 結構いつも気使ってるんだよ!」

「なに出てきてるんだよ……。分かった分かった、気をつけるから」

黒猫「ならよろしい。くれぐれも注意しろよ」

「ヘイヘイ」

あいつ何であんなに上から目線なんだよ。化学のテストの点数「ピーー」だったくせに。

黒猫「それも言うなあぁー!!」

「ヘイヘイー」

「それでは詳しくルールを説明しよう。この学園の東に森林があることは知ってるな。

そこで5人一組のチームで3日間0円で生活してもらう。持っていていい物は、衣服、

各々の武器、1?の水と――学園側から支給されるもの、それだけだ。

勿論ほかのチームから物・食料を奪うのもありだぞ。正し武器を

奪うのは、禁止だぞ」

「東にある森林って東ブロックのエルロイド森林ですか？」

「そうだ。勿論3日間の間そこから出ちゃいけないぞ」

東ブロック？　なんだそれ。

「よし一通り説明がすんだから、もう今日は帰っていいよ。明日の準備をしっかりと置いて置くんぞ!!」

「先生。チームはどうするんですか？」

「すまん。忘れていた」

「それ一番忘れては、いけないものですよね!？」

アイツ本当に突っ込むの好きだよな……。

「ここにクジで決めたチームが書いてある。みんなチーム表をみてから帰るように——と」

ん？　どうしたんだ？

「ただし、ユウマのチームだけは残るように」

「なんで俺のチームだけなんですか!？」

「まあまあ、落ち着けて」

なんか腑に落ちないけど、残ることにしよう。とりあえずチーム表でもみるか。

えっと俺のチームは、

？ユウマⅡシライシ　？アクアⅡアランⅡヒート　？セシルⅡラゲ
ナロク

？レインⅡフェルクル　？ルナⅡドウペント

なんか知り合いが多い気がするんだが……。これはあれか？
作者の都合上で一緒にしておかなきゃまずいつていう奴なのか？

「よろしくね、ユウマ。えっとセシルでいいかな？」

「構わないよアクアさん。まあ、僕なりにできる限りのことをするよ」

こっちは見知った2人。気を使わなくていいってのがいいところかな。

「初めまして。私の名前は、ルナⅡドウペントと言います。よろしくお願いしまあゝす」

なんともまったりとした感じで喋りながら歩いてきたのは、ルナⅡドウペントという娘だ。

見た目は――かなりの美少女だな！　なぜかこっちの世界にきてから美少女に会ってばっかだな。

白と茶色をまぜたような色の髪をしており、髪型は腰まであるかな
いかのロングヘアー。

癖は、なさそうだが後ろ髪の辺りからすこしうねうねなっている。
ゆるい天然パーマみたいなの？

そしてとても整った顔立ちをしていて、その中でも特徴的なのは、
目だ。

お姉さんみたいなのとても優しげな感じがする。勿論スタイルもよく、
出るところは出ていて

出なくていいところは出ずといった女の子からみた理想の体型の持ち主だ。

特に……。その……。出てるところは、すごく出てる。

とりあえず挨拶はしないとな。噛まないように注意しないとな……。。

「こっ、こちらこそ！　よっ、よろしくでございませす！」

……無茶苦茶、変な奴だと思われたな、俺……。

「どんだけテンパってんのよ……。ルナちゃんよろしくね!」

「よろしくルナさん」

「ええ、こちらこそ。へんなっ——話し方が変わってる人、セシル君、アクアちゃん」

「明らかに変な人って言うおうとしたよね!? しかも言い直してもたいして意味変わってないよね!？」

くそっ! やっぱり変な人だと思われたかっ!? どうやって誤解を解こう……。

「ちっ! ユウのチームってだけで居残りかよ」

「悪かったな!! あとマ抜けてるぞ!」

「いいんだよ、俺はそうやって呼ぶから。絵がないと誰が喋ってるか分からなくなるからな。こうやって初登場の時にあだ名で呼ぶとインパクトでるだろ? そうすると名前を覚えてもらえるからな」

もう一人わけ分からんことを言いながらブラブラと男の子がやってきた。

赤色の髪の毛の子だ。さすが異世界。

日本では、見たことのないような髪色の子がいるんだな。

この赤毛は、あだ名で呼ぶとインパクトが出るとか言ってるけど、むしろこの髪色だけでもインパクトは充分にある気がする。

「まっ、冗談だって気にすんなよ!! 俺の名前は、レインⅡフェルクル。よろしくな」

ハハハッ!! と笑っているレイン。可哀想だけど紹介すんのめんどく——作者の諸事情のため

次回か次々回のキャラ紹介でも。一応ショートヘアの赤髪だけでも紹介しときます。

「っていうかこの作者軽く死んだほうがいいな……」

「ユウくんどうしたんですか？ ブツブツと」

「いや気にしないでくれ。お前もユウかよ……」

「えっ！？ この呼び方嫌ですか？ 私的には呼びやすくいいと思っただけですけど……」

「別にいいぜ。嫌いじゃないしな」

もうすでにレインに呼ばれているし……。

断る理由もたいしてないからな。

「よし全員そろったな、いいかお前ら。ユウマは、仮にも異世界の人間だ。分からないことは、多いと思う。だから全力でサポートしてあげろ」

「はーい！」

「ユウマ、ところで何か分からないことあるか？」

「はい、とりあえず僕って何種族なのですか？」

「おっ、そうだな。ちよつとじつとしててくれ」

俺は、変な機械とか取り付けられて待つこと10分。

「珍しいな、武魔特化種族か」

機械の音が止まったかと思うと画面に『武魔特化種族』と表示された。

「わぁ、すごいですね！！」

「確かに珍しい」

「俺なんて始めてみたぜ？」

「まさかユウマが武魔特化種族だとはね……」

——と4者それぞれの反応をした。

「なんか照れるなあ……」

「とりあえずお金を渡しておくから、あとで何か武器を買ってくる
といい」

俺は、ディオ先生から4万円もらった。この人金持ちか？ 普通こんなにもくれる人いないと思うのだが……。

「ちなみにお前のことは、学園長に言つといた。入学金とかは、タダにしてやるそうだ。

ただし授業料だけは、ちゃんと払えだそうだよ」

「払うって、僕お金なんか全然持つてないんですが」

「ああー、それは後で分かるぜ、ユウ」

「ならいいけど……」

なんか苦笑いしているから疲れることか嫌なことなんだろうなあ……。

「もうほかに何かないか？」

「えっと東ブロックってなんですか？」

「ああ、それか。それはだな……『プルルループルルウー！』」
非常にナイスタイミングで電話が鳴り出した。

「スマン！ あとは、そいつらから聞いてくれ」

そういうとディオ先生は、電話の元へと行ってしまった。

「えっと、私が説明するね。このグラニデは、大きく分けて5つの
ブロックに分かれてるの。」

まずヒストン学園や私の家があるブロックを中央ブロックと呼ぶ
わ。

ほかのどのブロックよりも技術が進歩しているわ。魔物は、ほんどいなくて

基本的に人しかいないようなブロックでこの世界のお偉いさんとかがいっぱいいるわ」

「そして色々な物が売ってるね。そして交通機関とかも発達してとても便利なブロックだよ」

なるほど。この中央ブロックってのは、東京と似たようなもんということかな？

なくてはならない存在みたいな。

「そしてあとは、北ブロック、東ブロック、南ブロック、西ブロックとあるんだけど……」

「まあ、あとはどこも似たようなもんかな？」

「確かにあまり違いって言うものがないですう」

「まあ、住んでる種族に違いは、あるけどね」

「ちなみにその4つのブロックとか魔物って――」

「いっぱいいるぜえ、人が多く住んでるところにはあまり来ないけどな」

「そ、そうか」

今まで普通に学園生活っぽいことしてたけど、やっぱり俺異世界に来たんだな……。

「ねえ、そろそろユウマの武器買いに行ったほうがいいんじゃないかな？」

「それもそうね……。そうと決まれば急ぐわよ!!」

「わかったぜ、姉御！」

「誰が姉御ですかー!!」

「冗談だって、そんな怒るなよ! 可愛い顔も怒ると台無しだぜ?」

「いまさらおだてても、遅ーい!! 覚悟おー!」

「姉御って読んだくらいでそんな怒るな——ギヤアア——!!」

「あらあら、喧嘩はダメですよ?」

「これじゃこれから先不安だね……」

「ハハハッ! ざまーみろ! ……ハッ!」

「どうしたんだい? ユウマ」

「な、なんでもない!!」

今思うと俺は、久しぶりにこんなに笑ったかもしれない。

いつも平凡な日々で毎日笑うとしても苦笑いくらいだった。

もしかすると非日常ってやつもそこまで悪くないのかも、こうして個性豊かな人達に会えたし……。

すこしだけそう思ったが、すぐにみんなの笑い声でそんなことを考える気も失せた。

第7話 3日間の間0円生活だぁー！ (後書き)

ちよつと長めに書きました。
誤字があつたらすみません。

キャラクター紹介 異世界ver（前書き）

お久しぶりです。今回はキャラクター紹介です。

こっちの世界のキャラクターは、多いのでver2作るかもしれない
せんが……

最初の方、若干ほのぼの？ みたいな感じでやります。
ただの紹介だと思つまらんと思うので

キャラクター紹介 異世界ver

黒猫「こんばんはー！ー！！ 黒猫です」

ユウマ「シライシユウマと……」

アクア「アクアアランヒートでえーす！！」

ユウマ「夜なのにどうしてテンション高えんだよ……」

アクア「なんか言った？」

ユウマ「いえ、なんでもございません」

黒猫「まあまあ二人とも落ち着けて」

ユウマ「うるせー、化学のテスト平均以下」

アクア「そうよ、41点」

黒猫「前回のピーーが意味ないだろうがあー！ー！！ こうなった
らユウマとアクアを……」

ユウマ・アクア「どうするつもり（だよ）」

黒猫「ユウマの場合ひどい目に。アクアの場合は、恥ずかしい目に
あわせてやる！」

ユウマ「なあ、アクア。——こいつ軽く殺^やらね？」

アクア「奇遇ね。私もそう思ってたところよ」

黒猫「ちょ待てよ！ これじゃコメディじゃねえよ！ や、止めるおおおー！ー！ー！」

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆

ユウマⅡシライシ 身長体重その他もろもろは、白石悠馬と同じのため省略。

神様の間違い（ミス）で異世界にきてしまった白石悠馬のこと。
武魔特化種族という種族。魔法は土属性を使う。武器は刃渡り80cmの太刀。
異世界のヒストン学園に通うことになり、そこで学園生活をしつつ元の世界に帰る方法を探す。

アクアⅡアランⅡヒート 性別…女 17歳

身長167cm 体重（本人曰く「スイカ2個分だよ☆」とのこと）
血液型A

ユウマを異世界で最初に発見した人物。武器特化種族。風属性。使用する武器はハンドガン（複数）。
いつも最低2丁は持っている。ヒストン学園に在籍しておりユウマにも家を貸してあげており

それから分かるように非常に面倒見がいい。髪色は茶色がかった黒。

髪型は肩にかかるくらいのセミロングでくせは、ほとんどない。スタイルもよく

かなりの美少女である。好きなことは、人助け。嫌いな人は優柔不断すぎる人。

セシルⅡラグナロク 性別…男 17歳

身長176cm 体重58kg 血液型A

ユウマの友達。魔法特化種族で属性は水。ヒストン学園に在籍しており

冷静ちんちやくな性格で頭がいい。根っからのツツコミ好きで、こいつと一緒にいる時の

ツツコミは、ほとんどこいつだと思っていいほど。髪色は黒で癖が少々。髪型は前髪が、目より少し上後ろ髪も肩より5cmほど上と

なかなかの長髪。
好きなことは、ツツコミと読書。嫌いなことは戦い。

ルナⅡドウペント 性別…女 17歳

身長172cm 体重? (聞いたら殺されかけた……) 血液型AB

ユウマの友達? 魔法特化種族で属性は風。ヒストン学園に在籍しており

とても整った顔立ちをしている。特に目はとても優しげでお姉さんみたいな雰囲気をしている。

髪色はクリーム色っぽい感じの色。髪型は腰まであるかないかのロングヘアーで、

若干後ろ髪の辺りからうねうねなっている。上記に書いた通り美少女で出るところは出ており

出なくていいところは、出ていなく理想の体型の持ち主。特に出るところはユウマ曰く

すぐ出てるとのこと。とてもおっとりした性格でよくみんなの喧嘩を収めたりするが……！？

好きなものはイチゴのショートケーキ。嫌いなものはナメコやミミズなどのヌルヌルしたもの。

レインⅡフェルクル 性別…男 17歳

身長178cm 体重61kg 血液型B

ユウマの悪友的ポジション。武器特化種族で、火属性。武器は120cmくらいの斧を使う。

ヒストン学園在籍で、髪色は赤色。髪型はごく普通のショートヘア。とても明るい性格で、人をからかったりいたずらをしたりと楽しいことが好き。

好きなことは、楽しいこと。嫌いな人は、冗談が通じなくてすぐ怒る人。

デイオ先生 性別…男 24歳

身長・体重・血液型？

ヒストン学園のC組担任で科目は武器。髪色は、赤でツンツンヘア

1。

冗談などをいって場を和ませたり、叱る時はしっかりと叱り、教える方もうまいことから

人気があり、信用されている。たこ焼きが好き。嫌いなものは、特になし。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆☆☆☆

ユウマ「こんな感じでいいかな？」

アクア「なんであんたが説明したみたいな感じなのよ」

ユウマ「だってあいつ動けそうになかったからな。前から書いてた奴をそのまま

ここに書いたの俺だから」

アクア「ところでこれどうする？」

黒猫だったもの「グッ……（コテッ）」

ユウマ「あっ、死んじゃった」

アクア「まだ生きてるわよ！！ さすがにすこしは手加減したわよ。死んでもらったら

この小説続かなくなるし」

ユウマ「そりゃそうか。それじゃ」

ユウマ・アクア「「また数日後にお会いしましょう！！」」

キャラクター紹介 異世界ver（後書き）

.....返事がない。ただの屍のようだ。

第8話 宝くじが当たるなんて幻想だ!! (前書き)

前回のキャラ紹介で数日後といっておきながら
かなりの日数経ってますね。どうかお許しくださいませ……

第8話 宝くじが当たるなんて幻想だ!!

俺達は結局あれからいざこざが起きたが、死人一人ですんだという意外に最小の被害ですんだ。

「死人一人って最小の被害じゃねえ!」とかいう突っ込みは、なしだぞ。

「(ムクッ!)」ところでどこに買いに行くんだ? やっぱり中央ブロックか?」

「「生き返った!!」」

「いや生き返るから!? 登場にして2話目で死ぬのはさすがになんて!!」

「中央ブロックでいいと思う。あそこの『なつや』に行くといいかな」

てかこいつすごい冷静だな……。仲間一人死にかけたのに。

「なつやなら店長知り合いだからいい物売って貰えるかも」

「なつやの由来は?」

俺自身すごく変わった名前だと思うんだが……。異世界では普通なんだろうか?

「由来は、な↓長持ちして・つ↓使いやすく・や↓安い物を売る店って前言ってたよ」

こんなにネーミングセンスが無いやつだから名前も変だな。多分……。

「とにかく行きましよう」



中央ブロック『なつや』

「こんにちわー！ ハナビ店長いますかあ？」

「おっ！ アクアちゃん久しぶりだねー！ そちらの人達は知り合
い？」

「はい、クラスメイトです」

「やっぱり変てこ？ な名前だったな。でも気さくそうない人かな？」

自己紹介中……………

「なるほどね……。それで異世界からきたばかりのユウマ君に武器
を？」

「そうです。なんかいい武器ありませんかね？」

「んーちょっと待っていてね。ユウマ君以外は外で待っていないさ
い」

「ん？ なんで外で待つ必要があ——『いいからきなさい！』オイ、
待てよ！」

「どうしてみんなを外に出させたんだ？」

「この店普通にコンビニ以上の広さあるのに……。
だからみんなが入れる余裕はあるのに。」

「待たせたね。この箱の中から好きなものを選びなさい」

箱の中には、斧やら短刀やら銃と多種多様な種類の武器があった。
確かにどれも頑丈そうにできていて長持ちするだろう。

「じゃあなっ……………シライシー!!」

俺は突如殺気を感じ、咄嗟に箱の中の武器から適当に取り出して自分の前に掲げた。

「キンッ!」という金属音がした後、足元に手裏剣が落ちた。

「ほお……。勘はいいみたいですねぇ……」

「おい、なんの真似だっ!」

手裏剣を投げた後のハナビさんの目はタカが獲物を撮る時の様に鋭く、非常に澄んだ瞳だった。

正直その目に睨みつけられていると身動きがまったくできなかった。声をあげるだけで精一杯だ。

まるで金縛りにあったかのように。

「いえあなたに合う最適な武器を探してあげただけですよ（ニコッ）」

その言葉をいった時にはさっきの穏やかな雰囲気に戻っていた。

「店長もう入っていい?」

「いいですよー」

さっきのはなんだったんだ?

「変な人さんもう終わりましたか?」

「俺変な人っていう名前じゃないから!!」

「ジョークですよ、ユウ君」

まだ引きずってんのか……。

意外と根に持つタイプなんだな。

「それじゃその『萌芽刀』ほうがとうでいいですかね?」

「この太刀萌芽刀っていうのか。いいけど、何円するんだ？」

「3万5千円ですよ。50パーセントオフで」

「高っ！ 50パーセントオフなのに高っ！！」

「武器は全部そんなもんですよ。これでも安いほうですよ？」

そんなこと言われても俺はグラニデの常識は分らない。

「いいんですか？ 50パーセントオフで」

「かまいませんよ。アクアちゃんの友達だし……将来が気になりま
すからね（ボソ）」

「あの最後のほうなんていいましたか？ 聞き取れなくて……」

「いえ気にしないでください。合宿なんですよ？ 早く余った50
00円で準備しなきゃいけないでしょ？」

「そ、そうですね。それではありがとうございました」



あれから俺達は、水と衣服だけを買ってそれぞれの家に戻った。

衣服はジャージだけを買った。ほかのみんなも大体そんな感じ
だ。

動きやすさを考えたらジャージの方が、勝手がいいからな。

「あのハナビ店長だっけ？ あの人強いのか？」

「ユウマも試されたでしょ？ 手加減しつつ真剣に見極める——そ
んなことができるのは、すごい人っていう証拠だとおもうけどな」

「そうか……」

確かにあの目は、半端じゃなかった。やっぱり強いんだろうか？

「ねえユウマ。すこし訓練しようか」

「訓練か……確かに明日のこと考えるとやっておいた方がいいかも
な」

「ここでやるのか？ さすがに家の中は……」

「外に決まってるでしょ！？ まったくほんとにバカなんだから」
「うるせえー」

「さてどっからでもかかってきなさい」

アクアは1丁のハンドガン（拳銃）を取り出した。

「いくぜっ！ 萌芽刀！！」

俺はとりあえず特攻していった。そして相手に攻撃が届く範囲までいき2・3回刀を振った。

「まったくダメね。太刀筋がめちゃくちゃだわ」

アクアはそう言い、軽く攻撃を避けてから銃を放った。

「ぐはっ！！」

2mくらいだろうか。弾が当たったらしく吹っ飛ばされた。

弾丸が当たったはずなのにすこし痛いだけで、血が出たりしていない。

「さすがに初心者相手に本物の弾はマズイと思ってね。威力が抑えてある弾を使わせてもらったわ」

「俺の攻撃は、避けれると確信してたのか……？」

「そうじゃなきゃ、真剣でなんかやらせないわよ」

「くそおおー！！！！ なめやがってえ！！！！」

アクアとの訓練は、俺がアクアにみね打ちを当てるまで続いた。

第8話 宝くじが当たるなんて幻想だ!! (後書き)

文章がおかしくなっていないか心配です。

たくさんのお気に入り登録ありがとうございます！

第9話 サバイバル合宿 1日目（前書き）

お気に入り小説登録ありがとうございます。
感想等をいただけるとありがたいです……。

（自己紹介のルナの嫌いな物をすこし訂正しました。すいません…
…）

第9話 サバイバル合宿 1日目

【東ブロック エルロイド森林】

「よーし！ 全員集まったな。10分ごとに1チームずつ進んでいけ！」

俺は、昨日アクアに1回しか攻撃を当てることができなかった。俺自身が受けた攻撃は、100回を軽く超えていたと思う。そんなダメダメの状態で今この場にいる。本当の所もうちよつと時間が欲しいんだが、時間は待ってくれるわけもなくサバイバル合宿1日目を迎えてしまったわけだ。

「次、ユウマの班！ 早く進め！」

「はい！！！」

俺達のサバイバル生活が始まった……。



「ここら辺でいいんじゃないか？」

「そうね……。川もあるし周りは草が生い茂っているから、拠点としてはいいんじゃない？」

「そんじゃ早速ここにテント張ろうぜ」

俺達は入り口から20分ほど歩いたところに川を見つけ、そこに今

テントをたてている。

テントは1チーム二つ学園側から支給された。ほかにも色々と学園側から支給されたわけだが……。

「おーいユウ！ 早くこっちきて手伝ってくれよ」

「悪い。今行く！」

そしてかれこれ30分。テントをたてみんな男テントに集まっている。

勿論テントは別々ですよ？

「いいか、このチームのリーダーは俺だ。俺が指示させてもらう」

「ちっ！ 気に食わないけどしゃあねな！」

「はい、よろしくお願いしますねっ！ リーダーさん」

「ユウマしっかりやってくれよ」

「まあ、戦闘のほうは全然だめだね」

若干余分な言葉が入ってるが、リーダーってのは細かいことを気にしちゃダメだった気がする。

「まずレイン。今すぐ薪を集めてこい」

「はあ！？ なんで俺がそんなことやらなきゃいけないんだよ！！」

「レインの武器はオノだからでしょ。木を斬るにも適してるし、レインならやれることがないと思ったからでしょ？」

「私もレイン君なら大丈夫だと思いますう。こんな大役やれるのはレイン君ぐらいだと思いますっ！」

「セシルとルーがそういうなら……」

（ルーってルナちゃんのことかな？）

（またおもしろいあだ名を……）

二人におだてられたレインは薪を集めに出ていった。でもこれって俺が思うに――

「――ただ単に薪拾いやりたくないだけだよね……？」

「当たり前です♪（ニコニコ）」

「さすがユウマだね（ニコ）」

二人は、ものすごく爽やかに笑っている。こいつら絶対策士だ……！！

腹黒い、という言葉は今のこいつらにピッタリだろう。

「それで後の役割は、なんなのよ？」

「あとは、料理係と洗濯係と食料調達係（2名）だ」

「それで俺的には料理係はアクアにやってもらいたいんだがいいか？」

「僕は構わないよ。料理ができないわけではないけど、そこまで得意でもないしね」

「私もアクアちゃんがいいと思いますっ！ ……………料理は全然できないうすし」

「ということでもいいか？」

「うん！ 任せときなさい！」

「さっすが姉御……！」

「早く薪拾いに行きなさい――！！」

そしてなぜかまだここにいたレインとレインを追いかけるためにアクアが出て行った。

てかあいつ姉御って呼ばれるの嫌なのかな……？ 俺が女だったら別にいいんだが……。

「ユウ君。女の子は複雑なんですよ」

「心読まれた！？」

多分これもアクアと一緒に偶然だろう。むしろそうであって欲しいんだが……。

絵音みたいになると毎日が余計大変になるからな……。

「そしてあと二つの係だが俺は、食料調達やろうと思うんだが二人はどっちがいい？」

「うーん……ぼくは洗濯の方がいいかな？　あまり山菜とか魚の取り方に詳しくないから」

「んじゃそれでいいか。それじゃ早速俺達は集めてくる。あと洗濯係は掃除も入ってるから」

「やっとなんていいんだね。だけどまだゴミが出てないよ」

「アクアがそろそろ帰ってくるから、一緒に釜とか食べるスペースとか作っと思ってくれ」

「オーケー。イスは支給されてるから、たいして時間はかからないと思うけど……」

「そんじゃ行こうか」

「はい！　とっとと終わらせましょー」

俺とルナは森に行って材料集めをすることにした。



「ユウ君、エサってありますか？」

俺達は山菜をある程度採ったあと、川みたいところで魚を釣ることにした。

「今、ミミズを探しているところ인데——まさかこの世界ミミズっていない？」

「いえ、普通にいますけど……」

生き物は一緒なのかな？　いやでも魔物がいるくらいだから、すこ

しは違うのかな？

「おっ！ 発見！」

運良く地面を掘ったらでてきた。

「きゃっ！！（ムニツ）」

「……………わ、悪い。ミ、ミミズ嫌いだったか…………？」

胸がーっ！！ ルナ様の大きな胸が当たってるうーっ！！？
まずい…………。

理性が飛ばないように注意しなければ——「きゃっ！ こっちこない
ください！！（ムニユ！！）」

ミミズうーっ！！！！ 空気読めえー！！！！ これ以上俺を

苦しめて何が面白い！？

そしてミミズ移動スピードはやっっ！！

耐えるんだ俺、耐えるんだ俺、耐えるんだ俺……………。

「すっ、すみません！ ヌルヌルしたものは苦手で…………特にナメコ
とかミミズとか」

「そっ、そうか。……………えっとまだこうしてなきゃだめか？」

「……………っ！？」

ルナはようやく自分が俺に抱きついていることが分かったようで飛
び退いた。

自分で言っただけど、なんかすごく残念なような、ホッとしたよ
うな…………。

「とっ、とにかく魚をとっと釣って帰るか！」

「そっ、そうですね！ いっぱい釣っちゃいませよおー！！！」

しばしの沈黙。

くそー！！ またこの空気かよ！？ 俺、異世界こっちの女の人とそうとう相性悪いみたいだな……。



「おい！ 薪いっぱいもってきたぜ！」

「ありがと。こっちもちょうど釜とスペースを作ったところよ」

「なになに——釜にテーブルを置くスペースにたき火をするスペースか……すげえな」

「まあ結構一生懸命やったからね」

「そんじゃこのスペースは、私達がもらいますか？」

「そうね。人数も少ないし余裕だと思うわ」

「「……………っ!？」」

第10話 サバイバル合宿 2日目（前書き）

お気に入り登録件数が10件になりました。
皆様の応援たいへん感謝しております。

第10話 サバイバル合宿 2日目

――セシルSIDE――

「さあーてーどうしますか……」

「確かにこの状況はまずいわね……!」

こっちはアクアさんにレインと僕。それに対し相手は、女5人のチーム。

これは明らかにこちらが劣勢といっても過言ではないと思う。

だけど、問題は相手がどのくらいの強さかということ。

それによって大きく戦況は変わってくる。

こっちの強さも正直分からない。僕自身だとせいぜい一人程度しか倒せないだろう。

「二人とも! 何人いけそう?」

「私は結構いけると思う。たいして強そうじゃないし、二人かな?」
さらっとひどいことを……。

「俺は1・5人かな? 悪りがそんなに自身はないんでね……!」

「そうか……。なら各個撃破で!!」

「了解!!」

「女だと思ってなめてると痛い目見るわよ?」

「そいつはどうだか……。――《ウェーブ》!!」

僕は2mくらいの波を相手に向けて放った。

だけど下級魔法だから当たってもあまり威力はないだろう。

だからせいぜい足止めくらいにしかない。けど……!」

「くっ！」

相手の女の子は剣2本を自分の前にクロスして、僕の予想通り波を受け止めている。

けど——これを待っていた!!

「いまだ!」
《氷雅槍》^{ひょうがそう}!」

するどく尖った氷の槍を相手に向かって放った。これも下級魔法だがさつきより威力はある。

それに仲間の援護がないときは、基本下級魔法でせめた方がいい。詠唱も必要ないからね。

そして中級魔法は詠唱がないかわりにSPを下級魔法より多く消費する。

人数が劣っている今中級魔法は使わず、下級魔法で持久戦に持ち込んだほうが得だからね。

「きゃああ——!!」

氷の槍は見事に相手を貫いて吹き飛ばしていた。だけど相手はケガしていない。

なぜかって? 本来なら大怪我だけどこの森林は今だけ特別に結界みたいなものが張られており、絶対に大怪我をしない仕様になっているらしい。それでもすこしばかりのケガはしてると思うけどね。

「レイン、アクアさん! 終わった!？」

「おうよ! 俺がやられるとでも思ったか!」
「私も大丈夫よ!」

意外にも予想より早く終わっていた。中級魔法を使ってもよかったかも知れない。

それにしても二人とも武器特化種族か……。なんか僕だけひどい疎外感を感じるよ……。

「こいつらどうする？」

「んー……僕は、どっかに縛っておいた方がいいと思う。そしてユウマ達がきたら相談しよう」

「分かったわ」

リーダーはユウマだからね。

「おっ！ ユウマ達が帰ってきたぜ」

「おかえり。遅かったじゃない」

「敵にでも襲われた？」

「い、いや……別にそういうわけじゃないんだが……／／／／」

「し、心配してくれてありがとうございますっ！／／／」

「むう………」

「ん？ どうしたんだお前ら？」

なぜか二人は互いに見つめ合って顔を赤くして俯いてしまった。なにがあったんだろう？



――ユウマSIDE――

どうやら俺とルナがいない間に他のチームに襲われていたらしい。

「この人たちですか？ アクアちゃん達襲ったのって」

「そうよ。3対5だから結構大変だったわ」

「んー……俺は開放してもいいと思うな」

「「！？」」

「だってこのチームはもう俺のチームを襲えないんだろ？」
「そうなの？」

「確かしおりに書いてあったよ。『戦いを挑んで全滅したチームはその襲ったチームを攻撃できないって』」

「ディオ先生が言ってたぜ。『ほかにも細かいルールがあるけど省略』って」

「これは省略しちゃいけないだろ……」

あの人もやっぱりダメな教師なのか？

「とりあえず逃がしておいたわ。あとはご飯でも食べましょ」
「そうだな」

あれから俺達はおいしく料理を食べて、各自テントの中で休憩している。

この時間帯は暑いからな。しかも今こっちの季節は夏らしい。そんなときに外で闇雲に歩き回るわけにはいかないだろう。

「ところでみんなの武器ってどんなの？ 知っておいたほうがいいと思うんだけど」

「確かにアクアさんの言うとおりだね。戦ってて分かったけど、それによって色々作戦とかたてれそうだし」

確かにアクアとセシルの意見には一理ある気がする。

「んじゃまず俺のから——と言いたいけどみんな知ってるよね？」

「そうね……。ユウマのはパスでいいよ。んじゃ私のから」

そういつてアクアは腰から拳銃を3丁ほど取り出した。

「私は武器特化種族の拳銃よ。たいてい2・3丁いつも持っているわ。戦闘スタイルは、どっちかというとサポート気味ね」

「次は僕だね。僕は魔法特化種族の水属性だよ。上級魔法はまだ使えないけど、中級魔法の一部と下級魔法の全部が使えるよ。スタイルは後方支援型かな？」

「俺は武器特化種族のオノだ。このでけえオノ振り回して戦う。どっちかという戦いの時は前衛においてくれるとありがたいぜ」

「最後は私ですね。私は魔法特化種族の風です。私も使用条件とスタイルはセシル君と一緒にすう」

なるほどなあ。改めてみると意外とバランスよく編成されてるじゃないか。

「とりあえずこの間にユウマにある程度のこと教えておこうか」

「あっ！　なら魔法ってどんだけでも使えるのか？」

「それは生きてる限りってこと？」

「ああ」

「ちょっと説明が下手かもしれないけどよく聞いてね」と前置きをおいて

「魔法は確かに生きている間はいくらでも使えるけど、一日に使える数は各自のSPによって決まっているんだ。SPが0になると魔法がうてなくなるんだ」

「SPってのは何だ？」

RPGとかで見たことあるような……………。

「SPの原型はspirit powerからきていて精神力のことだよ」

「へえ、意外とたいへんなんだな」

「ユウ君の言うとおり精神力鍛えるのはきついですよ？」

「僕も何度挫折しかけたことか……」

そしてひたすら日が暮れるまで喋り続けて、夜ご飯も魚と山菜の料理を食べ今日は寝ることになった。

「それじゃまた明日」

「気をつけてね」

「すいません。見張りなんてさせてしまつて……」

「いや決めたことだから気にすんなって」

「ユウ君がそういうなら……」

時間は今日の午後3時にさかのぼる。



「ところでさあ、寝るときどうする？」

「どういふことだ？」

「そんなことも分かんのか？ アホユウマ」

「おいレイン、てめえ殺されたいのか？」

「上等じゃねえか！ そんなに死にたいなら——」

「二人ともそのへんにして。それじゃ男子、女子チームに分かれて交代で見張るといふのは？」

「それはいい案だね。1時から3時、3時から7時でいいかな？」

「「了解だぜ（です）！！」」



そして今にいたるわけだ。こうでもしないと魔物とか敵チームに襲われたりするからな。

(眠らないように気をつけないとな……)

第11話 サバイバル合宿 3日目（前書き）

更新遅くなってすいません。

色々事情がありまして……言い訳っぽくてすいません。

第11話 サバイバル合宿 3日目

【合宿3日目 午前7時】

「今日は合宿最終日だね。しおり（支給されたもの）を見ると12時きっかりに合宿は終了となっているから、それまで僕達は、ひたすらここで何もせずにいようと思う」

「どうして？ それじゃあこの合宿の目的の実践経験UPに繋がらないと思うけど」

この合宿の目的って実践経験UPだったのかよ……。まったく知らなかったな。

「別にこの合宿はそれだけじゃない。精神力UPも目的に入ってるはずだから」

「だったら座禅でもするつもりですかあ？」

「いや違う。これを使う」

セシルはカバンの中からおにぎり1個をとりだした。

そしてメモ帳みたいなものを出してスラスラと文字を書いていった。待つこと数分。セシルは自信満々な顔で――

「――これでどうだ！」

おにぎり争奪戦勝負！！ イエーイ！！ パチパチパチイー！！

ルール

1、絶対にこのおにぎり以外のものを食べないこと。

- 2、この区域から出ないこと。（おにぎりから半径5メートル以内）
- 3、トイレや他のチームが襲ってきた時は、一旦中止とする。
- 4、区域からむやみに出たものは、食べる権限がなくなる。

以上のルールを守り12時まで過ごすこと。

なんかすごい突っ込みどころ満載の紙だな。イエーイ！！ とか書く必要性あるのか？

「ええええー！ー！ー！！ まだ朝ご飯食べてないのにそれはきついよ！」

「おいセシル！ てめえ正気か！？」

「私耐えられるかなあ……」

確かに今改めて読み直すときついと思う。なぜなら昨日の7時から何も食べてないからだ。

12時間ずっと何も食べずにいままでいたからきついと感じる。

これがもし、朝ご飯を食べたあとならまったく支障はなかったはずだ。

しかも食べれなかった人は、12時間＋5時間くらいだから、これほどきついことはないだろう。

「まあ気楽にいこうよ。この1個だけのおにぎりなら食べれるわけだし」

そう1個だけなら食べれる。ただし——仲間を犠牲にする必要があるからだ。

おそらくみんなも同じことを考えているだろう。

この状況普通だったら絶対「6等分しようぜ」とか誰かがいうはずだけど今は違う。

12時間何も食べていなかったらすこしでも多く食べたいはずだ。少なくとも俺は、そう思っている。だからこのおにぎりは絶対にながあっても――

（（譲れねえ……………！））

（（譲れないわ……………！））

ここは一つ軽く相手を揺さぶってみるか。

「おいセシル、あっち向いてホイでもやらないか？」

「ん？ いいんじゃない？」

よしなかった！ これであいつのスキをうかがって奴を――殺す！！

「それじゃいくよ。あっち向いて――」

いまだ！ 目潰しを――「パシッ！」ってあれ？

「ユウマの考えてることはお見通しだよ。くらえっ！
――」
《氷雅槍》

マズイ！ 当たる……………！！

「させない《連弾》！」

アクアは銃をすかさず取り出し、銃の弾を打ちつくすほど乱射した。氷の槍はその場で壊れ、いくつかの弾はセシルに当たりそのまま区域の外まで吹き飛んだ。

「くっ！ 二段構えか！？」

「ごめんね、セシル。出来るだけ賢い人は外しておきたいの」

「まっ、俺を甘く見たお前が悪いけどな」

よし、残り4人だな。そしてアクアは遠まわしに俺がバカだと言ってるような。

「あっ！ 後ろにUFOが！！」

突然レインが変なことを言い出した。これはおそらく俺が後ろを向いたときに攻撃するだろう。だからここは裏手をとって、わざと引っかかるフリをしよう。

「何どこどこ！？」

「引っかったな！ くらえ——」

「——お前がな」

俺はレインのオノをサイドステップでよけ、下から上になぎ払うように剣を振った。
そしたら見事に命中し、「ぎぎゃっ！」という音とともに吹っ飛んでいた。

こんな作戦でよくだませると思ったな……レイン。

これであと3人。ここが正直勝負どころだ。どうするべきか……。

「ごめんなさい！ ユウ君（ムニユッ！）」

突然ルナが俺の後ろから抱きついてきたって、ルナ様ああ——！！？ またもや胸がっ！ これで2回目！？ どんだけ問題起こしてんだよ俺！ 誤らなくていいから！ むしろ俺がごめんなさいなんですけど——！！？ とにかく今はこの状況を満喫す——

「——何エロいこと考えてんのよ、この変態っ——————————————！！！」

「ぐぎゃぶへっ！」

結局ユウマも区域外に吹っ飛ばされ、恥ずかしそうにしているルナと起こり気味のアクアがおいしく、おにぎりを食べた。そしてちようど食べ終わったところで合宿終了の合図が鳴った。

第12話 この小説は携帯ではなくPCで見えることをオススメします（前書き）

いったんこの話を書き終えたら、いままでの話を修正しようかなと思ふ

今日この頃。

（携帯で見てもらってもかまいませんが、読みにくいかも；；）

第12話 この小説は携帯ではなくPCで見るとをオススメします

「みんなよくやったな。3日間サバイバル生活は辛かっただろ？
そんなお前達にご褒美だ」

あれから次々と他のチームが森林から出て行き、各クラス外で諸連絡をしているとこだ。

うちのクラスはなぜか集まりが悪かったのでまだ集まっている。
ほかのクラス（1年）はチラチラと帰り始めたところだ。

「先生！ ご褒美ってなんですか！？」

「よくぞ聞いてくれました。ご褒美とは……」

「「とは！？」」

「1週間の休暇だ！」

「「おおおー！ー！ー！ー！ー！」」

ディオ先生が休暇と言った瞬間、クラスのボルテージは最高潮に達した。

それもそのはず、1週間も休みがあれば自分のやりたいことが好きなだけやれるからだろう。

よしこの機会にたっぷり休も――

「正しユウマのチーム以外だ」

俺の夢と希望を返して欲しい……。

「先生なんで僕達のチームだけなんですか？」

「まあまあ。ほかのチームは帰っていいぞ。おつかれさん」

「それでほんとのところどうなんですか？」

「前にお金はなんとかなる、って話をしたよな？ それを教えたいから明日学校に来てくれるか？」

「別にそれはいいと思いますけど、何で私たちまで？」

「お前達『アリアンス』って知ってるか？」

アリアンス？ 聞いたこともない単語だな。

「確か複数の人間とチームを組んで活動するグループみたいなものですよね？」

「そうだ。本当は夏休みの前あたりから作り始めるんだが、ヒストン学園には毎年恒例の行事があるんだ。それにどうしても勝ちたいからこのクラスで一番勝てそうな奴らを育てたいんだ」

「その行事というのは何をやるんですか？」

「各クラス1チームのアリアンスをだして相手の体についている花を取った方の勝ちというやつだ」

「てかこっそり早いうちから鍛えるなんてせこくないか？」

「それをするなというルールはない！！」

「「……………」」

なんかあまりこの先生教師って感じがしないな……。

どっちかと言うと年上のお兄さんって感じだ。

「ところで先生僕達これからどうすればいいのですか？」

「また明日学校に来てくれ。そこで改めて話そうと思う」

「分かりました。それでは失礼します」



【アクアの家】

「それにしてもアリアンスねえ。アクアは——中学校ってこの世界ある？」

「ん？ 前に話してたヒストン学園の前の学校みたいなやつのこと？」

「そうそう」

「うん、あるわよ。でもその頃はアリアンスって名前を聞いただけで、アリアンスに入ったことは一回もなかったわ」

「そうか……」

やっぱりこの世界も地球の日本と同じで、中学校みたいな教育施設があり、

そこで同じように教育を受けていたということか。

やっぱり俺の世界とたいして変わらないな……。

「ところでアクア、えっと……そのお……（ぐぐぐ）夜ご飯はまだか？」

「ふふっ、余程お腹が減ってたのね。いますぐ作るわ♪」

「~~~~♪~~~~♪」

アクアは鼻歌を歌いながら料理をし始めた。

軽快な音とともにスムーズに料理を作り上げていく。

なんかやけにご期限だな……、なんか怖いな……。

槍でも降るんじゃないだろうか？

（明日はアリアンスか……。楽しみだな……。……！）

アクアのおいしいご飯を食べ終わった後、俺はアクアの掃除の手伝いをすることにした。

「いい？ ユウマ。ゴキブリがいたら速攻で殺しなさい。どんなエグイ……じゃなかったグロテスクな殺し方をしてでもいいから確実に殺しなさい。これは戦いだから真剣にやりなさい。分かった？」

「お前性格変わりすぎだろ……」

初めて会ったときは、人に気遣いをするやさしくて人使いが荒くなくていい子だと思ったのに……。

「それでは始めましょ！ トイレと洗面所の掃除をお願い」
「分かった」

掃除、掃除……。何がでえっ……。るっかなあ……。！？

「（カサカサ）……」

なんかもう早速出たんですけどー！？ これアレだよね！？
台所とかでカサカサしている油っぽいヌルヌルした体で、黒色で約3億年前から地球に存在していて、全世界に約4000種おり、世界に生息する総数は約1兆4853億匹とかいわれてるあいつだよね！？

「（カサカサ）……」

「やばっ！ 逃げようとしてやがる。どうする俺！？」

選択肢 A このまま見逃す

確かに優しい行為だけど俺の身が危ないから却下だな。

選択肢 B 新聞紙で叩き殺す

これが一番無難かな？
よしこれでいこう！！

「オラあああー！ー！ー！ー！ー！ー！（バコッ）（グシャ！）」

なんか気持ち悪い感じになったけどいいかな？
グロテスクになってもいいから殺せて言われたからいいか。

「ユウマ殺^やった？」

「おう、やつつけたぜ」

「あつ、ありがとぉー！！明日お礼になんでも好きな物作ってあげるねっ！！」

別に俺の手を握ってはいやぐほどのことをしてないんだが……。

だけどこれ以上余計なことを言ってゴキブリだったもの以外に被害者を出したくないから素直にご好意を受け取っとくか。

第12話 この小説は携帯ではなくPCで見るとをオススメします（後書き）

ちよい短いかな？ 感想まってまーす！

第13話 朝の通勤ラッシュには気をつけろ! (前書き)

明日から合宿にいくので5日間近く投稿できません……。

第13話 朝の通勤ラッシュには気をつけろ！

「おいユウマ、姉御！ 遅いぜっ！ どんだけ待ってるとおも——
ごべっ!?!」

「ご・め・ん・ね。送れちゃってそれとお……もう一回今の言葉を
言ってみなさい」

「アクア先輩すいませんでした!! 自分すこしばかりチョーシこ
いてました!!」

「分かればいいのよ♪」

「「……………」」

今のは見なかったことにしとくか。なんかとぼちりとかくらいそ
うだし。

「ところでどうして遅れたんだい？」

「いや集合時間って8時だったじゃん？ その時間電車とかバスっ
て込んでるから……」

「普通朝の通勤ラッシュを考えて早めに出てくるのが普通だけどね
……」

セシルは「ハァ〜」とため息交じりに言った。

確かに朝のバスは予想していた人数をはるかにうわまる人が乗って
いた。

見渡す限りに人、どこを見ても人がおり、バスの中では人に囲まれ
て息苦しくなり窒息しそうになったほどだ。

「にしても今日は何でこんなにも人がいたのかしら？」

「それは今日中央ブロックの中央広場で祭りがあるからですよおー」

「なるほど……だから人がたくさんいたのか」

「まあ、こんなところで喋ってないで入りましょう」



「おっ！　きたね」

「遅れてすいません。色々あったもんで……」

「どうやらきたみたいですねディオ先生」

「早速案内してやれ」

「はっ！　……先生も来るんですね？」

俺達は女の人とディオ先生に案内され、とても大きな部屋に来た。部屋にはたくさんの学生がおり、みんなせわしなく動いている。

そしてこの部屋に入ったときから気になってるものが――目の前にある大きなボードだ。

みんなそこにある紙をとって受付の人っぽい人に渡している。

「さあ着きましたよ。ここがヒストン学園で一番大きい部屋と言われている『クエスト受託ギルド』です！！　みなさんにはここでアリアンスとして働くんですよ？」

「ということで詳しいことは彼女から聞いとけよ。俺は疲れたから寝てくるわ」

「ちょっ！　ディオ先生！！」

まあ、どっか行くのは予想していたからな。たいして戸惑わない。とりあえずこの部屋で色々やるわけだな。

「えっと、とりあえずこちらに来て下さい」

俺達は女の人に個室へと案内してもらった。

「申し遅れました。私の名前はハイネールオットです。チーム『アリエット』のリーダーを務めています。よろしくおねがいします！！」

ペコツと綺麗におじぎをした。赤茶色の髪で首よりすこし下くらいの長さの女の子だ。歳は俺より2つくらい上かな？ 顔立ちも整っており、服装もピシツとしているので清楚な感じがする。

「俺の名前はユウマシライシだ。よろしくな」

「私の名前はアクアアランヒートよ」

「セシルラグナロクです。よろしく」

「レインフェルクルだぜ。よろしくう」

「ルナドウペンツと言います。よろしくです（ペコツ）」

俺達は一通り簡単な自己紹介を済まし、本題に入ることにした。

「まずあのボードについて説明しますね」

「ああ、あの大きかったやつか。俺最初見たとき正直腰抜かすかと思っただぜ」

「レイン、それは大げさすぎだろ……」

「はは、は……」

「あ、ハイネさん気にせずどうぞ」

「それでは……」

「あのボードのことをクエストボードと言います。あそこに各ブロックから様々な依頼が貼ってあってあの中から自分の受けたい依頼のものをちぎって受付の人まで出してください。そしたら受付の人がハンコを押すのでそうしたらクエストのスタートです。実際にやってみますからついてきてくださいね」

全部説明をしたらハイネは部屋を出て行った。

「俺達も追いかけよう」

「そうだね」

「あーお前ら。一応あの人先輩だからそこんところしくな」
「ディオ先生まだいたんですか!？」

「人を勝手に消すな。どこかにいってしまった、なんて表記なかったろ？」

「なんの話ですか？」

「……気にすんな」



ハイネはクエストボードのところまで行き適当に一つ依頼書をちぎった。

そして受付のところまで行きこちらに戻ってきた。

「はい、これを見てください」

「どれどれ……」

依頼書 祭りのことなんですけど…… 依頼人 警護隊の新人女性隊員

今日中央ブロックで祭りがあることはご存知ですよ？ 毎年その祭りに人々のお金を盗む人がでるそうです。その人たちに警護隊は毎年手を焼いているそうです。その人たちを捕まえるのにどうかご協力お願いします！

報酬 捕まえることができたなら渡します

「なるほど〜こんな感じなんですね〜……」

「そういうことです。ここに書いてあることを私たちアリアンスがするんです」

「みんな納得してることを悪いんだけど、警護隊って何？」

「悪いことをする人間を捕まえる人たちのことですよっ！」

つまり警察だな。この世界の。

「とにかく先に行って色々と調べる必要がありそうですね」

「ハイネさんの意見に賛成だわ」

「それじゃあ急ごう!!」

「てか一緒にくるの？」

「最初の依頼ですから（ニコッ）」

第14話 何事も最初が肝心っていうよね (前書き)

合宿疲れた……。一日10時間勉強はないだろう……。それにetc
愚痴言っても仕方ないので、本編にどうぞ!!

第14話 何事も最初が肝心っていうよね

【時刻18:00 中央ブロック 中央広場】

「ふう、やっと着いたね」

「そりゃ色々とか関係ないところにもよったしな」

「依頼をうまくこなすには準備もそれなりに必要ですから仕方がないと思います」

あれから俺達はお金を盗む犯人を捕まえるために店を2、3件回った。

その店で買ったものは、俺の場合は双眼鏡とジュースの二つだ。

俺の場合というのはハイネが「初の依頼の記念ということで二つまでなら何か買って差し上げますよ?」と言ったからだ。だからみんなそれぞれ二つ買ってもらっている。

「とりあえず作戦でもたてましょう。なにかいい案ある人いますか?」

「うーん……とりあえずこの辺で聞き込みでもしてみたらいいんじゃないでしょうか?」

「そんじゃ聞き込みが終わったら中央にある噴水の近くに集合で、時間は今から1時間後で。じゃっ!」

この広場は中央ブロックの唯一の広場だけあってか、これ広場かと疑問をもつくらい広い。

中でもこの広場は、色々な催し物をするから各ブロックから色々な人が集まるらしい。

祭りは19時から始まるからまだ人は少ないほうだけど、始まる頃になるとかなりの人が来るらしい。

「「了解!」!」
わかりました



――ユウマSIDE――

「って勢いで言ってしまったけど、聞き込みって誰にすればいいんだ?」

俺は一人困り果てていた。こんなことなら単独行動じゃなく二人一組とかにすれば良かった……。

「とりあえず警護隊の人に詳しいことを聞いておくか――あつ! すいません――!」

俺は運良く近くを通りかかった男の警護隊の人に声をかけることに成功した。

警護隊だけあって鍛えてるのかしらないが筋肉質な体をしていた。えっと……こういう時って名前を名乗るもんだよね?

でもアリアンスの名前も決まってい……とりあえず俺自身の名前でも名乗っておくか。

「何でしょうか? なにかお困りごとですか?」

「いえ実は、聞きたいことがあるんですがいいですか?」

「いいですよ。私は警護隊の中でも地位が下のほうの者ですができるだけ答えましょう」

「僕の名前はユウマIIシライシです。僕もまだヒストン学園に入学したばかりなのでお互い様ですよ」

「ほお……ってことはアリアンスですか?」

「はい、まだ結成したばかりで名前も決まっていますが」

（雑談中……）

「そろそろ本題に入っているんですか？」

「ああ、すまない。こちらはいつでもいいぞ」

「それでは……まず今までに何度も盗人が現れたそうですが、目撃者はいないんですか？」

「いやいるよ。去年に一人とおととしに二人かな？ 両方の年とも目撃されている。犯人は身長170cmくらいのサングラスをかけた男ともう一人いるんだが、目撃情報があやふやなんだ」

「あやふやというのは？」

「おととしの被害者の内一人は、身長180cmくらいで胸にdead or aliveと書かれた紺色のパーカーと青のジーンズの男と言っていて、もう一人のおととしの被害者は身長170cmくらいの白いTシャツを着ていて綿のズボンを履いた男って言うんだ」

「その人たちの家の地図を書いてくれますか？」

「かまわない。しっかりとがんばれよ？」

「はい！ ありがとうございます！！」

スラスラと地図を書いていき、警護隊の人はどこかに行ってしまった。

「とりあえず戻るか……」



「あれ？ みんなもういるじゃん」

俺は集合より30分前に来たのになぜか全員噴水の前にいた。

「そこまで情報が掴めなくてね。ハイネさん以外はそうらしいよ」
「ハイネさんどんな情報をゲットしたんですか？」

「私が掴めたのは、犯人の傍らが身長170cmくらいのサンングラスをかけた男ってだけですよ」

「やっぱり……………!!」

「まさかユウも何か情報を!？」

「実は……………」

(事情説明中…………)

「なるほど…………警護隊の人と会うとは。なかなかついてるね」

「うーん…………それよりも私が気になるのは――」

「目撃者の二人の情報が一致しなかった、それですよね？」

「そうよ。なぜ一致してないのかなのよね」

「とりあえずおとしの人は後回しにして先に去年の人に行きましよう」



「ん？ 去年に被害に遭ったときの状況を詳しく教えてくれって？」

「はい、突然ですいません」

俺達は、中央広場から10分ほど歩いたところにある被害者の家に着いた。

中から出てきたのは40代くらいの中年太りしたおっさんだった。

「ええっと確か娘の為にりんご飴を買いに行く途中でね。そのとき

に後ろから盗られたんだよ」

「ほかに誰も目撃者がいなかったんですか？」

「ああ、なにしろ暗くて細長い場所だったからね」

（おい、暗くて細長いっておかしくないか？ あの広場見渡しよかつたのに）

（屋台とかは広場だけじゃ入りきらないから、その周辺にもあるんです……。あそこから東西南北に4本くらい道がありますから。きつとそこからさらに細い道に行った時に盗られたんだと思います）

「犯人は一人しか見てないんですか？」

「申し訳ないね……、一人しか目撃してないんだ」

「そうですか……ありがとうございます」

「がんばってくださいよ」

「それでどうする？ もうそろそろ祭り開始時刻だけど」

「あつ、それなら大丈夫よ。なんでもそいつらが現れるのは人が少なくなる頃の9時以降らしいから」

「どこで聞いたんだ？ そんなこと」

「毎年センター祭りに参加しているおばあさんによ」

てかこの祭りセンター祭りっていうのかよ……。なんでもっと前に出さなかったバカ猫。

「さっすが、あねーアクア！！」

「ねえ、今姉御って言いそうにならなかった？」

「そんなわけないでしょ、姐御！」

「死ねええー！！！！（ズキュン！）」

「姐御って言ったくらいで怒るなよ！」

閑話休題

「とりあえず祭りの方は後にして先に聞き込みにいこう」
「そうですね。それが妥当だと思います」

「……………」

「どうしましたハイネさん」

「あっ、すいません。楽しそうだなーって思いまして」

「これのどこが楽しい!？」

確かにレインにとっちゃ楽しくともなないだろう。

「それじゃ行くわよ」

「おう、あ——『黙りなさい!』はい……」

なんやかんやで俺達は、おとしの被害者の家を回ることにした。

第14話 何事も最初が肝心っていうよねゝ（後書き）

なんとなく推理ものっぽくなりました。
うまく書けてるかな？

第15話 犯人の正体が分かるとスッキリするものだ（前書き）

PV10000越えとお気に入りに小説登録件数16件と数々の応援
ありがとうございます！！

欲を言っちゃえばユニークも10000超えたいですが、もし超え
てしまったら

気味が悪いので（こんな小説だから……ね？）それは言わないです。

（あれ？ 書いてるから意味なうい？）

第15話 犯人の正体が分かるとスッキリするものだ

「（コンコン）すいませーん！ アリアンスの者ですけど」

「ん？ アリアンスの人がどうしたんだ？」

俺達は予定通りに、先に聞き込みにきた。出てきた人は、おとしの被害者の内の一人の男だ。

髪の毛は金髪で、背丈も俺より高く拓哉並にあるだろう。

歳は20歳から25歳ほどの若い男だと思う。雰囲気は能天気っぽそうな感じ？

に当てはまると思う。

「えっとおとしに襲われたときのことについて質問したいんですが……」

「おう、構わねえよ。あれは暗い道を一人で歩いてる時だっけ、歩いてたらいきなり後ろからおれのバッグを持っていちまったんだよ」

「姿とかは見たそうですよね？」

「おっ、よく知ってるな！ 身長180cmくらいで胸にdead or aliveと書かれた紺色のパーカーと青のジーンズを穿いた奴だったぜ。それと口に何かくわえてたような……。男か女か分からなかったけど、あの足の速さなら男だな。一瞬で盗られたから追いかけることすらできなかったぜ」

「そうですか……ありがとうございました」

「いや、こんくらいどうってことねえから」

「あんだだけで良かったのか？ ほかにもう少し聞いてもよかったと思うけどなー」

「他にあんまり聞くこと思いつかなかったし、なにより時間が惜し

かったからな」

「なんでだ？ まだ時間まで結構あるぞ」

レインはそう言って自分が買ってもらった腕時計を見た。時刻は8時をまわったところらしい。

「それは次の家が今くらい近かったらの話だろう？」

「まさか……………！？」

「そのまさかだよレイン君……………！」



「つたくなんでこんな所までこなきやいけないんだよ」

「まあまあ、落ち着いてくださいよおくく！」

「ルーみみたいな性格の人って——いいよな……………」

「何がですかあー？」

「ほら、着いたよ二人とも」

俺達はタクシーで30分くらい乗ってそこから徒歩で田んぼばかりの飽きる風景をみながら10分くらい歩き、4〜5軒くらい家が集まってるここにたどり着いた。

「ここかな？（コンコン！）すいませーん！」

「さっきから思ってるけど、インターホンあるのになんで押さないの？」

「ん？ やっぱりこっちの世界にもそういうのあるの？」

「当たり前でしょ？ グラニデなめてんの？」

「いやそういうわけじゃないんだけど……」

「あのおーこっちの世界って？」

「ああ、まだ話してなかったけ？」

（事情説明中………）

「えええええー！ー！ー！ー！？」 ユウマさん違う世界から来たのっ
！？」

「「……………！？」」

「あれ？ みなさんなんでこんなに固まっちゃってるんですか？」

「ハイネさんがそんな大声出すとは、思わなかったから……よね？」

「ああ、少なくとも俺はそうだ」

「そうですか？ 人間驚く時は、大声を出すものですよ」

「それより出てきませんね」

「ノックしたんだっけ？」

「広場に戻りますか？」

「結局ムダ足かよ……」

「どうしたんだ？ 人の家の前で？」

「あつ、ここに住んでいる人ですか？」

「勿論そうだが」

30代前半くらいの男の人が出てきた。こっちはさっきのチャライ
感じと違って質素な感じの人だ。

「それで何をしに来たんだ？」

「えっとおとしお金を盗られたんですよね？」

「その当時の状況を教えろってか」

「そうです。お願いします！」

「確か、細くて暗い道を歩いてた時かな。後ろから急に殴られてよお……。そして目が覚めたら病院のベッドの上だったんだよ」

「えっ！？ でも犯人見たんじゃないんですか!？」

「ああ、殴られた後も一応少しは意識があったんだよ。その様子だと特徴は知ってんだな？」

「あつ、はい。ありがとうございました！」

「がんばれよっ！」



【時刻9…20 中央広場 噴水前】

「さてどうするか……」

「とりあえず今までのことを整理してみようか」

「セシルそういうの得意なのか？」

「まあね。推理小説とかそういうの好きだから」

「私は本を読むのはちよつと苦手ですねぇ」

とため息混じりに言った。

意外だなく。ハイネさんみたいな人って意外と読書とか好きそうなの。
の。

「まず第一に二人の共通点を挙げてみよう」

「確か二人とも暗い道で襲われたのよね？」

「そうなるも必然的に人通りが少ないことになりますね」

「他には……ほとんどないんじゃない？」

「そうだね。他に共通点があるという可能性は皆無だろうね」
「なんでこんなにも情報が違うんだ？」

「それはどちらかが嘘をついてるからじゃないでしょうか？」

「「えっ!？」」

嘘をついている!？ それはどういう意味だ!？
もしかするとその二人のどちらかが犯人ってことか!？

「そういつてるんですよユウ君」

「おいルナ。まさか心が読めたとかそういうやつじゃないだろうな
？」

「そんなことあるわけじゃないですかあゝ。女の勘ですよお
こんな所で当たる勘は、女の勘と言わなかった気がする。」

「となると……—まさかっ!？」

「セシルさん分かったかな？」

「はい! ハイネさんも!？」

「私もついさっき気づいたばかりですけどね」

「おいセシル説明してくれ」

「つまり今までの証言の中に犯人がうっかり口を滑らしてありえないことを言ってるんだ」

「「うゝゝん……………」」

ありえないことか……。共通点は暗い所で襲われて、人は全然いなかった。

そして違うところは背丈から格好まですべて違った。

ああっ、クッソー……!! まったく分からねえ!!

「分かりました!!」

「それじゃルナさん説明してみてよ」

「はい、まず『暗い道で襲われたところ』これが重要なキーワードです。最初に尋ねた人の発言を今もう一度よく見直してください」

「確か『身長180cmくらいで胸にdead or aliveと書かれた紺色のパーカーと青のジーンズを穿いた奴だったぜ。それと口に何かくわえてたような……。男か女か分からなかったけど、あの足の速さなら男だな』だったよな？　これになんか変なことなんて――まさか！？」

「そうです。暗い道なのに紺色のパーカーなんて分かりません。暗闇でみたら黒も紺も似たようなものですからっ。そして一瞬で盗られたっていうのになんて書いてあるか言えてますしね」

「その推理に追加で加えますね。本人は後ろから盗られたと言ってますから口に何かくわえてたなんて分かりません。しかも気づかずに後ろから一瞬で盗られているからなおさらです」

「くっそおー！！　あいつにまんまと踊らされてたってか」

「とりあえずあいつの家に行こう！」

「二つの班に分けたほうがいい。祭りで見張るグループと家に行くグループとでね」

「それじゃ俺とルナとレインが祭りで見張るグループで、残りは家に向かってくれ」

「「了解」」

もっとうちに気づけば……………くっそ！

第16話 ユウマの両親（前書き）

たくさんのお気に入り小説登録ありがとうございます！！

このまま50を超えるとうれしいな〜って……ずうずうしい願望ですいません。

それと今ごろ書くのもおかしいかも知れないような事実の発覚です……。

第16話 ユウマの両親

◆ユウマSIDE◆

「とりあえずこのまま3人で行動しよう。バラバラになると奴の思うつぼだ」

「了解です！」

「任せとけて！」

俺達は中央広場から東に伸びている道に入った。

東通り（東にある道のこと）にはルナが言ったようにお店がそこそこの数でていた。

そして東通りを進んでいき、途中にある脇道に入った。

確かに今までの被害者たちが言っていたように、薄暗くて人がまったくいないほどいなく、服の文字なんか何を書いてあるのかさっぱり分からなかった。

「どうする？ このままここで待ち伏せしているか？」

「いや、それだと敵さんやっも出てこないだろ。ここは無難に囧作戦でいこうぜっ！」

「無難ってことは、ないと思いますけど……」

「それで誰が囧になるんだ？」

「「ジイーーーーー」（二人がユウマを見ている描写）」

「ササッ！！（俺が目をそらす描写）」

なんだ！？ なぜあいつらは、俺を見てるんだ！？
やれってかっ！？ 俺にやれってかっ！？

「レインくんわたし暗いのこわぁーい（棒読み）」

「なに！？　暗いのが怖い女の子を囹に使うわけにはいかないっ！
！　俺はルーを安全な所に避難させるからここはユウがんばれ！」
言いたい事を全部言い残すとレインとルナは今来た道を引き返して
いった。

「……って待ちやがれええー！ー！！　絶対ルナ怖がってないだ
ろ！？」

あんな棒読みで言ってるんだから怖いわけがない。
むしろ本当に怖いならここに入っただけに言うはずだ。

「くっそおおー！ー！ー！！　こうなったらやるしかねえ！」
ルナに貸してもらったバックを使い、細い道を往復しまくった。

（やっぱり顔がわれているから襲ってこないのか、もしくはこの道
ではなくて、他の道に行ったかのどっちかだろう。ならこんなとこ
でウロウロしてないで早く出るか。べっ、別に怖くなんかー！　バッ
！）

俺はツンデレのお決まりのセリフを言ってるときに、後ろから変な
気配を感じたから振り向いた。

「ちっ！」

身長が俺より少し低いくらい——つまり170cmくらいのサング
ラスをかけた男がポケットからサバイバルナイフを取り出した。言
い換えると今回の犯人だ。

「くらえっ！ー！」

「あぶねっ！　仕返しだっ！」

「くっ！」

俺は犯人が上から下にまるで釣竿を振るように振ってきたナイフを
サイドステップで右にずれ、その勢いのまま腰を落とし、相手のす

ねを思い切り蹴ったらこけてくれた。

実のところ俺は、こういった体術を使った接近戦がそこそこできたりする。



俺がまだ中学1年生のころ、両親を交通事故で亡くした。

俺は、その時友達と遊びに行っていたから交通事故には遭ってない。だけど当時は「俺もそのとき死んどけば良かった」とバカバカしいことを考えていた。

そんなバカな考えを綺麗サッパリなくしてくれた人がある。

父さんの仕事仲間だ。

俺の家は母さんが食品店で働いており、父さんは警察の仕事をしていた。

まあ、ようは共働きってやつだ。両親二人が死んでからというもの、俺はずっと泣いてばかりいた。

時には「自殺してやる!」とみんなに迷惑をかけたこともあった。

そんな俺を止めてくれたのが父さんの仕事仲間だ。

名前は名乗ってくれなかったし、父さんと具体的に何をしていたのかも言わなかった。

だけど、泣いてばかりの俺に嫌気がさしたんだろう。その人はこういった。

「まだお前の命はあるだろうがっ! 男がいつまでもメソメソしてんじゃねえっ!! 確かに両親を亡くしたりしたら俺でも泣くだろ

う。だけどそんないつまでもメソメソしてるわけでもない。俺だったら……自分の命が尽きるまで人の為に精一杯働く。だって――」

「てめえが知ったような口きくんじゃねえ!!」

「!?!」

泣いてばかりいた俺が、大声をあげたからみんなすごく驚いた表情をしていたのを覚えてる。

「父さんの仲間だったとかそんなのもうどうでもいいんだよ……! てめえに俺の気持ちの何が分かるんだよ!!」

「……確かに分からないかも知れねえ。だけどいつまでもそんなことを言っていていいわけないんだよ!! お前みたいな奴がまだ世の中には、いっぱいいる。だから助けなきゃいけないだろ!?!」

まだ精神的にガキだった俺にもその人が言っていることは充分に理解できた。

もうこんな悲しい気持ちは嫌だった。勿論他の人も嫌だろう。

「だったらどうすればいいんだよ!! 俺に何ができるんだよ!」

「強くなれ!!」

「っ!?!」

「精神的にも肉体的にもとにかく強くなれ!! そして自分ができることを精一杯しろ!」

「自分ができること……?」

俺は、とっくに泣き止んでその人の言うことに真剣に耳を傾けていた。

「ああそうだ。ただし正しいことだぞ。悪いことはするな、いいな？」

「うん!!」

「よし早速腕立て200回だ!」

「はい!」



といった風にこの人にある程度のことを教えてもらったことで今の俺がいる。

あの人がいなかったら俺は死んでいたかもしれない。

「くそ、逃げ——『吹き飛べ!』ぐはっ!?!」

サングラスの男は、木にぶつかり気絶した。

「ナイス!」

「まっ、こんなもんだって」

「お疲れ様でした。ユウ君」

「囧に使って悪かったな」

「まっ、もう過ぎたことだから気にすんな」

「とりあえず連絡とりましょう」

「そうだな。レインとルナはここに残って、警護隊がくるまでまっ
といてくれ」

「ユウは!?!」

「俺は、あいつらのところに行ってくる」

「はやめに帰ってこいよ——!」

俺は、今あの人の言うとおりに正しいことがやれているのだろうか?

第17話 初依頼完了!! (前書き)

文章評価とストーリー評価ありがとうございます!!
なんかいつもここでお礼のことしか言っていない気がします、
それは置いといて、なんかすこし展開が遅い気がします……。
もうちょい早くしたほうがいいんですかねえ？

第17話 初依頼完了!!

「みんな大丈夫か!？」

「ユウマ!？」

「私たちは大丈夫ですよっ」

「ユウマこそ大丈夫だったの？」

「ああ、こっちも無事に捕まえることができたぜ。そっちは……大丈夫そうだな」

アクア達の傍らには縄でグルグルにされて身動きがとれなくなったチャライ男がいた。

「それじゃこいつも警護隊に差し出すか」

「そうですね。みんなと合流してから一旦そこらへんの宿屋を借りましょう」

「「はい!!」」



【翌日の昼過ぎ】

朝の11時に宿屋を出たはずなのに1時くらいにヒストン学園にいた。

なぜそんなに時間がかかったかというと、警護隊の人でなんか偉そうな階級の人（実際こっちの警察のことはほとんど分からないから）に感謝状とかお礼とか事情聴取みたいにとにかく色々なことがあり、時間がかかってしまったからだ。

「クエストが終わったらどうするんだ？」

「もう一回受付の人の所にいくんですよ」

「すいませ〜ん！ チーム『アリエット』のハインですけど……」

「あつ、もう依頼人さんも来ていますよ!!」

「ありがとうございます！ はい、これ返しますね」

「はい、ご苦勞様でした!!」

と一連のやり取りが終わり、

「……まあこんな感じですね。チーム名とリーダーの名前を言うんです。そして依頼書をかえすんですよ。だけどその前にやらなければいけないことがあります——」

「依頼人に連絡とかか？」

「そうですね。だけど自分からじゃ分からないので受付の人を通して連絡するんですよ!」

「依頼が完了した時点で連絡するんだろうけど、まだ僕達この人に連絡する方法知りませんよ?」

「それなら心配しなくてもいいですよセシルさん。受付の人に頼めば」

ハインは、「ついて来て下さい」と言わんばかりに手招きしていた。俺達もその後についていった。

「すいません。携帯電話くれませんか?」

「新しいアリアンスですね? チーム名は何でしょうか?」

「えっと……チーム名は何ですか? ユウマさん」

「ごめん……。まだ決まってないんだ」

「それじゃ〜まだ渡せませんねえ。また後日来てください」

「「はい……………」」

俺達は一旦クエスト受託ギルドを出て、ヒストン学園の校門まででた。

「おっ、初任務お疲れさん♪ どうした？ なにか悩んでいるようだけど……？」

「あ、ディオ先生。いやアリアンスの名前がなかなか決められなくて……」

「なるほど……。だから悩んだのか……そんなもんすぐには出てこないからまた明日決めるといふのはどうだ？ それぞれの意見を言い合ってさ」

「いい考えじゃん♪」

「そうしようか」

「それじゃ今日は解散だなっ！ みんなゆっくり休めよ、まだ休みがあるんだし」

「「はい（おう）！！」」

「あのおうユウマさんすこしいですか？」

俺はみんなと途中まで帰ろうとした時、ハインさんから声をかけられた。

「別にいいですよ。それで用件はなんですか？」

「えっと『ユウマー！ 帰るわよ！』……」

「すみません！！ ちょっとってきます！」



「それでは……ユウマさん明日予定空いてますか？」

「別に空いてますけど、どうしたんですか？」

「いえ……あの……ちょっと付き合っただけなんですけどよろしいでしょうか？」

「デ、デ、デートってやつですか!？」

こんな可愛い子とデートなんて日本にいたころの俺にはできるわけがない!!

これは願ってもいないチャンス!

「デ、デートじゃないですけど………はう／／／」

「こそ、そうですか……」

世の中なんでも自分の思い通りにいくことはないと思われて知らされた気がする。

「ただ、ユウマさんが多分リーダーになるんだろうなと思って、すこし一緒に特訓しようかなと……」

「ほんとですか!？ いや、結構自分の腕が心配だったんですよ……
！ ありがとうございます!」

「いえいえ! 時間は午後1時に校門前でいいですか？」

「はい! それでは」

「また明日会いましょう」



「あれ? 遅かったじゃない」

「まあな。色々あったんだよ」

「ふう、くん、なんか怪しいわね……」

アクアはジト目で探るような視線をかけてきた。

「べ、別に怪しくなんかねえよ」

「まあいいわ。もうすぐご飯の準備するから手伝ってね」

「おう！」

（明日が楽しみだな〜♪）

第18話 特訓（前書き）

いまさらながらハイネとルナの口調が似てて、読んでて判断できるかな？と思った

（ハイネの語尾には「ですよっ」みたいに『っ』が入ることが多いはず）

第18話 特訓

「あれ？ 今日結構早起じゃん」

「まあな、今日は午後からすこし予定があるからな」

俺は珍しく朝の6時に起きていた。いつもは6時半くらいと学校に行くのに間に合うかどうかの時間だったが、今日はそれよりも30分早く起きた。

ただ単純に今日は休みだから体が無意識に起きてしまっただけだと思うが……細かいことは気にしないほうがいいだろう。

「予定ってどっかいくの？」

「まあな、友達と出かけるんだよ」

「友達って……ユウマこっちにもう友達できたの？」

「ま、まあな！ クラスの男の子だよ！」

俺は妙な探りを入れられないようにするため、部屋を出た。

実は、俺はあまりハイネさんと二人で出掛ける（特訓）するつてのをあまり言いたくなかったりする。

なんか妙な誤解を招きそうだし——できれば平凡にこっちの世界で暮らしたい。

まあ、世界が世界だから完璧には無理だろうが、厄介事は少ないに限るだろう。

「よし、このまま『なつや』に行くか」

こちらの武器——萌芽刀はたまに整備にださなければいけないらしい。どうせ刀を持ったまま出てきたから、このさいに行ったほうがいいだろう。



「すみません！ ハナビ店長いますかぁー？」

「はいはい、どうかしましたか？ シライシさん」

あれ？ 呼び方変わった？

「萌芽刀の整備してくれますか？」

「はい、お安い御用です。そこにあるイスに腰掛けて待っててください。問題がなければ2分くらいで終わりますんで」

ハナビ店長はそういつて刀を見始めた。

……さて。この後どうするかなあ……。今の時刻は8時。家を出たのは7時半だから（部屋の中にこもって色々やっていた為）また戻るのに30分使うとしても8時半だから予定までには全然時間がある。

うーん、どうするべきか……………。

「シライシさん、終わりましたよ。何も異常がなかったんでもう大丈夫ですよ」

「ありがとう、ハナビ店長」

俺は『なつや』を後にした。



「ユウマさーん！ ハア…ハア……待ちました？」

「いや全然待ってないから大丈夫ですよ」

あれから俺は結局、そこらへんのコンビニの雑誌を立ち読みしてか

ら、こっちの本屋さんとゲームショップに行った。

もともとこっちの娯楽文化も見てみたかったし、時間も潰したかったから好都合だろう。

そして店を回るうちに思ったのは意外とこっちの世界の開店は早いことが分かった。

だってゲームショップとかこんなに早くやってないだろ？

「ところでどこで訓練するんですか？」

「ヒストン学園には訓練とかするための闘技場があるんですよ」

「それでは行きましょう」

「はい！」

「いいですか、ユウマさん。手加減は無用です。本気でかかってきてください」

ハイネさんは今までにないような真剣な口調と顔で言った。

そしてそれと同時にハイネさんを中心ににか闘気の渦みたいなのが発生しているのが分かった。

（ハイネさんの周りの渦みたいなのは何だ？　なんかの錯覚か！？）

「ぼっーとする余裕があるとは驚きですね」

「っー！？」

刹那、一瞬にしてユウマに近づいて思い切り訓練用の木刀を振りかざした。

ユウマは、木刀を動かす暇もなくもろにあたってしまった。

（なんだこれは！？　ハイネさんの動きがまったく見えなかった…
…！）

「んー……ユウマさん今の私の動き見えてました？」

「す、すいませんっ!! 全然見えませんでした!!」

「それは、そうですね。まだ《縮地^{しゅくち}》というものを見たことないと思いましたから」

「縮地？ なんですかそれは」

「まず私のことについて話しますね。私はユウマさんの一つ上の学年の武器特化種族です」

「武器特化種族ですか……」

「そうですね。ユウマさんは武魔特化種族でしたよね？ でもまだ1年生なので武器だけ極めればいいと思います。本題に戻しますが、2年生になると武器特化種族はあることをやります」

「あることってというのが——縮地のことですか？」

「そうです。これをマスターすれば自由にすばやく移動することができます。接近戦が得意といわれている種族ですからこの技を覚えるのと覚ええないのでは、戦い方がずいぶんと変わってきます」

ハインは再び縮地で元の位置に戻った。

「だけど、この技を覚えるのはかなり苦労すると思いますよ？ 覚えてるのも武器特化種族の半分程度ですし……」

「それを覚えてるんなってすごいじゃないですかっ!!」

「えっ……そんなお世辞を言わなくてもいいですよ？」

「違いますよ。純粹に思っていることを言っただけです。こんなに強くて、き——『ウォー——ン!!』」

「ユウマさん下がって!」

「はっ、はい!!」

窓からいきなり狼の形をした魔物みたいな奴が一匹入ってきた。窓が幸い開いていたから窓ガラスは割られなかった。

「なんで魔物がこんなところに………!!」

「あのお……こいつやばいやつなんですか?」

「いえ、ウルフと言って強さでいうとそこまで強くないんですが」

「僕も加勢しましょうか?」

「ええ……! いい実践経験にもなるし構いません。それと（クイクイ）」

手招きをしているから俺は近づいていった。

「……………ゴニョ……………ゴニョ」

「分かりました。先に行かせてもらいます!!」

俺は、置いておいた萌芽刀をとり走った。

「《地龍閃》!!」

「キャン!？」

そのまま勢いを殺さず相手の懐まで行き、萌芽刀にある属性というものを思い切りしぼり出すように突きを試みた。

そうすると萌芽刀から何かは、よく分からないがエネルギーみたいなものが出て相手に直撃した。

「おお!! 初めてにしてはなかなかのもんですよっ!」

「良かった……。これで何も出なかったらただ単に技名叫んで刀を振り下ろしてる変態だからな……」

「ガウッ……」

ユウマの攻撃とは裏腹に、ウルフはまだ生きていた。

「うーん、もうめんどくさいから私がやっちゃってもいいですか?」

「はい! ハイネさんの技も見たいですし」

「こんな奴は、縮地だけで充分です（ニコッ）」

ハイネはすぐさま縮地でウルフの懐に近づき持っていた木刀で斬った。

「ユウマさん!! 私の刀をとってください!」

「分かりました！ どうぞ！」

俺はハイネさんに向かって思い切り投げた。

「っ！！」

だけど思ってたより右に投げすぎたためハイネさんが取れないような場所に投げてしまった。

「……ナイスパス——です！ 《縮地》！」

投げた方向に一気に縮地で近づき、刀をとりまた縮地で戻り、

「この辺で終わりといきましょうか魔物さん♪」

時間にしてわずか2秒弱。ウルフの体から多量の血がでた。

俺の目には、なにをやっているのかがまったく分からなかった。

「これが縮地の最高速度です。どうでしたか？ ユウマさっ——」

「すごすぎですっ！ 俺も今のムツチャ惚れました！！」

「ええっっ——！！！！？？ そっ、そんな急に言われても……その………はう／＼／＼」

「俺もハイネさ——いえハイネ隊長みたいに強くなりたいです！」

「あっ………そっちの惚れたですか……？」

「ん？ どうかしましたか？」

「いっ、いえ！ なんでもないですよ！ ユウマさんなら絶対できると思いますよ」

そのあと日が暮れるまでユウマは、ハイネと剣さばきと萌芽刀の属性の引き出しの練習をした。

盗み聞きされてるとは気づかずに……。

男子生徒A「あのクソ野郎………！！」

第18話 特訓（後書き）

一旦全部読み直してまた編集しようと思っ
てます。
暇があったらもう一度読み直してはどう
でしょうか？

第19話 歯医者は何歳になっても嫌なものだ（前書き）

活動報告に書いたようにテスト前で忙しいのでカタツムリ更新にな
ってしまいます。すみません……。

第19話 歯医者は何歳になっても嫌なものだ

「おーし！ 休み中ゆっくり休めたようだな。こっからはビシバシ行くぞ！」

「はーい！！！」

一週間の休みを経て、俺達の1年C組の授業が始まった。
まあ、俺達は実質ほとんど休んでないような気がするけど……。

「それじゃー1時間目は武器の授業だから俺だな。その前にユウマとその仲間たち、こっちこい」

「その仲間達って……アクアたちのことですか？」

「その通り！」

俺達は廊下に呼び出された。勿論他の生徒達は自習ということになっている。

「ところでお前達、アリアンスのチーム名決まったのか？」

「あっ、はい！ 朝集まって決めました」

「でなんにしたんだ？」

「チーム『オリエツト』です」

「ほお、由来は……？」

「僕達のことを助けてくれた先輩——ハイネ隊長のチームみたいに
なりたいたいという意味です」

「なるほど……。まあ悪くないな」

「ありがとうございます！」

「それじゃー早速いつてこい。ギルドで携帯電話貰う必要あるだろう？」

「いいんですか？ 授業中なのに……」

「まあ、今日は自習にしとくから。だけど2時間目には戻ってくるんだぞ？」

「はい！！」



「ハイネ隊長！ お久しぶりです！！」

「あつ、別にハイネさんでいいですよっ。恥ずかしいですし……」

「それじゃせめてハイネ先輩で」

「それなら別にいいですけど……」

「なーんかユウマ、やけにハイネさんと仲良くなってるじゃない」

「き、気のせいだよ！！」

「おい、ユウ！ 抜け駆けはせこいぞ！！」

「べっ、別に抜け駆けなんてしてないだろ！？」

「ユウ君、それじゃなんでそんなに仲良くなってるんですか？」

「それは……そんなことより早く貰おうぜ」

「話そらしましたね……！」

だって死の予感しかないからな。

「あのー携帯電話とりにきたんですが」

「あつ、この前のチームの方ですね！ チーム名は決まったんですか？」

「はい、『オリエツト』です」

「それじゃ登録しておきますのでしばらく待ってください。5人ですね？」

「はい！　お願いします」

「オリエツトってなんか私のチーム名に似ているような……」

「ハインさんのチームみたいになりたいという由来ですよ」

「そっ、そんな！　私なんかのチームを尊敬してくれるなんて……」

「できましたよー！」

俺は受付の人から携帯5機を渡された。

袋に入っていて中には、説明書らしきものも入っていた。

「それでは、私は帰りますね」

「はい、ありがとうございました！」

そしてその後何事もなく普通に時間が過ぎていき……。

「よし今日の授業はここまでだ。各自復習しておけよ。連絡もないからこのまま帰ってよし」

「ユウ帰ろうぜ！」

「ああ、だけどどっかよってかないか？」

「あっ、それなら俺の家くるか？」

「いいのか！？」

「なんならみんな誘おうぜっ！　おーい、セシルうー！」

俺達は、レインの家に行くことにした。



【中央ブロック レインの家】

「両親がいないから気を使わなくてもいいぜ」

「「おじゃましまーす！」」

「そんじゃ、何やる？」

「ゲームでもやるか？」

レインは、ゲームがいっぱい入ってる箱から一つのゲームを取り出した。

その表紙にはこう書いてあった。

大乱闘スマッシュブラ○ーズX、と。

「なんかこれ俺の世界でむっちゃみたことあるゲームなんだけど！？」

「まじで！？ そっちの世界にもあったんか？」

「ああ、だけどこのゲーム4人じゃなかったか？」

「そこは心配しなくても改造してもらって6人までやれるようにしたから」

いったいどんな改造をしたら、そうなるのかぜひとも教えて欲しい。

「私、ゲームあんまりやったことないからなあ」

「なんなら私が教えましょうか？」

「ルナ、ゲーム得意なのか？」

「はい。結構ゲーム好きなんですよ」

「おっ、俺も好きだぜ」

「僕はどっちかっていうと好きかな？」

「レインとセシルもかつ！？ 俺達変なところで気が合うな……」

「さっそくやりましょう！」

ゲームを起動して、普通の大乱闘モードにしてキャラクターを選ぶところまでいった。

「ぶっ！！」

「どうした？」

「なんでもない！」

キャラクターの見た目は、日本のと変わらないけど名前が！！

マリオットって誰だよ！？ なんかハワイにそのような地名があった気がするけど。

ほかにもカビ、ピック、アイス、カップ、ブス……etc
てかこれもはや別の物じゃねえか！？

カビとブスなんて可哀想にもほどがあるだろっ！？

これ作った奴、俺の世界のピンクのまん丸と赤い帽子をかぶった少年（おっさんじゃないほうだよ？）にあやまれ！！

「あの、これなんか名前おかしくくないですか？」

「ああ、改造したからここだけちょっと変になっちゃってな」

「おいおい……。それはひどいだろ」

「んじゃ俺は、○スで」

○で隠してもそのまま読むと隠している意味ないような……。。

「それじゃ、僕はドン○ーで」

「私は……何がいいと思う？」

初心者のアクアは、何を選ぶか困っていた。

まあ、無理もないな。キャラが多いから何がいかと分からないし。

「ファ○コとかどうですか？ 遠距離が使いやすいですし」

「それじゃそうしよっかな？」

「私は、アイス……じゃなくてアイ○にします」

「それじゃ俺は、ピカチュ○だな」

ピカチュ○は可愛いし、強いし、使いやすいで完璧なキャラだからな。

正直最下位になることはないと思う。

「「レッツ、ダイラントウ!!」」

第19話 歯医者は何歳になっても嫌なものだ（後書き）

思いつきパロディ

第20話 人間やる時はやるもんだ（前書き）

たくさんのお気に入り登録ありがとうございます！！

ついに、ついに……25件をこえましたー！！

この作品もみなさんの応援があり、成り立っていると思います。
これからどうぞよろしくおねがいします。

（あとは感想だけです…）

第20話 人間やる時はやるもんだ

あれからゲームを3時間ほどやった。

学校の授業時間が少ないせい、日本にいるときより長く遊べた気がする。

「アクアちゃんゲームの飲み込み結構早かったですね」

「そ、そう？ 私初めてだったんだけど……」

「その割には3連勝したもんな」

アクアは奇跡的に3連勝をしたのだ。

しかも初心者だぜ？ これは知ってる人は知ってると思うが、何回もやったことある人とやったことない人では、勝てる確立は全然違う。だから3連勝することはすごいことだ。

「はは。まあ、あまり戦いに参加してなかったからな」

と苦笑いをしながらいうレイン。負けたことがショックなのか？ 子供だな〜。

「人間やる時はやるもんなんだよ」

「セシル君の言うとおりですよ〜」

なんか名言っぽい言葉だな……。

「そういえばもうなんだかんだで5時だよ？」

「まじか……みんな帰るか？」

「そうだね。今日は久々の学校で疲れたから」

「私も帰ろうと思います」

「気をつけて帰れよ」

「ああ、またな」

ユウマ達はそれぞれの家に帰ることにした。

男子生徒A「よう！ シライシ」

「げっ！ てめえは！？」

「ん？ ユウマの知り合い？」

「知り合い……なのかな？」

「なんで聞いているのに疑問形で返してくるのよっ！」

男子生徒A「アクア様。ちょっとこいつ借りていいですか？」

「別にいいけど……なぜに様付け？」

男子生徒A「いえいえ。お気になさらずに。では」

俺は、そのまま別の場所に連れて行かれた。
なんか敬語使ってて気味悪いんだけど……。



【空き倉庫】

男子生徒B「やあ、シライシ」

男子生徒G「よく来たな」

「お前らなんの用だ」

こいつらがいるってことは悪い予感しかない。

男子生徒A「お前が年上の綺麗なお姉様と仲良くしてるところをみ

「ただよー!!」

「まさかっ! あの時!!」

男子生徒B「アクア様やルナ様がいるってのに……!!」

男子生徒G「てめえを……殺す!! もてない男をなめるなよっ!」

なんかすごくこわいんだけどおーおー!!?

なんか刀とか持ち始めたし!!

男子生徒A「覚悟ー!! 《火龍閃》!」

男子生徒Aは手にしていた刀を突きของ構えに持ち直し、こっちに突っ込んできた。

あれは俺がこの前教えてもらった技の属性違いか!?

男子生徒B「《ウェーブ》!」

今度は魔法!? こいつらとんだけ本気なんだよ……。なら俺も本気で行くか……。

俺は二つの攻撃をAのやつはサイドステップで避け、Bの魔法はダッシュでBの懐までいき回避した。

けどウェーブは2mくらいの波を起こす広範囲魔法、だから完璧には避けきれないからすこし傷を負ってしまった。だけど――

「こいつでどうだ!!」

男子生徒B「何!! ぐへ!」

やられっぱなしってのは、俺自身あまり好きじゃない。Mでもないし。

だけど懷に潜り込んだので、そのまま刀を下から上に切り上げた。

男子生徒A「Bっくく!!」

「余所見とは余裕だな!」

男子生徒Aも同じように吹き飛ばした。

「あれ? Gどこいった?」

男子生徒G「この野郎!!」

後ろから棍棒みたいなものを振り下ろしてきた。
こいつ今まで何してたんだよ……。

俺は刀で受け止めそのまま、押しきろうとした。

「くっ! なかなかやるじゃねえか……!」

男子生徒G「お前もだよ!!」

だけどそう簡単にもいかなかった。そのまま押し合いが続いた。

「悪いなG。俺も異世界にきてから変わったんだ。まあ、前の俺知らないから分らないと思うが」

男子生徒G「何が変わったんだ? 一応聞いといてやる……!」
「ありがとなっ! お前はすこしは話せそうだ……!」

「俺はこっちの世界にきてから変わった。確かに平凡も悪くねえ。
だけど非日常もいいなっって思い始めた」

男子生徒G「んで?」

「だって非日常じゃないと、強くなったりできないだろ？」

俺は不良とかにもあまり絡まれたりしなかったから、俺の目標に対する意識も次第に薄れていった。だから今の日々もすこしは「いいかな？」と思い始めてきた。この世界でもいろんなことが学べた気がする。まだきて間もないけどなっ！

俺は、相手の棍棒を一旦横にありったけの力をこめ払った。

男子生徒G「——っっ!？」

「安心しろ。お前ら全員峰打ちだ」

俺は刀を戻し峰打ちをした床に沈ませた。

「……………ふう。我ながら派手にやったもんだな」

ユウマは男子生徒達を端っこに寝かせて、倉庫内にあった枕を使い寝かしといた。

「襲われた身としてこんなことするのは、おかしいかもしれないけどな。色々思い出させてくれたし、いい実践の経験にもなったからな」

さて、早く帰るか。アクアに怒られるのもやだしな。

男子生徒G「……………ありがとな」

第20話 人間やる時はやるもんだ（後書き）

技名《》でくくることにしました。
見やすいかなと思って。

第21話 東ブロックへ(前書き)

初感想ありがとうございます!!

感想もらえると作者側としては嬉しいです。

これからどうぞよろしくお願いします!!

第21話 東ブロックへ

「ということで今すぐ東ブロックへ行って来い」

「マジですかああー！ー！ー！？」

時は数分前にさかのぼる……。



俺はあの次の日何事もなかったように登校していた。

男子生徒Aたちとも会ったが、互いに言葉を喋らずスルーした。

まっ、いわゆる喧嘩した後の気まずさ？　っていうものだな。

そしてそのまま実技の授業が始まった。

「魔法特化種族の人には関係ないが、武器特化種族にはおおいに関係するからちゃんと聞いとけよ。魔法特化種族の人はあっちの方で適当に自習していてくれ」

「「ういっす（はい）！！」」

適当になんか言っているのか！？

そして魔法特化種族の人達は遠くへ行ってしまった。

「武器にはそれぞれ属性というものがあるのは知ってるな？　知らない人もいそうだから一応教えとくか……。魔法特化種族は属性を基として戦うのはみんな知ってることだろ。だけど武器特化種族も実は属性が結構重要になってくる。お前達も成長すればアリアンスを組んで依頼を受けるだろうが、依頼の中にも非常に強い敵と戦うことになるだろう」

そこで一旦言葉を切り、ディオ先生はこちらをチラッと見てきた。

同意を求めにきてるけど、正直今回の依頼の敵あまり強くなかったんだけどなあ……。

だってまだこっちに着て間もない平凡な高校生が倒すくらいなんだから。

「そこでだ！ 属性を使った攻撃をすれば威力があがるのだっ！！」

「「おおっ……！！」」

このクラスもノリがいいんだな……。

「そんじゃ——ユウマ！ ためしにこのカカシに属性攻撃してみろ」
ふいに話をこちらに振ってきた。

「写輪眼とか雷切を使ってきて逆に攻撃する側が死にかけることはないですよね？」

「何のことを言ってるんだ？ こんな木の棒が動くわけないだろう」

「そ、そうですよね」

俺はそのままカカシの近くまでよって行った。

説明してなかったけど、ここは学園内にある闘技場だ。

ここは誰でも訓練のためなら使ってもいいことになってる。

だけど授業優先にしなければいけない。まあ、当たり前か。

ものすごく広く日本の高校の運動場の約5倍はあり、隅っこの方では仕切りがあって個別で訓練とかできるようになっている。この前も仕切りがあるところで訓練をした。

「いくぜっ……… 《地龍閃》！！」

俺は刀を突きของ構えにし思い切りカカシに向かって突いた。

そうすると前やった時とは違い、剣の先端からエネルギーみたいなものが出てカカシを吹き飛ばした。

なんだ？　これ？

「おっ！　もう突まで使えるのか！？」

「突ってなんですか？」

「各属性の閃系の技の遠距離バージョンみたいなものだ。それがあれば離れている敵にも容易に攻撃を当てることができる便利な技だ」

「「おおっくくく！　（パチパチ）」」

そんなすごいことをしたのかな？　みんな拍手までしてるし。

「はっ、そんなもん俺だってできるぜ！！　《火龍閃・突》^{かりゅうせんとつ}！」

レインも隣にあったカカシを属性攻撃で吹っ飛ばしていた。

さすがレインといったとこだ。でかい武器持つてるだけはある。

「レインもできるのか！？　今年はレベルが高そうだなあー」

いや、俺平凡な高校生だから——っってもうこんなこと出来る時点で平凡ではないか……。

さよなら僕の平凡。もうあの頃には戻れ——

『キャー！　ユウマくんかっこいい！！』

『レイン君もすごおーい！！』

『……………レインも暗殺リストに加えておけ』

『……………了解』

『おおっ！　やっぱアリアンスやってる奴は俺達とは桁が違うな』

——純粹に褒めてもらうのは嬉しい。

正し俺はイケメンでもないのにかっこいいを使うのはおかしいと思う。

イケメンな奴はもっとイケメンだし、それに……………なんか危ない目に

あいそうだし。

「おいこら。俺はかっこいいって言われてないから暗殺リストに加えるのは止めてくれ!!」

『それもそうだな……。レインは消しとけ。ユウマはそのままで』
『了解!!』

「まつんだ!! 俺はもうリストに入ること確定なの!？」
やっぱり平凡はもう戻ってこないの!？」

「おし、ユウマとレイン。お前達そんだけ実力があるなら受付行つてこの依頼を貰って来い」

「先生も無視ですかっ……!？」

依頼書 東ブロックの問題について…… 依頼人 宿屋の夫婦

詳しくはこちらにお越しく下さい。

なんとも適当な依頼書だな……。

「先生! 確か『アリアンスの仕事より授業優先』って書いてあった気が済むんですが」

「そんなこと気にした奴の負けだ。オリエットは直ちにクエスト受託ギルドへ向かえ」

「「マジですかああー……!？」」



そして今に至るわけだ。そして俺達はギルドへ向かいすぐに手続き

をして向かうことにした。

「何で行くんだ？」

「僕は電車がいいと思う。あれなら移動も早いし」

「そうですねえ……それでいいと思います」

俺達はいつものメンバーで東ブロックに行くことにした。

【東ブロック 宿屋】

俺達は宿屋の前についた。ここに来る途中で分かったことがいくつかある。

まず一つは、東ブロックは非常に自然豊かな場所だってこと。

まわりは畑などが多くとても田舎っぽい感じがした。

二つ目は、やけに草木が食べられてること。なんか今回の依頼に係するのだろうか？

「失礼しまーす。アリアンスのチーム『オリエット』ですけど」

「よくきたねえ〜。長旅で疲れたでしょ？ 今日はずっと休んでいってちょうだい」

「でも母さん。部屋が上の一つしか空いてないんだけど」

「嘘っ！？ ……一部屋でもいいかしら？」

「「どうぞお構いなく……」」

「休む前に仕事の内容教えてくれますか？」

「そうだったね。内容は最近こちらへんで魔物が草木を食い荒らしてね。このままでは草木がなくなっって生態系が乱れてしまう。そこで君らに頼んだわけだ」

通りであんなに草木が食べられてたのか。まさか魔物の仕業だとは……。

「ようするにその魔物の退治ってことですね？」

「ああ、頼むよ。最近では人間までもが襲われてね。一人大怪我してしまったんだよ」

「分かりました。それでは明日から依頼を遂行します。上で休憩しますね」

「ああ。頼んだよ」

なんかこうしてるとセシルがリーダーっぽい感じがするなあ……。俺ももっとしっかりしないと……！

「……………えっ!？」

俺達は部屋を見て驚いた。まず広さが畳6畳半くらいといったところだろうか？

あまり言っではいけないことだけど、とにかくせまい。しかも人数が5人だからなおさらだ。

そして次に部屋に何も置いてないこと。電気と押入れに布団などはあるけど、それ以外は何もないということ。自分で置けと……？

「まずは冷静になろうぜ」

冷静になって言ってるレインが一番そわそわしていて、これほど天邪鬼な発言はないだろうと思った。

「レインが一番そわそわしてるよね!？」

おっ！ 久々の突っ込み。

「とりあえずこのことは——『ご飯できたわよー!』下にいこう

……」

「そうね……」

ちなみに食事は三食とも宿屋のお母さんが作ってくれるらしい。

風呂は、来る途中に入ってきたからいいけど、明日からはここの宿のを使ってもいいらしい。

なんか嫌な予感しかしないなあと思っただった。

第21話 東ブロックへ（後書き）

キャラクター紹介のところに武器特化種族の属性のせるの忘れていたことに気づいたんで、のせときました。

ユウ「本当はただ単にわ『奥義 回し蹴り』ぐはっ!!」
作者「次回もよろしく!!」

ユウマ以外「……………」

第22話 10?の涙(前書き)

祝 PV20000アクセスとユニーク40000アクセス突破!

この調子で読んでもらえる人を増やしていきたいです!

なんか今回もやたらとコメデー!。(ラブも)

だけど!?

第22話 10?の涙

「さて……これをどうするか」

「そうね……。依頼よりかこっちの方が重要だわ」

現在の時刻は夜9時。夜ご飯を食べてから俺達はここに来るまでにけっこう疲れた。だから今日は早めに寝ることにした。

だけど一つ問題がある。それはこの部屋の狭さだ。別にこれだけが問題じゃないんだが……。

「よしっ！ それじゃ寝るとこ決めるクジをしようぜ！！」

「なんでそうなるのよっ！？」

「なんで？ だって寝るとこ決めなきゃ」

「だって……男と女じゃない！！ 一緒に寝るのはおかしいでしょ！？」

「だったら聞きますよ！？」 姉御。もし俺達のどちらかが廊下で寝たとしたら風邪をひくぜっ？ そして明日の依頼に支障が出る。そんなことになってもいいのか！？ どうなんだ！？」

「うっ……確かにそうだけど」

おっ！ 珍しくレインが押してる。いつもやられる側なのに。

「……それじゃクジ引き始めよ」

アクアはレインに説得されたのか、もうどうでもいい感じたっぷり顔だった。

「悪いな、ルナ」

「いっ、いえいえ！！」

なんか知れないけど、ルナは顔を赤くして俯いた。

「夜、ベッド、男女………きゃ！／／／」

なんか変な方向にトリップしてるからほつとこう。

「それじゃ、この紙に番号が書いてあるから左から順に1から5の順に寝るってことで」

「まず俺だな！……5番か」

レインは一番端っこの場所を引いた。しかもその場所は扉の前だから結構危ないポジションだったりする。色々と。

「次は私ね！……2番」

アクアは左の方の場所を引いた。なかなか微妙なポジションだな。後ろから「きたー！これ姉御から攻撃されずにー」 「死ぬ☆」「ギャー！」とか聞こえるけど気にしないでおう。巻き添えくらいたくないし。

「今度は私ですう。……4番」

ということは……3番引いた人って一種の地獄だな！！

「ユウマ、先引きなよ」

「いやいや、セシルこそ」

「いや、ユウマこそ」

「いやいや……」

「早く引けよ！！」

「はい……」

ジャンケンでセシルから引くことになった。

「そんじゃ僕から……1番」

『失せよ煩惱。消えよ邪念。我が心を無にせよ……』

「何詠唱っぽいことしてるんですか？ ユウ君」

「いや、ちょっと邪念を消そうと」

「いいなあー！！ ルーと姉御の隣いいなあー！！」
レインはなぜかぼろぼろの姿で俺の状況をうらやましがっていた。
あれ？ さっきアクアの近くを嫌がってた気がする。まあ、深くは
考えないでおこう。

さて。俺も、美少女二人と一緒に寝れるのはうれしいけど、理性を
保てるようがんばらなくては。

「それじゃ寝ようか。おやすみ」
そういつてセシルは電気を消した。



――ユウマSIDE――

まずい！ まずい！ まずいー！！ どうしてこうなった！？

あれから2時間後。俺は未だに寝れずにいた。

嫌だといったたアクアでさえも30分後には「スースー……」とす
っかりと寝てしまった。

そして一番まずいのは、この俺の状況！！ 隣には太股をあらわに
して寝ていて俺の手を握っているアクア。

そしてそのまた隣には俺を枕と勘違いして抱きついてるルナ様（若
干寝巻きがはだけて胸が……）

しかもルナ様の大きな二つのなにかが当たってるううー！！！！！！

何この状況！？ どのこのハーレム！？ これで理性が保てるとでも
！？

「ムニヤムニヤ……きゃ！ ユウ君そんなことしちゃダメですよ
……………／／／」

これ以上抱きつくなああー！！！！ これでは理性が保てない

いー！ー！！

しかも夢の中の俺ええー！ー！ー！ー！？ ルナ様に何やってんだ！？

「なんとかこの状況を打破しなければ………！！ なんか使えそうなのは」

俺達の荷物に、仰向けに寝ているセシルに、俺達の武器と携帯電話に、鼻血を出し幸せそうな顔をして倒れてるレイン……。

「ダメだ……。役に立ちそうなものが一つもない……。ちなみにレインはスルーだ。明日聞けばいいし。」

「寝れねえええー！ー！ー！ー！！」



【翌日】

「「いってきまーす！！」」

「頼んだよおー！ー！！」

あれから結局全然寝れず朝を迎えてしまった。レインはなぜかピンピンしており顔がすこし火照っていた。まあ、セシル以外それぞれが気まずい状況にあるわけだが。

そして俺達は依頼のため近くの森に出向いた。

「ユウ、ちょっと」

「ん？」

（昨日はすごかったよな）

（何がだよ）

（ルナ様の胸と姉御の太股！！）

（っ！！）

（俺は、耐え切れなくて鼻血を出して倒れたんだ。誰にも見られなくてよかったぜ）

俺は見ただけだな。

（ちなみにそのときハインさんから買ってもらったカメラで撮影した写真がこれだ！）

（おおっ！！！）

（運が悪いことに電池切れで4枚しか撮れなかったけど、2枚なら500円で売ってやるぜ）

（マジかっ！！　ありが——）

「びりびり（アクアが写真を切り刻む音）　ぼう！（ライターで燃やす音）」

「「ああああ——！！！！」」

「……ユウ君たち覚悟はできてますか？」

笑顔だけど目が笑ってないから怖い。

「魔物の前にあなた達をどうにかするようねえ？」

「「や、やめ——」」

「「ギャーーーーー！！」」



【宿屋近くの森】

「なんか魔物と戦う前にぼろぼろなのが二人いるんだけど……」

「まあ、大丈夫でしょ」

「そうですね」

「それじゃ行くよ」

「はい！」

「気を引き締めなきゃね」

「……………ルナとアクアの」

「……………写真が」

「いつまで言ってるんだよ。二人とも」

「まだお仕置きが必要みたいね。ルナちゃん」

「そうですね。アクアちゃん」

「「さっさと行こう!!」」

俺達は森の中へ入っていった。

第23話 オリエツト、初の魔物との戦闘！ VS ベオウルフ（前書き）

二日連続の投稿。やっと戦闘シーンに突入できそうです。
感想まってまーす！！

第23話 オリエツト、初の魔物との戦闘！ VSベオウルフ

「さて……どうやったら魔物を懲らしめることができるか、を議題に作戦会議をしたいと思います」

「「イエーイ！！」」

やっぱりこのノリなの！？

「まず被害状況を確認したいから、副リーダーのセシルよろしく」

「いつの間に僕は副リーダーになったんだ……」

「ユウマよりもあんだの方がしつかりとしてるからじゃない？」

「セシル君がんばってください！！」

セシルは文句を言いながらも、地面に文字や絵を書き始めた。

それとアクアは俺をいっつもバカにしてる気がする。

「まず、大事なのはこいつらによる被害状況だね。最近こころへんで魔物が草木を食いあらし、人間一人が魔物に襲われて大怪我——っといったところかな？」

「さすがだな。うまいぐらいにまとまってるぜっ！」

「でもこれじゃ分からなくないか？ どんな魔物が襲ったとかなぜ襲ったのかとか」

「いや実は襲った魔物については、調べがついてる」

セシルはカバンの中から大きな図鑑ぐらいの厚さがある本を取り出した。

「なんだそれ？」

「魔物図鑑だよ。今まであった魔物が自動で記録されるんだ。まあ、最初から登録されてるものもあるけどね」

「それで調べがついてるって魔物の種類が分かってるってことです

か？」

「まあね。魔物の名前は、ベオウルフ草食狼。体長は80cmくらいでそこま
で気性は荒くないけど、食べ物のことになると非常に気性が荒くな
るらしい。あと群れで行動することが多いって」

ようは食い意地がはってる狼ってことね。

「でも草食系の狼か……。なんか捕まえにくそうね……」

「草食動物は逃げ足が速いし、頭が切れるからな」

「あれ？ でもおかしくないですか？」

「何がだ？」

「だって襲われた人に事情を聞きましたけど、ただ歩いてるだけで
襲われたって言ってましたよ？」

確かにおかしい。ベオウルフってのがよく分からないが、地球の草
食動物は自分達に危害を加えられない限り手出しをしたりしないず
だ。ましてや人を襲うなんてありえない。となると……！！

「第三者による計画的な犯行、だね」

「そうなる、あの宿屋がある町の人が犯人？」

「いや、それはないだろ。誰がその道を通るかなんて分からないか
ら、おそらく通り魔みたいな思考で今回のことをやったんだろう」

「ユウにしてはまともな意見言うじゃねえか」

「お前にだけは言われたくない！！」

「とりあえず一旦戻って草食狼の好む草団子を作ってもらおう」

「「おおっ——！！」」



【宿屋】

「おや？ えらく早かったねえ〜」

「おばさん！ 今すぐ草団子つくれる!？」

「べっ、別に作れるけど……どうしたんだい？ そんなもんどうや
って使うんだ？」

「まっ、色々あんのよ」

――15分後――

「はい、できたよ!」

「ありがとう!!」



【森の中】

俺達は、森の中に戻り一番広い草地のところに草団子を15個ほど置
いた。

そして待つこと20分。

「グルル――……」

狼みたいな魔物が10匹出てきた。

図鑑で見せてもらったのと同じ大きさで草団子を食べ始めたから、
ベオウルフに間違いはない。

（……レイン行くぞっ!!）

（……おう!!）

（待つんだ二人とも!!）

（なんだよ……。まだなんかあるのかよ）

（僕は一度だけこいつらと戦ったことがあるんだ）

（私もよ）

（私も戦ったことあるですう……）

（こいつらは動きが素早くて隙が出来にくい。だから飛び出した瞬間、それぞれが背中あわせになって欲しいんだ）

（いわゆる五角形を作れてことですね！？）

（そういうこと……！　いくよっ！）

俺達はセシルの合図とともに走り出した。

そしてすぐさま狼の群れの真ん中に飛び込み、背中合わせになった。

「みんないい！？　こいつらに隙を見せちゃダメだからねっ！？」

「了解！！」

「それじゃこっちからやらせてもらおうよ！！　——《ウェーブ》」

セシルはお得意の魔法を放った。広範囲の波が狼達を襲った。

「ガウッ！」

だけどこいつらはお構いなしに飛び込んできた。

何！？　普通こういう草食動物は頭がいいから一旦避けて確実な隙を狙うはず！

しかも今の攻撃。狼のスピードなら避けれたはずっ！！

「なっ！」

セシルも予想の範囲ではなかったらしく、身動きがとれてない。あのままだったらやられる！

「させない！！　《連弾》」

アクアは銃を乱射した。セシルを襲おうとしていた狼とその近くに

いた狼が思いつき吹っ飛んだ。

「ありがとう、アクアさん！」

「気にしないで！」

あと残り8匹！

「こいつで残り7匹だな！《火龍閃》！！！」

レインは突きの構えをし、狼に容赦ない力で突いた。

「そして残り4匹ですう！！——《双風の追撃》！」
エアーツイスト

ルナは自分の前に高さが6メートルほどある大きな二つの竜巻を生させ、それを前方に向かって放った。その風に巻き込まれて3匹の狼は宙を舞った。

レインの吹っ飛ばした狼とルナが吹っ飛ばした狼は、そのままピクリとも動かなかった。

「よっしゃ！俺も残り2匹だ！《地龍閃・突》！」

俺は早速自分の覚えたばかりの技を使った。

やっぱゲットしたばっかのもんって何にしても使いたくなるじゃん？

「案外弱いわね。こいつら。《双銃乱射》！」
ツインバレット

アクアは腰からもう一つ銃を取り出し、二つの銃を乱射した。

二つの銃から放たれた無数の弾は残りの狼を貫いた。

「……終わったのかな？」

「まあ、被害の大きさからするとこのくらいかな？」

「じゃ、とつとと帰ろうぜ」

その時俺は、微かだけ草むらから「ガサッ！」という音が聞こえた。

「危ないアクアっ!!」

「えっ!？」

俺は咄嗟にアクアにとびついた。そしてそのまま地面を転がった。

「ガウウウウー……!!」

「まだいたのか!!」

「くそっ!! 《氷雅槍》」

「ガッ!？」

「これで今度こそ終わりかな？」

「そうみたいです……」

——ユウマSIDE——

「ユウマ! 大丈夫!？」

俺は、アクアを庇ったとき狼に引っかけたらしく、肩にすり傷を負っていた。

服の上から血がにじんできた。思ったより出血がひどかったから俺は持ってきたバンダナをまいて血を止めた。

「ああ、こんくらい——ッツ! ——平気だ」

「嘘っ! だって痛そうにしてるじゃない!」

「大丈夫だ。それよりもアクアが平気でよかった。アクアに傷を負わせたら死んでも死に切れないからな」

「そっ、それはどうして？」

アクアは、今にも泣きそうな顔で聞いてきた。
やべっ。ここで泣かしたら俺は最低なやつだ。なんとかうまく言葉にしなきゃいけねえ!!

「だってアクアは俺の大切な人だからな(ニコッ)」

「えっ!？ …………… あっ、ありがと／／」

「俺にとっちゃこのチーム『オリエツト』のメンバーはみんな大切な人ばかりだからな。違う世界から来て戸惑う俺に優しく接してくれたり、俺にいろ——オイ、アクア大丈夫か？」
なぜかアクアは顔を赤くしてボーッとしていた。

「あっ！ はい！！ だっ、大丈夫でございませすっ！！」

「……」
アクアは囁んだのが恥ずかしかったのか、顔をりんごみたいに真っ赤にして俯いてしまった。

「おいおい……。ちゃんと覚えてないぞ」
俺は笑いながら言った。遠くで、「あいつ今告白したよな？」「まさかフラグが立つとは思わなかったよ……」
「むう………アクアちゃんまさか……！」とか聞こえた気がする。

——アクアSIDE——

「だってアクアは俺の大切な人だからな（ニコッ）」

私は最初なにがなんだか分からなかった。

だけどユウマが笑顔で言った瞬間、私はまともにユウマの顔が見れなかった。

私のことを身を挺して守ってくれたユウマ。

今のユウマはすごくたくましく、そして——かっこよく思えた。

「——オイ、アクア大丈夫か？」

えっ！？ やばっ！ 私ったら何も聞いてなかった！？ とりあえず大丈夫って言わないと！

「あっ！ はい！！ だっ、大丈夫でございませうっ！！ ……」

かつ、噛んだああー……！！

肝心なところで噛んじやったよっ！ 私！！

うううう……。恥ずかしくて顔も上げれないよ。

――ユウマSIDE――

「とりあえず戻るか、みんないいか？」

「私たちは大丈夫です。それよりもユウ君は大丈夫なんですか？」

「俺は、大丈夫だ。さっ、いく――『……ちよつとまてよ』」

俺達は、聞いたことがない声のした方に振り向いた。

第24話 黒衣の死神との死闘！（前書き）

三日連続投稿です！！

文章評価ありがとうございます！！

なにかいたらぬところがあったら、アドバイスください！

第24話 黒衣の死神との死闘！

「ちょっとまってよ」

声の主はもう一度言った。俺達は2回目の声で止まり始めた。

振り向いた方向には俺と同じくらいの年齢の男がいた。

肩にかかるくらい多少癖のある男からみたら黒のロングヘアー。

そして黒のマントに大きい鎌。まさに死を連想させる格好だった。

しかも鋭い目つきをしていて金縛りにあったみたいに身動きがとれなかった。

「硬いなぁ……もつと楽そうにしろよ」

男は苦笑いをしながら言った。

「てめえはいったい誰だ……！」

レインはなんとか口を開けて言葉を紡いだ。

まばたきすら許されない空気ですべてを出せただけでもすごい。

「……俺か？ ……俺は——桐生^{きりゆう}。ユウマ、お前と一緒に境遇の間だ」

「そっ、そいつはどういう意味だ！」

俺はガラにもなく声が震えていた。それほどこの男が怖かったのだと後になって分かった。

「……だからさっきから言ってるだろ、お前と同じ境遇だって」

「まさか……！」

「てめえも異世界——いや地球からきたってことか！？」

「……そういうことだ。ちなみに俺も日本からきた」

「お前も、神様のミスでこっちに来たのか？」

不思議と俺は、もう震えは止まっていた。むしろ今俺は違う形で震えている。

だって初めて俺と一緒に立場の人がいたんだから。

「……違う。俺は俺自身の意思でグラニデに来た」

「「なっ!!?」」

まじか!?!? ということは……こっちから元の世界に帰れる方法があるのか!?!?

「……ユウマ、元の世界に戻りたいか?」

「当たたり前だっ! てかお前なんで俺の名前を知っている!!」

「……ヒストン学園に用があつて侵入したついでにお前のことを知つた、それだけだ」

「本当なのか……? ヒストン学園は、学園の中でも警備がしっかりしてることで有名なのに」

「……でどうする? ユウマ」

「勿論、元の世界に帰る方法を教えてもらう!!」

「……俺に攻撃の一つでも当てたら、教えてやろう」

何いってんだコイツ? そんなの普通に当てれるだろ!?

「みんな力を貸してくれ!!」

「「おう!! (はい)」」

「……しょうがないな。こい」

桐生は背中にあつた大鎌を取り出した。

「ハハッ! 行くぜっ、ユウマあー!ー!ー!ー!!」

なんかこの人急にキャラが変わったんだけど!?

「よくあるベタなキャラですね」

「いや、どこにこんなキャラがいる!?!」

少なからずこんなキャラをいまだかつて見たことない。

「用は攻撃さえ一発当てればいいんでしょ!? だったら――《双^ツ銃乱射》!!!」
アクアは二つの銃を乱射した。その無数の弾は桐生に向かっていった。

広範囲攻撃だから俺達は当たると思っていた。
だけど、アクアが打った弾は桐生には当たらなかった。
桐生の姿はもうそこにはなかったからだ。

「甘いな女。これで終わりだ」
「ぐっ! (ドサツ)」

俺には何が起きたか分からなかった。桐生が消えたと思ったら、突如アクアが血だらけになって倒れたからだ。

「姉御っ!?!」

「アクアちゃん!?!」

「くそ!! 警護隊に連絡する!!」

セシルは一旦遠くまで逃げて、警護隊に連絡をし始めた。

「どうだ? まだやるか?」

今を見てこいつはやばい!?! と本能的に感じた。

だけど元の世界に戻るには……!

『だけどそっちの世界で死ぬともう二度と動けなくなるし、元の世界にも帰れなくなる』

俺は今になってこの言葉を思い出した。

ここで死んでは元も子もない!!

「くっそおおー!!」
《火龍閃・突^{かりゆうせんとう}》!!」

「止めろおおー!!」

「だから遅いつての。はい、二人目」

「くっ……そ…… (バタツ)」

「レイン君!」

「みんな!! 警護隊がもうじきここに来るって!!」

「ちっ! そしたら面倒だな。とっとと終わらせるか」

「させるかあ!!」

「だから遅いって——っ!?!」

俺は桐生の攻撃を受け止めた。間一髪のとこだけど受け止めた。すぐさま桐生は、またもとの位置に戻った。

「てめえ、俺の《縮地》を止めやがったのか!?!」

「まあ、なんとかだけどなっ。俺は一度縮地つてもんを見たことがあるからな……!!」

すこし強気に出ておく。実は今のは偶然止めたようなもんだからだ。正直もう一度きたら止めれる気がしない。なにも見えなかったからだ。

「お前おもしろいな……! ユウマ、あとで手紙読んでおけよ」
桐生がいなくなろうとした瞬間にセシルが叫んだ。

「レイン達の仇だああ——!!」
《水牙一閃》すいがいつせん!

セシルは、水の刃を一直線に放った。その直線状に木があったが木も貫通し真っ直ぐ進んでった。

「中級魔術か……。魔法で対抗してやるか——《闇の宴》ダーク・ネス」

すると桐生の前に闇の門みたいなものが出てきて、セシルの魔法を飲み込んだ。

そして数秒後、セシルのものとは全然違うスピードで闇の刃がセシルを貫通した。

「なっ……!! (バタッ)」

「ったく、弱いのにシャシャリでんなっの」

そういつて武器をしまった。

「……そろそろ警護隊が来るころだから、失礼させてもらう。またな」

桐生は縮地を使いどこかに行ってしまった。

ルナは腰が抜けたのか、地面にへナへナ座った。

俺も警護隊が来るまでただただ立ち尽くすしかなかった。

第24話 黒衣の死神との死闘！（後書き）

ちょっと短めです。すいません

第25話 警護隊、東ブロック隊長ハーデス現る！（前書き）

連休がもう終わる……。

お気に入り小説登録や感想などお待ちしております！！

第25話 警護隊、東ブロック隊長ハーデス現る！

【東ブロック警護隊所本部】

「ありがとうございました」

「いえいえ……」

俺達は昨日のあの後、すぐに東ブロック警護隊の人達に保護された。俺は、その場ですぐさま傷を治してもらい、

ルナは腰を抜かしたただけなので特に傷はなかったが、セシルとアクア、それにレイン。

この3人は結構傷がひどいらしく、2日間の入院が必要らしい。

ひどい傷なのに2日間で済むのは、ここの警護隊員の腕がいいおかげかもしれない。

そして今ちようど事情聴取が済んだところだ。

「ユウ君……部屋戻ろっ？」

「ああ、そうだな」

今、俺達は東ブロック警護隊所本部にいる。

宿屋の夫婦から報酬（6万円）をもらい、ここにきた。

それぞれのブロックの警護隊所本部には、病室があり腕の立つ治療用の警護隊員がいるらしい。

ルナに聞いたところ

「この世界にユウ君の言う病院ってものはないです。各ブロックの警護隊所に治療してもらうのです。魔法特化種族にも武器特化種族と同じようにもう一つ重要なものがあって、それが治癒魔法です」

「治癒魔法？ そんな便利なものが存在してるのか？」

「はい。詳しいことは全然知らないですけど。知るなら治癒魔法専

門の人に聞かないと……」

「なんなら病室に行ってみるか？」

「あ……あっ、あなたは!？」

急に背後から出てきて俺達の横についた。

身長は俺よりも高く、黒の癖のないショートヘアのどこにでもいそうな男の人だった。

「誰だ? この人」

「ユウ君知らないんですかっ!？」

「当たり前だろ? 3ヶ月前くらいにこっちにきたばかりなんだから」

「そちらのお嬢さんは分かっているみたいだけど、君が知らないみたいだから自己紹介しておくね」

「僕の名前はハーデスⅡドラン。東ブロックの警護隊隊長をやらしてもらってる。よろしく」

「よろしくな。ハーデスさん」

一応俺より年上っぽいし、隊長っていうぐらいだから偉いんだろう。なら敬語を使っとう。

「よっ、よろしくお願いします!!」

「そんなかしこまらなくてもいいよ。気楽に、ね?」

「「はあ……………」」

想像していた感じと全然違ったのか、ルナはボーっとしていた。

「それじゃ、病室にレッツゴー!」

「「おおお………」」



「それじゃ僕はこの辺で失礼するよ。なにか困ったことがあったら、いつでも隊長室にくるといい」

「はい。ありがとうございました！」

俺とルナはハーデスさんと別れて病室に入った。

「セシル！ アクア！ レッ……大丈夫かっ！？」

「セシル君！ アクアちゃん！ レッ……大丈夫ですかっ！？」

「ちょっと待てー！いい！？　なんで俺だけ心配されてないの！？　しかも一回言おうとして止めたよね！？　ルーまでそんなことする子だっ――『静かにしなさい！』はい……」

レインの言葉はアクアの言葉によって遮られた。

「まあ、落ち着けて。冗談に決まってるだろ……多分」

「おい、ユウ！！　今ボソツと多分って言ったろ！？」

「レインうるさいよ。病院なんだから静かにしないと」

「そうよ。あとあんま大声出すと傷口開くわよ」

「そうですよ。レイン君もあんな冗談真に受けちゃダメですよ♪

……多分

「ユウに言われてもたいして傷つかないけど、ルーに言われるとすごい傷つくんだけどっ！！」

「だからうるさい！」

「他の人にも迷惑がかかるでしょ？」

「はい……」

どうやらここにレインの味方はいないらしい。

「まあ、みんな元気そうでなによりだよ」

「心配したんですよう？」

「この警護隊員のおかげだよ。すごい治癒魔法だよ」

「私も今まで何回か治癒魔法をかけてもらったことがあるけど、こはすごいわ」

「そうそう。俺も『黙りなさい』……姉御のペッタンコ」

「レインちよっとこっちなさい」

アクアは急に目つきが鋭くなりレインに立ての合図をした。傷の手当てがしてあるから一応は歩けるらしい。

そのまま二人は部屋の隅っこでなにやら話し始めた。

「なんか邪魔になりそうだから帰るな」

「うん、二人とも見舞いありがとう」

俺達は病室を出て部屋に帰ることにした。

病室から出たとき後ろから、

『い・い？ 私はある…ペッタンコじゃないから、ねっ？』

『すっ、すいませんでしたあ！！ ですから許してください姉御！
！ ぐへっ！？』

『何回も言うけど、姉御は止めなさい』

『すいませんでしたっ！ ペッタンコ——がっ！？』

『だからペッタンコじゃないって言ってるでしょ！？ たっ、確かにルナちゃんと比べるとペッタンコかも知れないけど、一応これでも人並みよりすこし下はあるのよ！？ ううっ……自分で言ってる恥ずかしくなってきた／／』

『まだ、最後まで言っていないのに……（ガク）』

よし！ 今聞いた会話は忘れるとしよう！ 命に関わることだからっ。

でもアクアは結構スタイルがいいと思うんだけどな……。

俺の周りにいた女子が悪すぎただけかも知れないけど。

「ユウ君——！ すいません。トイレで待たせちゃって……」

「いや、気にしてないから大丈夫だ。人生何事もゆっくりでいいんだよ。それじゃあゆっくり行こうぜっ」

『ゴメン、トイレ行きたいから行ってくるね』
『行ってらっしゃい』

病室の前↓アクアが恥ずかしい話をしたあと出てくる↓聞こえる距離↓鉢合わせ……

「ルナ！ 急ぐぞっ！！」

「えっ！ さっき人生ゆっくりって言ってましたよね！？」

「悪い。事情が変わった！ 逃げるぞっ！！」

俺是最悪の事態を回避すべく、全力でその場を立ち去った。

あとでルナに聞くと、「あの時のユウ君、すごく汗ダクダクでしたよ？」と。

つまりあの時の俺は、相当焦っていたのが分かった。



【その日の夜】

「てやつ！ おりゃああー！！」

「こんな夜中に精がでるね」

「ハーデスさん！？」

俺は一人で、警護隊の訓練所で訓練をしていた。

「ぼくも一緒にいいかな？」

「どっ、どうぞ！」

「それじゃ失礼」

ユウマは剣の素振りを、ハーデスは空気イスをやりながら話始めた。

「にしても急にどうしたんだい？　こんな夜中に」

「俺のせいでみんなを傷つけたから……」

「桐生——だったっけな。実は俺はそいつを知っている」

「えっ！？　本当ですか！？」

「ああ。これは警護隊副隊長クラス以上の人にしか知らされていないがな」

「詳しく教えてください！！　俺あいつに……仲間の仇うちをしたいんです！！」

「まあ、まちなさい。桐生から手紙貰わなかったか？」

「あっ！　そういえばここに」

俺は貰っていたことをすっかり忘れていた。

あれ？　なんでこの人俺が手紙貰ったこと知ってんだ？

「やっぱりな。かしてくれ」

「どうぞ」

「（シュボ！）……」

「なっ、何を！？」

突如ハーデスさんは手紙をライターで燃やした。

「いいか、この手紙は桐生のお誘いだ」

「お誘い？」

「そうだ。俺は先日も似たようなやつを見つけてな。そいつが桐生と思われる人物から貰った手紙にはこう書いてあった。『一世界の終焉を望む者たち（エンド・オブ・ワールド・デイサイア）』に入りませんか？　ってな」

二人は互いに訓練を止めて、話す体制に入っていた。

「なんですか！？ それは」

「詳しくは分らん。詳しく知りたいなら中央ブロックのお偉いさんに聞いたほうが早いだろう」

「東ブロックの隊長より偉い人がいるんですか？」

「中央ブロックの総隊長や政治家などだな」

「この世界にも政治家がいたのか……」

「それとこのことは誰にも口外するな。いいな？」

「はい……」

俺達は、互いに自分の部屋に戻ることにした。

【夜中の1時 オリエットの部屋】

「ユウ君？」

「まだ起きてたのかルナ。何してたんだ？」

「ユウ君こそ、こんな遅くまで何してたんですか？」

「訓練だ。俺はまだまだ弱いからな」

「ユウ君は弱くないですよっ！ みんなを守ったじゃないですか！」

「守れてなんかいない！！」

「っ！？」

ユウマが大きい声でなったからルナは体をビクッと震わせた。

「……ヘタしたら、みんな死んでた。あいつはその気になれば俺達全員の命を奪えたはずだ。あいつらがケガしたのは、俺がしっかりしてないからだ。俺がもっと強ければ……!!」

「あんまり自分を責めないでください!!」

「っ!？」

普段あんまり大きい声を出さないルナが大きい声をだしたから驚いた。

「ユウ君、がんばったじゃないですか……。私達を精一杯守ろうとしてくれたじゃないですか！ 確かに桐生は私達の命を奪えたはずですよ。でも結果はどうであれ奪われてないじゃないですか!? だからそんなにあせらなくてもいいと思うんです……」

「そうだな……。ルナの言うとおりでな。悪い、なんか今日疲れるからもう寝るわ……」

「ユウ君……」

（俺は……俺はどうしたらいいんですかっ………師匠!!）

第26話 夏休み前はウキウキするよね

「にしても直ってよかったよな」

「確かにみんな無事でよかったですっ！」

「二人とも心配しすぎ」

俺達は無事にヒストン学園へと帰宅した。

オリエットだけの初依頼としてはなかなか上出来だったと思う。
これでハイネ先輩のチームにすこしは近づけたと思う。

「お前ら……………無事でよかったなっ！！（ガシッ！！）」

「ディオ先生！？ く、苦しい……」

「青春だぁー……！」

なんかどっかでこんなシチュエーションを見たことがあるような……。

「ところでお前達。これから毎日放課後に特別に補習をやる！！」

「「えええええー……」」

なんで補習！？ もう地獄だよね！？ 学校じゃなくてここ地獄だよね！？

「アリアンスの仕事で授業がつぶれてるからな」

「潰したのディオ先生ですよね！？」

久しぶりにセシルの突っ込みを聞いたなあ……。

最近突っ込みの出番がなかったから俺の中での存在価値がないに等しかったからな。

「それで終業式の日テストを行おうと思う！」

「……………」

「なんでそこ無反応!? ちゃんと突っ込めよっ!!」

「だってテスト簡単そうだし」

「そうね。別に勉強すればいいだけだし」

「……………」

「がんばれば出来そうですしねっ!」

「……………」

「おい。レインとユウマの二人が何も言っていないぞ」

「……………嫌だああー……………」

「反応おそっ!? どんだけ遅いんだよ!?!」

「あまりにも嫌だったから現実逃避してたんじゃない?」

なんで放課後授業+テスト!? なんか俺悪いことしたか!?

「あのおー…………二人ともテスト嫌いなんですか?」

「「テスト? 何それ? 美味しいの?」」

「まあ、レインとユウマ以外成績はいいはずだからな。中間テストの結果を見れば一目瞭然だな」

そしてそのまま話が終わり、一週間が過ぎテスト前日になった。

「いいかつ? テストで赤点以下の奴は夏休みも補習だ! しつかりと勉強するように!!」

『はぁ~~~~い(嫌だああー…………)!!』

「なんか‘はい’じゃない声も聞こえた気がするが…………とにかくしつかりやるように」

そのままツカツカと教室を出て行った。

教室の至るところで『今日勉強教えてくれ! 頼む!!』『お金あ

げるから教えてくれ」

『……夏休みの間に対リア充の組織を作ろうと思う』『こんな問題簡単よね〜♪』

など色々な声が上がってる。すこし関係ないこと話している奴らもいるけど……。



「で、ユウマとレインも教えてほしい分け？」

「「お願いします!!」」

「まったく……。ならいつそのことみんな私の家に呼ぶわ」

「確かにそうしたほうが効率がいいね」

「セシルいつの間に!？」

俺の後ろにいつの間にか我が親友セシルがいた。

こいつも頭いいんだっけ？

「それじゃルナちゃんも誘っていきましょ」

で、なんだかんだでアクアの家で勉強することになった。

そして午後7時まで勉強を一生懸命した。

「てか勉強シーン飛ばしていいのか？」

黒猫「別にいゝ。だって勉強シーン書いても楽しくないじゃん？」

「お前最低だな……」

黒猫「だってぶっちゃけ書いても飛ばされるのがオチじゃん!？」

「それいったらおしまいだろ!？」

「それじゃそろそろご飯にしましょ」

「ふひいゝ疲れたああー！ー！」

「これで明日のテストは完璧だな」

「ところでご飯どうするの？」

「そうねゝゝゝ私が作ってもいいんだけど、それだどつまんないからくじ引きで作る人決めない？」

ふいにアクアが提案した。

「んじゃここに赤の印がついた割り箸が2本あるから、その引いた二人が料理するってのはどうだ？」

「いいんじゃない？」

（てか何でそんなもん持ってんだよ……）

（どうせ他のことで使おうとしてたんだよ）

俺達はスムーズにクジを引いた。

そして赤のクジを引いたのは、俺とルナだった。

「俺以外と運がないんだな……」

「うう……うまく作れるでしょうか」

「食材とか調理器具とかキッチンの使い方はユウマが知ってるから教えてもらってね」

「おいしいもの作ってねえゝ」

「とっとと作れよっ！ それじゃ待ってる時間暇だからトランプでもしようぜっ！」

レインはバッグからトランプを取り出して、配り始めた。

勉強しにきたのにそんなもん持ってきたのかよっ！？

すこしは手伝って欲しいんだが……。

「で、どうする？」

「とりあえず簡単な物を作りましょう！！」

「…………ミートスパゲッティとかどうだ？」

「いいと思いますっ！！　だけど……ソースどうするんですか？」

「確か昨日ミートソースを使った料理だったから冷蔵庫にソースが余ってるはず！！　だからそれ使えば後はなんとかなる！！」

「では私はサラダを作りますね」

「「レツツクツキング！！」」

〃〃30分後〃〃

「どうだ！？」

「ユウマ結構うまいじゃん♪」

「見た目もいいし味もうめえ！！」

「まっ、まあな」

「ねえユーー『ちょーつといいかな』」

俺はアクアをテーブルから離して部屋を出て、肩を組んで話を始めた。

こうしないと逃げられる可能性があるからな。

（すいませんでしたっ！　俺料理全然したことないから勝手に借りちまった）

（べっ、別にいいけど……／／／）

（ん？　顔赤いぞ？　熱でもあんのか？）

俺は、熱がないかアクアの顔におでこを引っ付けた。

(……!?!? かつ、顔近い!!)

(別に熱はないな。あんまり長いこといても怪しまれるから戻ろうぜっ)

(そっ、そうね!!)

「ただい——レイン!? セシル!?」

「ユウ君にアクアちゃん!! 二人ともこれ食べたら倒れました!!」

ルナが差し出したのはサラダだった。

一見普通のサラダだが、ゆで卵のところの色がおかしい気がする。いや、気がするじゃなくておかしいだろう!!?

なんで白と黄色じゃなくて黒一色なんだよ!?

どうやったらそんな色になるんだよ!?

「うっ……ダークマター暗黒物質には気をつ、け、ろ…… (ガクツ)」

「レインンン————!!」

「セシルはもう気絶? してるわ!」

「ルナ……何をしたんだ?」

「普通に作っただけですよ〜 (泣)!!」

うっ! 上目遣い+涙目とは……!! もう反則級に可愛いんじゃないかっ!?

いかんいかん!! それよりも仲間の命が大事だ!

「ルナちゃん……とりあえず今度一緒に料理しようか?」

「はい………」

その日は結局みんなアクアの家で泊まることになった。

暗黒物質は袋に入れ、開けられないように締めてゴミ箱行きへと
なつた。

第27話 暗黒物質（ダークマター）（前書き）

ユニークアクセス5000&小説お気に入り登録30件突破!!
いつも読んでいただきありがとうございます!!

第27話 暗黒物質（ダークマター）

【アクアの家】

あれから俺達は色々と苦勞をした。

暗黒物質によって死にかけた仲間がいたり、赤点をとらないように一生懸命勉強したりもした。

そして今俺達はずいに――――！！

「夏休みだあああ――――！！！！！！」

「長かった……。ここまでほんとに長かった」

「ユウの言うとおりだ！ いっぱい苦勞してから休みの休みは最高だぜっ！！ だよな姉御！！」

「そうよ！！ この期間こそ、努力したものに神から与えられた幸福の時なのよ！！」

お互いに手を握りあい飛びあつてゐるアクアとレイン。

すげー……。姉御って言うてるのに全然怒ったりもしずレインと仲良くやっている……。！！

これが、これが夏休みの力なのかっ！？

「そうですよユウ君。夏休みの力はすごいです！！」

「だからなんで心を読んでるんだ！？」

「だから勘ですってばあー」

「絶対心読む能力あるだろ！？ 勘でこんなこと当てれるわけないだろ！？」

むしろこれを勘で当てれる人を見てみたい。

「だから勘で当てられる人ここにいるんですよ♪」

「また心読みやがったなっ!？」

くそ……! これじゃー変なこと考えたら即死刑だ!!
これからルナの前では気をつけなきゃいけないな……。

「そんなことよりもこの少ない夏休みをどう過ごすか決めようよ」

「セシルの言うとおりだ! 夏休みは少ないからな!」

この世界の夏休みは2週間らしい。

日本よりか2週間ほど短い。

「まず何かどうしてもやりたいことがある人〜」

「「……………」」

「ん〜、じゃあやってみたいことや行きたいところを紙にかいて僕にちょうだい」

やりたいことかぁ〜……。やっぱ夏だから海かな?

俺は海と書いて投票した。

「……満場一致で海に決まったね。ここまでみんな思ってることが一緒だったとは……」

確かに4人いたら一人ぐらい違うこと書いていてもおかしくないかならな。

「まあ、普通夏といったら海くらいしか思いつかないからな」

「無難なところなんじゃない?」

「ちよっとトイレ借りていいか?」

「別にいいわよ。場所分かる?」

「ああ、ありがとなっ! アクア」

レインは珍しく姉御と呼ばずに出て行ってしまった。

出る時にこっちにコイコイとアイコンタクトをとってきた。

「悪い、俺もトイレ行ってきていいか？」
「いいわよ」



「で、どうしたんだよ」
「もおゝ、ユウユウも分かってるでしょおゝ!？」
「うざっ……………」
「何こいつのキャラ!？」 急にうざキャラになったんだけど!？」

「海といえば水着ですよ!？」 み・ず・ぎ!！」
「だぁーっ2回も言わなくなっちゃって分かるっての!！」
「ルナ様と姉御の水着姿かぁ…………グヘヘ!！」
クラスに一人はこういうスケベキャラがいるって友達から聞いていたけど、やっぱりどの世界に行ってもいるんだな。ほんとに…………。

「レインよだれでてるよ…………ちゃんと拭きなよ」
「おうーっってセシル!？」
いつの間にかトイレの中にセシルがいた。
どうやって音も立てずにここに入れたんだろう…………？

「まったく…………二人に聞かれたら殺されるよ? ……二人とも」
「俺も!?! なんでだゆお!?!」
「ユウうまく言えてないぞ…………」
俺なんも言っていないのに…………。

「とりあえずあんまここに長くいたらバレル！ 戻るぞ」

ところ変わってリビング。

「あら、遅かったじゃない」

「まあな。あっちのほうだったんだよ」

「あのーセル君？」

「どうかした？」

「ハイネさんも海に誘おうと思ってるけどいいで—— 『勿論オーケーです！』 二人とも返事早すぎですよ……」

「♪♪♪」

急にポケットの携帯電話が震えだした。

どうやらメールが来たらしい。

いったいだれからだ？

――

from レイン

ルナ様の水着姿と姉御の水着姿にハイネさんの水着姿追加きたああ
――！！

――

……………どうやってメール打ったんだ？

あきらかに今の状況でメールしたらばれるし。

「誰だったの？」

「学校の友達だよ」

俺は、‘どうやってメールした？’と返信したら、すぐに返ってきて、
‘予約メールだよ☆（キラン）’と返ってきた。

そんな便利機能があったのか……！？

俺はなぜ気づかなかったんだろう。

ん？ てことはコイツ！！

ハイン先輩が来ることをあらかじめ予測していた……？

俺はこの日、レインはこういうことになると思うと頭が回る子だと初めて
思った。

そして海に行こう会議は順調に進んで行き、明後日の午前10時に
海に着くようプランが設計された。

場所は、南ブロックの『メーキルビーチ』ってところらしい。

そして今日はそのまま解散となった。

第27話 暗黒物質（ダークマター）（後書き）

ユウマ「にしても異世界に海なんてあったんだな」

アクア「当たり前でしょ!？ グラニデなめすぎでしょ!？」

ユウマ「また、そのセリフか。だから俺はなめてないって」

レイン「海編きたああー!」

アクア「うるさい!!」

レイン「ルナ様の水着とハイネさんの水着きたああー!」

アクア「なんで私だけが入ってないのよっ! 《連弾》!! だっ、

確かに私のなんか見ても喜ぶ人いないと思うけど／／」

レイン「じょうだー! ……（ガクッ）」

ユウマ「そうか？ 俺はアクアの水着姿見たいけど」

アクア「べっ、別に見てもらいたいなんて思っていないんだからねっ!!」

第28話 夏といえば海。これは全世界共通の定義（前書き）

テストが近いので更新は控えめです。
今まで書いた話の編集はしてきます……。

第28話 夏といえば海。これは全世界共通の定義

【南ブロック メーキルビーチ】

「「海きたああー！ー！ー！ー！」」

俺達は中央ブロックから交通機関を使って一時間。

南ブロックのメーキルビーチに来た。

そして目の前にはコバルトブルー色の透きとおった海。

そして周りには、高くそびえたつヤシの木。

これなんて沖縄？ ハワイ？

「わあー！ー！！ やっぱきれいですねえー！！ みなさん誘ってくれてありがとうございます」

「いえいえ、ハインさんが来てくれてマジで嬉しいです！ ……マジで」

「は、ははっ……………」

ハイン先輩も誘って見たら、見事に予定が空いていたらしく、海にくるようになった。

そしてレインは水着をみることに必死になりすぎて怖い。

ハイン先輩も若干引いていたし……。

「ハインさー！ん！ 着替えに行きましょうよ」

「あっ、今いきますー！！」

「俺も今いー『消えなさい《連弾》！』ギヤアアー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「お前懲りねえな……」

「だってユウ！ 姉御達の着替え見たくないのか！？」

「そんなもん見たいに犯罪になるから決まってんだメだろ！？」

「欲望と正義の心がぐちゃぐちゃになってるよユウマ……」
はっ！　しまった！！　つい本音が出ちゃった。

「とりあえず俺達も着替えようぜっ！」

レインは、チーターの走るスピード並の速さで更衣室に向かっていった。

もう、あいつ縮地覚える必要ないんじゃないか？



「早くこっねえ〜かなあ〜♪」

「まあ、女子は着替えに時間がかかるっていうからね」

「もうすこし落ち着けよ（ソワソワ）」

「貧乏ゆすりしてるユウに言われたくねえんだけど」

「……これはクセなんだ」

「絶対嘘だね。今までやってるとこ見たことないから」

当然のごとく俺達の方が着替えは早いわけで……。

だから海の家から借りたビーチパラソルのセットと簡易イスに座って待っている。

「てかセシル。お前ずっと冷静でいるけどドキドキしたりしないのか？」

「多少ドキドキしたりしてるけど、レインとユウマみたいにはならないね」

「お前それでも男かっ！！　普通『すいませーん！！　お待たせしましたっ！！』ぶっ！！」

「レイン！！ 突然鼻血なんて出すなんて……………ぶっ！！」

「あれこいつらどうしたの？」

「いやちよつとね……」

女子の水着がこれほどまで威力があったとは知らなかった……。

しかも顔立ちがよくスタイルがいい子ばかりだから破壊力も半端ない。

まずアクア。ヒラヒラがついてるオレンジ色のワンピースタイプの水着だ。

花の模様が綺麗に敷き詰められており、よりいっそうアクアを引き立てている。

なんか子供っぽい感じがしたがこれを言うと言われるからやめとう。

そして次は、ルナ様。ヒラヒラがついている黒と白のセパレーツタイプの水着だ。

その……もう二つのマシユマロがすごいです。はい。

あんまり直視するとまた鼻血が出てくるから止めとこう。

最後はハイネ先輩。こちらはシンプルな水色のビキニとキュロパンの組み合わせで、特に派手でもない普通な感じだ。逆にそれがハイネ先輩にあってる気がする。

そしてハイネ先輩は、ルナまでとはいかないが高校生？ の平均以上はあることが分かった。

ちなみにルナ様はもう化け物。

「あのお……お二人とも大丈夫ですか？」

「手貸します、よっ？」

倒れてる俺達に手を貸すため屈むルナ様とハイネ先輩。

当然の如くそんな姿勢になったら何かが見えるわけで……。

「「ぶうつつー！ー！ー！！！」」

再び赤色の間欠泉がふいた。

「レイン……俺達生まれてきてよかったな」

「ああ、もうこの世に未練はない（グツ）」

「レインさんとユウマさんどうしたんですか？」

「大方私達の水着姿に興奮してたんでしょ！？ まったく……」

「姉御！！ 俺は姉御の水着姿に興味ありま——『死ね☆』す！！」

「ほんと？（ウルウル）」

「ぐはっ！ 姉御の卑怯者……」

おっ、涙目＋上目遣いのコンボをくらってレインが鼻血を出して倒れた。

咄嗟に冗談をもみ消したのに、アクア……。

なんて残酷な殺し方をしたんだ！！

「ざくろんこくろんな天使の、よおにい〜♪」

「ルナ！ また心読みやがったな！？ それとその続きは言うな！

！ 神話になっちゃダメだから！」

てかこっちの世界にも日本の曲がっ！？

「とりあえず泳ぎましょっ！」

「いえ〜い!!」

「「復活はやっ!?!」」

相変わらずの再生力だ。

ここだけは尊敬の念を抱かずにいられない。

「えいっ!!」

「きゃ!! もお〜う……仕返しです!!」

「やっ!! 冷たあ〜い」

「レインさん俺達幸せ者ですね」

「そうですねユウマさん。もう何もいらないうって感じですよね」

「二人とも頭大丈夫?」

「むしろセシルの方こそ大丈夫か?」

「僕は普通に大丈夫だけど……」

やっと、やっと………!! 平凡が戻ってきた!!

今まで戦ってばっか? で全然こうほのぼのとした空気がなかったからすごく新鮮な感じがする。

「よっしゃ! スイカ割りやろう!!」

「そうだ夏の海といえばスイカ割りだもんなっ!!」



「ということでスイカ割りを始めたいと思います!」

「「いえ〜い!!」」

「ルールは簡単。タオルで目隠ししてその場で3回転する。そして最初にスイカを割った者が勝ちというきわめて分かりやすい遊びです」

「んじゃ俺一番!!」

レインは目隠しをしてその場を3回転した。

「よしそのまま真っ直ぐ」

「いやもっと右よ!!」

「違います! もっと上ですよ♪」

「左ですっ!」

みんなそれぞれレインを惑わすために言葉をかける。
それはいいんだが……ルナの上はありえない気がする。

「さ、サメだああー!ー!ー!!」

「きゃああー!ー!ー!!」

「みなさん!! 落ち着いて海から上がってください!」

突如あたりが騒がしくなった。

俺達は一旦スイカ割りを中断して監視員と思われる人に聞きに言った。

「どうかしたんですか?」

「それが、絶対入ってこれないはずなのにサメが入ってきたんですよ」

「ハイネ先輩!!」

「ええ、アリアンスの定番です!」

「サメは僕達に任せてください。いくぞ!!」

「で、どうすんのよ?」

「んなもん決まってるだろ。作戦名、犠牲用^{サクリファイス}人型盾で行くぞ」

「なんか嫌な予感しかないんだけど」

「確かサクリファイスは直訳で犠牲っていう意味があったような…」

「そう。これは海に飛び込んでサメを誘う奴が一人でてくる。――ジャンケン!!」

「「ポン!!」」

アクア…グー

セシル…グー

レイン…チョキ

ユウマ…グー

ルナ…グー

ハイネ…グー

「なんでだー!!? お前ら絶対打ち合わせしてたろっ!?!」

「偶然に決まってるんだろ。さっ、がんばれ」

「ほんとに大丈夫なんだろうな」

「ああ。俺が保障する」

命まではしないけど。

第28話 夏といえば海。これは全世界共通の定義（後書き）

水着の説明ヘタクソですいません。
あまり詳しくないもんで；

ユウ「詳しくかったら一種の変態だな」

作者「詳しくないもーん」

ユウ「学校では変態ってよく言われてるく『奥義 かかと落とし！』
ぐはっ！？」

第29話 サメのいる海に飛び込むのは自殺行為。……あれ？ サービス回だっ

たいへんお待たせしました！！

やっとテストが終わった……。

ここからは更新速度戻りそうです！

（若干お気に入り登録件数減ってたり……）

「ねえ……これほんとに飛び込まなきゃダメなの!？」

「今更何言ってんだ。ジャンケンにまけたろ」

「だってこれ絶対死亡フラグだらっ!？」

海パンにオノを装備したレインは必死に訴え始めた。

まったく往生際が悪い奴だな。

「あっ、あれです!! あの前ビレ見えている奴です!!」

「無理だろ!？ 無茶苦茶でかいし!!」

「大丈夫ですよ。どうぶ〇の森みたいに釣りで釣れる程度の重さと大きさだと思いますから」

「ルーあいつよく見てみるよ!! 絶対一本釣り無理だよね!？」

「あれは幻覚です。誰かが鏡花水月を使ってるんです」

「サポートするから大丈夫ですよ!! こう見えてもリーダーですから」

「まあ、ならいつてくるか……」

この世界ってなんかもう日本じゃね？

だってどうぶつでしょ？ ブリー〇でしょ？ それにスマブラ。

もうこれは完璧俺達の世界だと思う。

「よっしゃ行くぜっ!」

レインは思いっきり海に向かって飛び込んだ。

俺が提案しときながら言うのもなんだけど——すごく男らしい。

「くらえ!」

レインはサメのいると思われる場所に思いっきりオノを投げた。

そしたら案の定、サメがいたらしくサメが口を開けて襲ってきた。

「よっしゃ来たああー！！！！」

「っ！？」

レインはあらかじめオノに紐をつけていたらしくオノを自分の手に手繰り寄せ、そのままサメの口の辺りに投げた。

そしたらサメの口にうまいこと引っかかった。それを陸へと投げつけた。

俺の考えてる作戦は、そのまま捕まえておいてルナの風魔法で飛ばす予定だった。

だけどもさかここまで力があるとは……。

「レインさん、さすがです！！《縮地》」

すぐさまハイネ先輩は背後へと近づいた。

「これで終わりです《一崩狼》！」

ハイネ先輩は縮地で近づいた勢いに任せて全体重をかけ、思いっきりサメの顔面に向けて剣を振り下ろした。そしてサメは地面にめり込んだ。

しかも地面がすごく揺れた。どんだけ強いんですか！？

「ふう………やっと終わりましたね」

「やっどどころか1分も立たないうちに終わりましたよ！？」

「セシル久々に突っ込んだわね……」

「そして姉御。久々に喋りましたわね。まあ、姉御だからしゃあ——」

「ドコッ！（アクアがレインを蹴り飛ばす音）バコッ！（レインがヤシの木へとぶつかる音）」

「良かったな。普通ヤシの実が落ちてくるはずなのに落ちなくて」

「あんまりなぐさめになってない……（ガクッ）」

「まったく。私への悪口十口調の真似なんかするからよ！」

「いやあ、君達助かったよ。アリアンスだっけ？　とにかくありがとう！」

「いえいえ、当たり前のことをしたまでですよ」

このセリフ一度でいいから言ってみたかった………！！

そしてそのあと海の家で俺達の表彰式が行われて、夜も海の家で食べることになった。

ちなみに料金は払わなくていいという最高の状況になった。

【メーキルビーチ 海の家】

「よっしゃああー！！！！　食うぞおおー！！！！」

俺達はまるで獣の如く料理にがつき始めた。

海で遊んでサメを殺したりと色々動き回ったからかも知れないが。

「この刺身おいしい！　さすが海が近いだけあって新鮮でおいしいです………！！」

「このカルパッチョのソースどうやって作ったのかしら？」

「お嬢ちゃん、なんならレシピでも教えてあげようか？」

「ほんとですか！？」

「まあ、サメ退治のお礼って奴よ」

「ありがとうございます………！！」

俺達はこうして海の家の人たちが振舞ってくれた料理を舌鼓しながらバクバク食べていき、気がついたらもう全部食べていた。

「ご馳走様でした。今日は本当にありがとうございました!!」
「こちらこそ危険な目にあわせてすまなかったな。またいつでもきな!」

「おっちゃんの料理と本は一生忘れないぜ!!」

「あんなのでよかったらいつでも貸してやるっての!!」

ガハハハツツ、と笑う二人。

なんか仲がよすぎて気持ち悪い。

「早くしないと帰りの電車に乗り遅れますよお」

「ういっす」

「今行きます」

「……また今度続きをお願いします」

「今行きますっ!」

「私も」

なんか若干変な返事が聞こえたがこれはスルーでいいな。
かくして俺達の夏休みの大事なイベントは終わった。
よし、やっとゆっくりできそうだな。

黒猫「それはどうかな!」

「またお前か!」

黒猫「なんだよ文句あんのか?」

「化学のテストまた悲惨だったそうじゃないか」

黒猫「それを言うなあああー!」

第30話 夏休みも終わりが近づくと宿題で焦る! (前書き)

お気に入り登録ありがとうございます!!

またコメディーです(笑)

なんかバトル全然やってない気がしてならない……。

第30話 夏休みも終わりが近づくと宿題で焦る！

「第一回、お菓子争奪バトル！」

「「イエエ~~~~イ！」」

「ルールは簡単、計3回の競技を行い一番点数が高い人から順に景品が貰えるというシンプルなゲームです！ 準備はいいかああー
ー!?」

「「いいぜ（よ）ーーー！」」

時はすこし前にさかもどる……。



【アクアの家】

俺達は、夏休みの宿題を終えるためにアクアの家で朝から必死に勉強をしていた。

勿論朝から必死にやっていたので宿題が終わらないわけがない。

答え写しあったし……。

よっ、よくやるよねっ!?

『お前は1番、俺は2番やるから後で互いに移しあおうぜっ!』
み
たいな……。

とっ、とりあえず理由はどうあれ、宿題は終わった。

「なあ、宿題終わったから面白いことしようぜっ!」
突然レインが提案した。

「面白いことってなんだよ」

「みんなでお菓子100円券三枚を出して競技でポイントが高い順にいっぱい貰えるってのはどうだ!？」

お菓子100円券ってのは、この前警護隊の人から貰った文字通りの意味の物だ。

「へえ〜。レインにしては中々面白いこと考えたね」

「レインにしては、が余計だってえーの」

「それじゃ早速始めましょ!! ちようどお菓子が切れてたのよねえ〜♪」

「私も賛成です!」



と、このような経緯でこんなことをやることになってしまった。

「ポイントは全競技1位から、5・4・3・2・1だ」

「最高で15点ね」

「ちなみに景品も上から順に、お菓子100円券5枚、4枚、3枚、2枚、1枚だ」

「ドベにはなりたくないな」

「それはみんな一緒ですよ〜」

「ところで最初の競技ってやつは決めている?」

「勿論! 最初は——ジェンガだ!!」

（また懐かしいものを……）

（てかわざわざ持ってきたのね……）

「「ジャンケン、ポン!」!」

俺達はジャンケンをし順番を決めた。

順番は、アクア↓ユウマ↓ルナ↓レイン↓セシルの順になった。

「それじゃまず私からね！」

アクアは一番下の段の右端の物を抜いた。

そして揺れることなく上の段に載せた。

「よくあるパターンだな。オラよっと」

俺は一番下の左端の物を抜いた。

一度だけグラツとなったがすぐに元に戻った。

「二人ともどんだけひねくれているんですか……」

ルナはため息交じりに真ん中らへんの真ん中の物を抜いた。

真ん中好きだな、オイ。

「次は、俺だな」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

あれからしばらく続き、ゲームも大詰めになってきた。

下から2段目までは真ん中しか残っていないく、みんなが下から抜いていったのでジェンガは今すごく不安定な状態にある。

ヘタしたら今にも一人でに崩れそうだ。

「次は僕だね」

セシルの手はすこしずつジェンガに近づき真ん中の方の物を慎重に抜いた。

すると、下敷きを曲げて離したときみたいに結構揺れた。

真ん中の方のを抜いたから、余計に揺れているのかも知れないけど。

「わっ、私の番ね!!」

「姉御——『黙りなさい!』……はい」

レインはいつものように一喝されて黙った。
ほんと懲りないな……。

「えいっ!!」

アクアは上の方の物を抜いた。

そしてまた結構揺れた。

これって……もう俺かルナがアウトだな。

「どうしよう……。賭けで真ん中だ!!」

俺は思いつき真ん中のものを引き抜いた。
すると見事に崩れなかつ——

「ユウ君……（ウルウル）」

そんな涙目＋上目遣いのコンボなんて効かないぞっ!!

俺は、勝負事で情けをかけたたりしない!!

「ユウ君!!（ガシッ）」

手を握られても知らないぞっ!

だからどうした!! レインに握られていると思えば……!!

「ユウ君っ（ムニユ）」

……もうダメだ。

俺は自ら乱暴に上に載せた。

そうしたら大きな音を立てて崩れた。

「そんじゃユウの負けってことで」

「ああ……………」

だって俺にあれ全部のコンボを耐えろとか無理でしょ！？
ただでさえそういう経験なかったから、免疫ないし！！
第一レインにあんな感触ないし！！

『ムニユ』とか！ あいつただの『ゴツ』だからね！？

「ジャンケンで勝った人から順に順位は決めるから」

そして4人はジャンケンをし、1位から順にアクア、ルナ、レイン、セシルとなった。

「ユウ君先ほどはすいませんでした」

「いいんだよ。勝負に負けた俺が悪いんだし……」

「あれ？ でもあれユウ君わざとやったんですよね？ なら負けてないんじゃないですか？」

「俺は違うとこで負けたんだよ……」

「とりあえずお礼ということで1ポイント差上げました」

「いいのか！？ そんなことして」

「レイン君はそれもOKって言ってました」

「へえ〜」

「現在のポイントは、アクア5p・ルナ&レイン3p・セシル&ユウマ2pとなっております！」

「次は何すんのよ」

「それは——」

第30話 夏休みも終わりが近づくと宿題で焦る! (後書き)

黒猫 「次回に続く!!」

ユウ 「考えてないだけじゃねえか」

黒猫 「ちゃんと考えてあるから」

ルナ 「怪しいですね」

第31話 食べ物への恨みほど恐ろしいものはない（前書き）

感想ありがとうございます！！

やっぱり貰えるとテンションが上がります！！

皆様のご期待にそなえられるよう精一杯がんばらせてもらいます。

第31話 食べ物の恨みほど恐ろしいものはない

【中央ブロック 中央広場】

「二回戦、どろけいの始まりだああーーーー！！！」

「「おおおおーーーー！！！」」

「ルールは簡単。この中央広場付近を使って、警護隊のグループとどろぼうのグループに別れて鬼ごっこをします。警護隊の人たちがどろぼうの人たちを全員この噴水がある場所——つまり牢屋に入れたら勝ちです！！ちなみに牢屋に入った人たちは、牢屋に入っていない仲間に触られるまで身動きができません。時間内逃げ切ったらどろの勝ち。逃げ切れなかったらけいの勝ちだっ！！！」

「それでグループはどうするのよ」

「クジ引きで」

「なんで持ってるんだ！？」

レインは前と同じように割り箸のクジを出した。

こいつまさかと思うがいつもこれを携帯しているのかっ！？

どろぼうチーム……アクア、ユウマ、男子生徒G

警護隊チーム……レイン、セシル、ルナ

「よし、始めるかっ！」

「絶対逃げ切って見せるんだからっ！！！」

「ねえ、なんかおかしい人いない？俺らのチーム」

「走るのあんまり得意じゃないですけど、がんばりますう!!」

男子生徒G「アクア様は命に代えても俺が守る!!」

「命は大丈夫だよねっ!？」

「ねえ、ほらよく見て! 絶対おかしいの混ざってる!!」

「制限時間は30分、……はじめ!!」

「いくわよっ! ユウマ、ダンジー!」

「ダンジーって絶対男子生徒Gのことだよなっ!？」

「ダンシセイトジートハ、ダレノコトデショウ？」

「お前のことだよ!!」 「」の前の男子生徒Gってのを失くせば、
ばれないとでも思ったか!？ あとカタコトっぽく喋るな!! カ
タカナだと読者が見づらいだろっ!!」

「ったく、お前はいちいちうるさいんだよ!! 俺はダンジーだっ
て」

こいつ今回は男子生徒Gと言わないつもりか!？

「二人ともここで一旦止まりましょ」

「「ういーーす」」

「こっからは別々に行動したほうがいいわ。特に相手チームは一人
を除いて頭脳派よっ!! 罠を仕掛けて来るかも知れないから慎重
にいきましょ!」

「任せとけて!!」

「俺はできればアクア様と一緒にこう——『いたぜっ!!』ちっ!
レイン団長かっ!」

男子生徒Gのレインを呼ぶ時のレイン団長というのが気になったが、
今はそんなことよりも逃げなければマズイ気がする!!
レインはオリエットの中で一番走るのが速かった気がするし。

俺達三人は蜘蛛の子のようにバラバラの方向に逃げた。
運良く男子生徒Gの方にいったみたいだから、俺は安全と見てもいいだろう。

「さて……どうしたものか」

相手のチームの中でもっとも怖いのはセシルだ。

あいつの頭のよさは尋常じゃない。

ルナもいるが、ルナは走るのが速くないうえ、純粹無垢な性格なはずだから多分いざという時にもなんとかなるだろう。

さてどうしようか……。

確かルール上一人でも逃げ切ったら勝ちだったよな？

なら俺はこのダンボールの中にも隠れとくか。

アクアは隠れるような人じゃないし、男子生徒Gは捕まってる恐れがある。

そうになると俺は隠れてるのが妥当だろう。



「ダンジー捕まえたぜ！」

「くっそ！」

俺は捕まってしまった。

レイン団長思ったより足速かったしな。

「上出来だよ。ポケットを全部探ってみて」

「おう！（ガサゴソ）通信機みたいなのが入ってたぜ？」

「終わるまで預からせてもらおうよ。そして二人ともちよっと」

「ゴニョゴニョ……………」

何を話してるんだ？

「それにしてもここまでうまくいくとは……」

「何がですか？」

「僕の立てた作戦だよ。まずダンジを真っ先に捕まえてくれと頼んだら、捕まえてきてくれた」

「それがどうしたんだ？」

「いまからアクアさんを捕まえに行ってくれ。二人とも」

「おっ、おう！」

「わっ、分かりました!!」

セシルが指示を出したら二人は探しに行ってしまった。

「ダンジ、いいこと教えてあげる。もうこのゲーム僕達に負けはないから」

なんだ？ こいつの自信たっぷりな態度は！？

「まずアクアさん。多分逃げ隠れする性格じゃないから、走り回って疲れるのがオチだよ」
確かに。

「そしてユウマだけど……あいつ物事考えながら行動するから。だつたら気づくだろうね」

「まっ、まさか!？」

「そう。一人でも逃げ切れれば負けないという事実だね」
「っ!？」

「だとすると行き着く考えがあるよね」。隠れば大丈夫って」
「……………」

「しかもこの広場に隠れるところは少ない。だからダンボールくらいしか隠れないと思うんだよね」

まずい！！　こいつの考えどおりだったら、俺達に勝ちはない！！

「それじゃっ僕は行ってくるね」

セシルは歩きながら、どこかへと行ってしまった。

「……くっ、くっ」

通行人の人が俺を見ている。

そりゃ、一人で笑ってるんだもん。見られないほうがおかしい。

「ハハハッハッ！！」

危ない危ない！！　まさか一個目の通信機が盗られると思っていなかった。

こういうこともあろうかと思ってもう一個予備に持ってきてよかったぜっ！

俺は、連絡を取った。

そしたら奴は、戻ってくると言った。

そして勝ったと思った。

だけど勝ってなどいなかったのだ。

あいつがいる限り……………。

第32話 プリンに醤油をかけるとウニの味がするってよく聞くけど……ほん

すいません!!

活動報告に書いたとおり風邪のため更新できませんでした……。

ユウ「サブタイトルがもうタダの質問じゃん！」

黒猫「思いつかなかったんだよ!!」

ユウ「逆切れかよ……」

第32話 プリンに醤油をかけるとウニの味がするってよく聞くけど……ほんと

「よっしゃー!! ダンジー、うまくこれたぜ!」

「さすがだぜ! 早く助けてくれ!!」

俺は助かると思った。

あいつとの距離が10メートル、5メートル、3メートルと徐々に縮まっていた。

この時も、まだ助かると思った。

だけどあいつとの距離が2メートルくらいになったら、突如建物の影からセシルが出てきやがった!

——予想通りというムカツク顔をして。

「ユウマ! 今すぐ逃げろ!!」

「遅いっ!!」

「くそっっ!! こいつでどうだ!!」

「っ!」

あいつはポッケに手を入れ、何かを投げた。

セシルは当たらないように避けた。

俺は、これはちよつと反則じゃないか? と思った。

「おい! ユウマ。物を投げるのは反則だぞ!」

「ほんとに投げてたらな!!」

「何!」

そう。あいつは何も投げてなどいなかったのだ。

そしてその一瞬の隙を突き、セシルの真横を通って範囲外に逃げようとした。

「さすがだね。けどもう………チェックメイトだ!!」
そしてアクアを連れてきた二人が、あいつを囲んだ。

ちょうど三角形に。

これではあいつの逃げ道がないと言っても、過言ではないだろう。
そしてもなく俺達は全員捕まった。



「にしてもなんで俺がもう一個通信機を持ってるって気づいたんだ？」

「まあ、話すと長くなるんだけど……。まず第一にどろ側のグループは時間があつたはず。だから逃げるときに通信機等の大事なものは、見つかりにくい場所に隠すよね？ まんがいち自分が捕まった時のことを考えてね。なのにポケットからすぐに見つかった……。だから僕はその時、『まさかもう一個隠してる！？』と思って、念のため物陰に隠れて様子を見てたのさ。ユウマならいつでも捕まえれたしね」

「なんか最後のセリフがムカツク」

「そういうことか……。これで俺の出番は、もうないわけだな」

「おう！　じゃあな」

「二度と近づくなよ」

「バイバイ〜」

「気をつけて」

「さよならです」

ダンジールという名の謎の？ 人物はどこかへと行ってしまった。

「この場合配点どうなるんだ？」

「ああ、俺達全員4ptでそちのチームで最後まで残ったお前が2pt、姉御が1pt」

「てことは、レイン&ルナが500円で、セシル&アクアが200円で俺が100円かっ」

「なんで？ まだ続けるでしょ？」

「それがね……」

俺はポケから携帯電話を取り出しみんなに見せた。

オリエットへ

至急メンバー全員で、ヒストン学園に集合。

遅れた奴は……地獄が待っていると伝えておけ。

ディオより

「「……………」」

「そつ、それじゃあ……景品配布です！！」

俺達は、景品を貰った。

普通ならここで感想とかを言ったりするんだが、最後にある地獄という単語が気になったから、俺達はすぐさま別れて、ヒストン学園に向かった。



【ヒストン学園 クエスト受託ギルド】

「おっ、きたな。お前ら宛てに依頼？　みたいなのが来ているそう
だぞ」

「アリアンスの指名で依頼を送ることなんかできるんですか？」

「普通にできるぞ。とりあえず……ホイ、これな。それじゃよろしく！！」

「あっ！　先生！！」

てかディオ先生なんか結構適当じゃね？　最近特に……。

「……あそこのたこ焼き早く行かないと売り切れるんだよな。たこ
焼き〜♪」

これはディオ先生じゃないよね。だって先生は生徒に手助けするだ
ろ。

たこ焼き＞生徒なわけないもんなっ！　俺の耳がすこしおかしいん
だな！

「とにかく見てみましょうよお〜」

「すいません。オリエットですけど……」

「お待ちしておりました。どうぞ！」

俺は受付の人から直に依頼書を受け取った。

なんか新鮮だな……。いつもと違って。

依頼書 オリエツトへ 依頼人 アリアンス

俺達のチームと手合わせ願えないだろうか？
自分達の実力を確かめたい。闘技場に来てくれ。
どうかよろしく頼む。

報酬 後日お知らせします。

「……………」

「とりあえず行ってみるか」
「そうね……」

第33話 その名はフォルトン！ B組のアリアンス！！（前書き）

テストが近いのでしばらく更新できません。
すいません……

第33話 その名はフォルトン！ B組のアリアンス！！

【ヒストン学園 闘技場】

「よし、ついた」

「どんな人たちなんだろう……」

「手合わせ願うくらいだから、強いんじゃない？」

「待たせたな。俺達がオリエットを読んだアリアンスだ」
ふいに後ろから声をかけられた。

俺と同じくらいの身長で髪の色は金。

いかにもガラが悪そうな感じがする。

そして腰にレイピアみたいな刀をさしている。

おそらくあれで戦うんだろう。

「俺達は一年B組のアリアンス。チーム『フォルトン』だ！ 純粹に自分達の実力を試したくて依頼した」

「あなた達も一年生でしょ？ だからちょうどいいかな、と思って。人数はこっち二人だけだ」

今度は隣にいた女の子が、口を開いた。

ルナと一緒にくらいかな？ 女子の中では高めの身長で、黒のロングヘアー。

見た目というか第一印象は………普通の女の子だな。
別に武器みたいなものも見えないし。

「それじゃ早速よろしく。報酬ってのはこれでいいか？」

ポケットから紙みたいなものを取り出した。

お菓子1000円券×3

「マジで!?!」

「そんなに驚くことか?」

「なんかさっきまでこれの為に争ってたみたいな感じよね」
「なんでこの人達は、そんなことが分かるんだ?」

「俺達二人に勝って始めて報酬だからな。それじゃ最初は……テトナから行くか?」

「別にいいわよ。それじゃ待ってて」

「なんか素っ気無くね!?!」

「別に」

「ほら!! 絶対そうだって!!」

あいつら何やってんだ?

なんか口論してるように見えるんだけど。

「ユウマ、どうしたの? ボーツとしてるけど」

「大方変なことでも考えていたんでしょ」

変なこととは失敬な!!

「ところで誰が行くか、だね。問題は」

「とりあえず姉御以外だろ」

「なんでですか?」

「だって相手の子と口調が似てるし。絶対どっちが喋ってるか分からないって」

「どういう意味?」

それは作者の文章力がないってことだろ？

黒猫「失礼な！！　せめて上手く文字表現ができないと言え！！」

「だからそれが文章力がないってことだろ？」

黒猫「もっとオブラートに言えってことだよ！！」

「このままだと話が進まないから先行かせてもらおうぜ！」

黒猫「あげくの果てに無視ですか！？」

「それじゃ私が行きます！」

「大丈夫か？　ルーは魔法だから、相手が近接系の攻撃だったらきつくないか？」

「そこは——努力でがんばります！！」

「努力じゃ無理だよね！？」

セシルの言うとおり努力でどうにかならないだろ。普通。

「大丈夫ですっ！　ユウ君とセシル君は心配しすぎですよ〜♪」

「いや心配しなきゃおかしいよね！？　絶対これ負けるパターンだよね！？」

「おいセシル！！　俺の心を読んだという突っ込みは！？」

「……………（サッ）」

「なんで気まずそうに目を逸らすの！？」

なんかムカツク。

「それじゃ、どちらかが気絶か降参したら負けで」

気絶したらと言うのは、合宿の時みたいに、闘技場には特別な結果が張られているらしい。

「それじゃ僕達は下がっていいようか」
「そうね」



「それじゃよろしく」
「こっ、こちらこそよろしくお願いします!!」

二人は挨拶した途端、互いに飛びのいた。

「セシルこれって!!」
「ああ、二人とも魔法特化種族だ!!」

「これでどうです!?!」
エアーツイスト
《双風の追撃!》」
「甘いわね。
フレイムシールド
《炎獄の盾》」

ルナの中級魔法は、あっけなく防がれた。
そして炎の盾も風と一緒に消滅した。

「なかなかおもしろい攻撃ね」
テトナは子供と遊んでるかのような表情で言った。
まるでバカにしているかのように。

第34話 クリスマス、それはリア充と子供の為にある日（前書き）

すいません。更新遅くなりました……。

テスト前の1～2週間の間は更新できません。

どうかご了承ください。

第34話 クリスマス、それはリア充と子供の為にある日

☆前回までのあらすじ☆

お菓子争奪戦をしていたオリエットの五人。

だが途中からオリエットへ依頼が入った。

それは手合わせをして欲しいという、一年B組のアリانس、『フォルトン』だった。

早速手合わせを始めた『オリエット』のルナと『フォルトン』のテナだった。

「なに？ このあらすじ」

黒猫「いや、だいぶ間が空いたから読者のみなさんが、忘れたかなって思っ

「変なところでサービス精神旺盛だな」

黒猫「そこ褒めるとこじゃね!？」

「がんばったー、がんばったー(棒読み)」

黒猫「何!？ その棒読み!」



ルナSIDE

「なかなかおもしろい攻撃ね」

「褒めてくれてありがとうございます……!」

参りましたね……。

まさか中級魔法が、こうもあっけなくふさがれるとは……。

ただでさえS Pの消費量が多いのに……。

「《風の斬撃》^{エアースライス}！！」

風の刃を自分の前に形成し、そのまま相手にぶつけた。

「無駄、無駄。《炎獄の盾》^{フレイムシールド}」

やっぱりその炎の盾で防ぎますか……。——なら！！

「《風の斬撃》^{エアースライス}！！」

「また同じの？ 懲りないわね。」

《炎獄の盾》^{フレイムシールド}」

「これでどうです！？ 《拳風碎牙》^{けんふうさいが}」

私は自分の手に風をまとりつけた。

そして思い切り殴った。

「ぐっ！？」

テトナさんは予想してない攻撃だったらしく、鳩尾に入りました。

後ろでは『魔法のなのに接近戦！？』『ルーのやつあんなこともで

きたのか……。』とか。

そりゃ、この技はどうしようもない時しか使いませんし。

まあ、いわゆる現時点での秘奥義みたいな感じの技です。

ただ単に殴ってるだけですけどっ——！！

「くっ！！」

私はそのままもう一回殴った。

「すいませんけど、勝つまで殴らせて貰いますっ！！」

私はひたすら無我夢中で殴った。

『鬼だ……。鬼がいる！！』『ルナちゃん……。』『普段では想像がつかないな』

別になんと言われようといいです！

ただ……。ただ……。——お菓子券が欲しいだけですからっ！！

「……………」

「あれ？ もう気絶しましたか？」

「あの女悪魔だ……」

「これはさすがに同情するかも……」

「頭を使った知的な勝利と言って欲しいですう」

「やってること全然知的じゃないよね!？」

確かにすこしやり過ぎた気がするかも知れませんが。

「とりあえず一回戦は勝ちですね」

「それじゃ誰がいく？」

「俺试试看いていいか？」

「なんで？」

「そりゃリーダーとしてのケジメみたいな？」

「まっ、負けるなよ。ユウ」

「おう、任せとけて」

俺は必ずこいつに絶対勝つ!!

そして……お菓子券を絶対ゲットするんだ!!

「さあ、始めようか」

「おしこい!!」

俺は萌芽刀を取り出した。

「行くぜっ! 《地龍閃・突》」

「おらよっ」と

相手は軽く避けた。

「そういえば名前なんだっけ？」

「俺か？ 俺はカイト。よろしくな!!」

言っただけと同時に思い切り突きをしてきた。

レイピアだから俺の刀より軽い為、攻撃速度が速い。
このままだとちょっとまずいか？

「なに考えてんだ、よっ!!」

「ぐはっ!!」

いつの間にか吹き飛ばされていた。
なんだ！？ まったく見えなかった……。

「まだいけるだろ？」

「くそっ……!!」

第34話 クリスマス、それはリア充と子供の為にある日（後書き）

ルナの心理描写が難しい……。
そして少なめ（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0256t/>

神様がミスした瞬間に

2011年12月3日21時45分発行